

東日本大震災から学んだこと

石巻支援学校からのメッセージ



宮城県立石巻支援学校

目 次

まうがき 宮城県立石巻支援学校 校長 櫻田博

I	3. 1 1からの記録	1
	1 石巻地区の様子	
	2 学校の記録	
II	それぞれの3. 1 1	35
	1 職員の手記	
	2 保護者の手記	
III	学校の再開に向けて	61
	1 通学手段の確保	
	2 給食の再開	
	3 医療的ケア体制	
IV	学校の再開と全国からの励まし	71
V	新たな備え	79
	1 津波への備え	
	2 避難所への備え	
	3 地域で生きるための備え	
VI	東日本大震災から学んだこと	100
VII	資料	107
	○学校の概要	

ま え が き

宮城県立石巻支援学校

校長 櫻田 博

3月11日に発生した未曾有の東日本大震災。

本校は、当日小・中学部の卒業式でした。小・中学部は、11時30分下校、高等部は臨時休業日であり、子どもたちの多くは、家庭にいたと思われれます。私は、体調を崩し卒業式を欠席していた小学部Sさんの卒業式を自宅で行い、担任と共に学校に戻る車中で地震に出合いました。まるで生き物のように動く地面や電信柱。今まで経験したことの無い揺れの大きさや長さ。大変な出来事が起こったことを直感的に理解しました。揺れが収まって学校に戻ると、玄関前には青ざめた顔をした職員。私は、すぐに職員を集め、次のような指示を出しました。

「災害対策本部の職員は、対策本部の仕事をするので学校に残ること。それ以外の職員は、家族等の安否確認のため年休で帰って良いが十分注意して帰ること。」

この指示から、東日本大震災に対する本校の危機管理が始まりました。それと同時に、児童生徒や地域住民が本校に避難してくるであろうということも予想していました。

「学校は地域と共にある」という教育的信条を掲げていた私は、避難所として本校を開くという覚悟をこの時既に決めていました。迷いはありませんでした。

結局本校は震災当日から、5月8日まで避難所を開設していました。学校は、5月12日に再開し、始業式・入学式を行いました。震災から学校再開までは、様々な不適応行動が子どもに現れました。しかし、学校再開後は、次第に子どもは本来の明るさや元気を取り戻し、現在は日常の教育活動が順調に展開され、教育面では復興の兆しがあります。しかし、今なお仮設住宅で生活をしている子どもや家族があります。震災は、多くのものを私たちから奪いましたが、震災から立ち直るべく必死で生きてきた子どもたち、家族、本校職員の姿があったことを忘れてはなりません。また、同時に被災地に日本中からの温かい支援がありました。本校も避難所として開設したものの、避難所としての指定はなく備蓄食料はありませんでした。食料調達に奔走していたとき、本校に米や野菜を届けてくれたのは、当初本校に避難していた地域の方々です。そして、宮城県教育庁特別支援教育室をはじめとする支援学校の教職員、宮城教育大学学生外、全国のボランティアの温かい御支援により避難所運営や教育復興を成し遂げる事ができたものと認識しております。改めて深く感謝申し上げる次第でございます。

私たちは辛いこともありましたが、日本中の強い絆を感じ貴重な経験をしました。

そこで、この経験を風化させることなく、今後の学校教育に生かすことが私たちの使命であると考えました。そのため、震災の中で子どもや職員はどのような経験をし、そこから何を学んだのかを記録し整理することにいたしました。それがお世話になった方々への感謝の気持ちを形にして示すことに繋がるものと思っております。

本稿は、東日本大震災の経験から学びとったことを「石巻支援学校からのメッセージ」として記録したものです。この記録集が、少しでも今後の防災教育や大災害への対応等に役に立つならば、私たちにとってこの上ない喜びであります。

I 3. 11からの記録

1 石巻地区の様子

本校学区は石巻地域といわれる石巻市，女川町，東松島市からなり，いずれも今回の震災で甚大な被害を受けた。幸い内陸よりに位置する本校は津波の被害を受けなかったが，海岸よりの児童生徒や職員の住居の多くが奪われた。

1) 本校学区の被害状況 (地元紙三陸河北新報の特別報道写真集から引用一部加工)

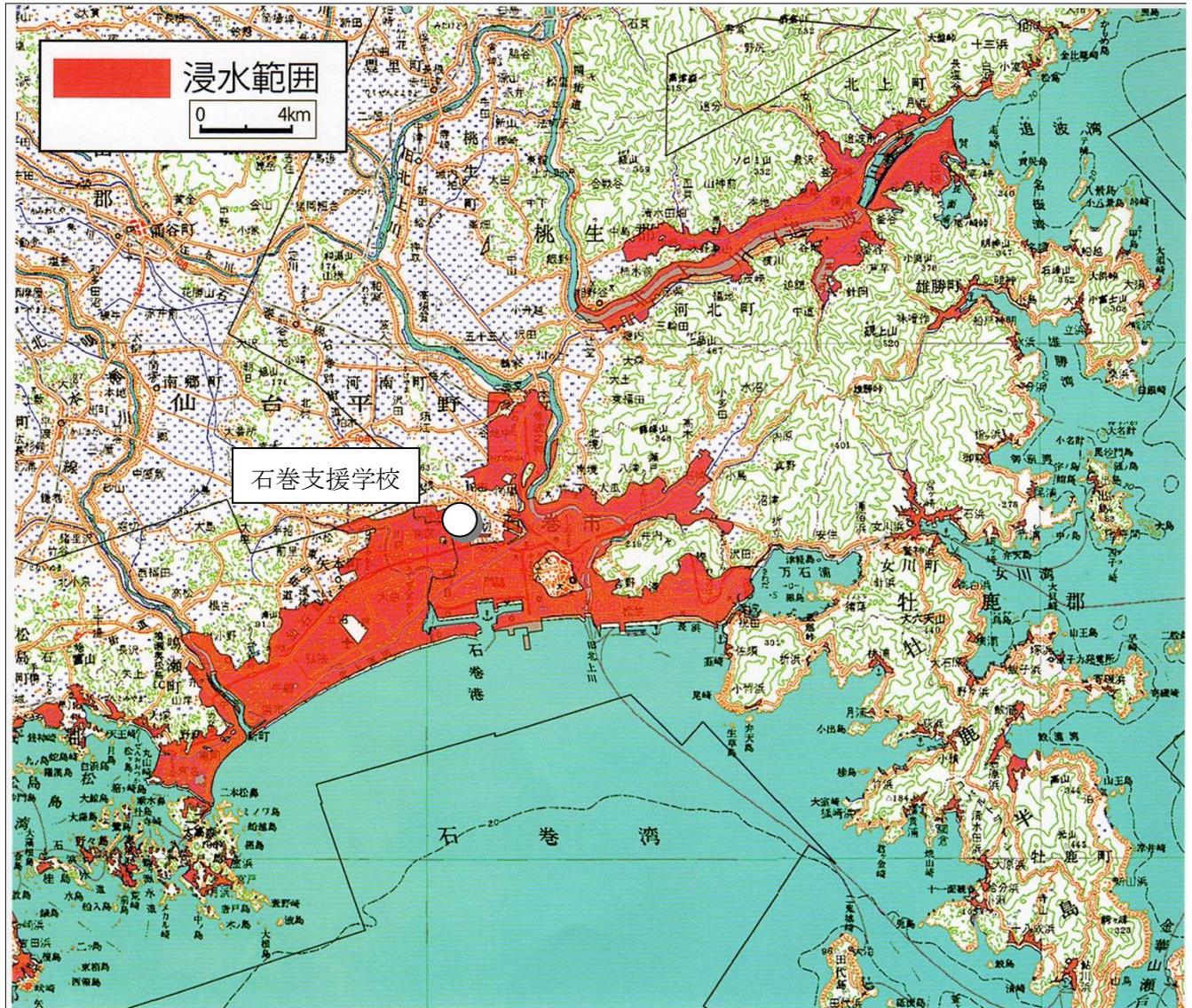


2) 大震災の主な被害状況

(10月31日現在 宮城県まとめ、避難施設数、避難人数は5月8日現在)

	死者	行方不明者	住宅全壊	住宅半壊	避難施設数	避難人数
石巻市	3, 180	688	20, 781	4, 099	108	9, 692
東松島市	1, 044	94	5, 432	5, 471	46	2, 734
女川町	572	381	2, 923	334	16	1, 627
石巻地区計	4, 796	1, 163	29, 136	9, 904	170	14, 053
宮城県計	9, 449	2, 006	76, 825	92, 415	407	34, 830

3) 石巻地方の浸水地域 (地元紙三陸河北新報の特別報道写真集から引用一部加工)

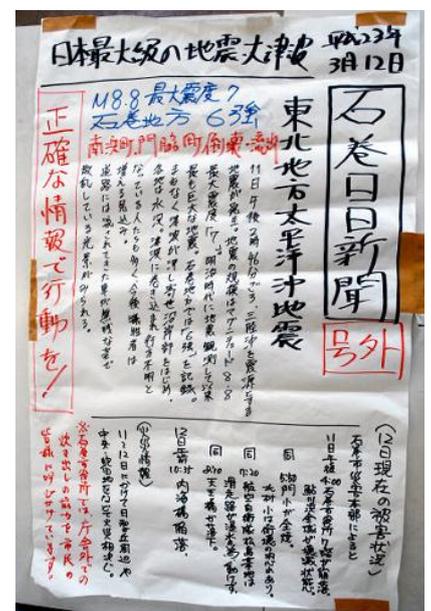


4) 石巻の様子

本校学区に当たる石巻市，東松島市，牡鹿郡女川町をエリアとして発行している地域紙，石巻日日新聞 (いしのまきひびしんぶん) は，印刷所を失いながらも，地域の人々の為に地域の情報を集め，翌日の12日から6日間にわたって壁新聞を発行し続けた。壁新聞は新聞ロール紙に，マジックペンで書き込み市内の避難所6箇所に張り出された。その記事を紹介する。

石巻日々新聞 号外 平成23年3月12日

日本最大級の地震・大津波
 マグニチュード8.8，最大震度7 石巻地方震度6強
 東北地方太平洋沖地震
 =門脇町・南浜町倒壊流出=



1 1日午後2時46分ごろ、三陸沖を震源とする地震が発生。地震の規模はマグニチュード8.8、最大震度「7」。明治時代に地震観測して以来、最も巨大な地震。石巻地方では「6強」を記録。まもなく津波が押し寄せ沿岸部をはじめ、各地は水没。津波に巻き込まれ行方不明となっている人たちも多く、今後犠牲者は増える見込み。道路には流されてきた車が無残な姿で散乱している光景がみられる。

(12日現在の被害状況)

石巻市災害本部によると

- 1 1日午後 4:00 石巻市役所7階が崩落。鮎川浜全域が壊滅状態
- 同 5:50 門脇小学校が全焼。北村小学校は倒壊の恐れあり
- 同 7:20 航空自衛隊松島基地は滑走路が浸水の為、動けず
- 同 8:10 天王橋が落下
- 1 2日午前10:35 内海橋陥落

(火災情報)

- 1 1~12に日にかけて日和が丘周辺や中央・蛇田地区などで火災が相次ぐ。

*石巻市役所では、庁舎外での炊き出しの協力を市民の皆様に呼びかけています。

正確な情報で行動を！

石巻日々新聞 号外 平成23年3月13日(日)

各地より救難隊到着

「被害状況が徐々に明らかに」東北関東大震災

石巻地区

南浜町、門脇町壊滅。渡波沿岸地区も同様か。女川地区、牡鹿地区、雄勝壊滅状態の模様。

東松島地区

赤井地区まで波が到達、床上浸水多数。13日朝の時点で水が腰の高さまで達している。

住民の話によると大曲地区壊滅。

「電気からライフライン復旧へ」

自衛隊、消防関係をはじめとする救難隊が、国内外から到着。現在、被災地で懸命な救助活動を行っている。一方、避難所では給水が行われている。

また、わずかだが食料も届いている。市当局は、毛布などが不足しているため、安全に確保できる市民に協力を呼び掛けている。また、市によると13日正午現在で、電気供給は蛇田地区から始まっている。

なお、石巻市立の保育所、幼稚園、小中学校は3月15日(火)まで、市女高、市女商は18日(金)まで臨時休校15日(火)に予定されている公立高校の合格発表は、22日(火)以降に延期する。

正確な情報で行動を！

全国から物資供給

石巻市内の大型店から食料、水、毛布など提供を受けている外、全国の自治体から支援物資が今後届けられる。石巻市は、総合運動公園にそれらをまず集積。その後、各避難所へ配布する。また、全国水道協会や他県からの給水車や飲料水が石巻に届けられている。

石巻市は13日、県を通して国へ避難所用テント（1千人収容）を要請した。14日午前、東内閣府副大臣が石巻入り。市長らと避難所や被害現場を視察。

「余震に注意」

14日も余震と見られる強い揺れが各地で起きた。茨城県沖ではM6.5を観測、気象庁は今後も震度5前後の強い余震や津波の可能性があるため、厳重な注意を呼びかけている。

東松島地区

東松島市では、避難所79ヶ所を開設。現在（14日朝）の総収容人数は、1万3千705人。所在不明者が407件、人数で1千人近い模様。

女川町

10mを超える巨大津波を受けて、高台にある町立病院、女川二小、女川第一中、総合運動公園を残し、壊滅状態。現在（14日）、自衛隊を中心に救助活動が開始されている。

「安否確認」

各避難所では避難者の名簿を作成している。安否を知らせるメモやメッセージが入り口近くに貼られている。

※避難所生活が長期化する可能性がありますので、協力をお願いします。

15日は冷え込む見込み。

ボランティアセンター設置

石巻市災害対策本部によると15日現在で確認がとれた被害状況は、石巻市南浜地区、門脇町3～5丁目、鮎川地区の2千8百世帯をはじめ甚大。避難所への避難人数旧市内で106ヶ所、3万8千6百33人。

このうち、指定避難所など約30ヶ所に15日午後現在、避難者名簿を設置、また同日、石巻専修大学に「ボランティアセンター」を設けた。

同本部では避難所の運営にあたるボランティアの協力を呼びかけている。「直接、石巻専修大で受け付けて下さい」とのこと。

「安否情報を放送」

ラジオ石巻（FM76.4）では連日、午前8時から午後7時まで避難所の避難者名簿を放送し

ている。情報の受け付けは日和山公園駐車場とラジオ石巻で行っている。

「介護ボランティア求む」

石巻市では各避難所に介護の必要なお年寄りが大勢いることから「お世話出来る人がいたら協力してほしい。

ボランティアが不足している避難所は次の通り。

- ・住吉小学校
- ・石巻高校
- ・石巻中学校
- ・住吉中学校
- ・中里小学校
- ・門脇中学校
- ・鹿妻小学校
- ・湊小学校
- ・渡波小学校
- ・好文館高校
- ・青葉中学校
- ・大街道小学校
- ・釜小学校
- 以上

「商店主らが炊き出し」

石巻市立町の商店、飲食店の有志らが12日から炊き出しを行い、汁ものや食材を無料で供給している。

石巻日々新聞 号外 平成23年3月16日（水）

支え合いで乗り切って

「全国から激励のメッセージ」

石巻市対策本部のまとめによると、同市内で避難している人は3万9854人。確認されているだけで死者は425人、行方不明者は1693人（雄勝、河南は不明）にのぼった。地震と津波によって日和大橋が通行不可。

内海橋は徒歩で通行できる。石巻大橋、開北橋、牧山トンネルは車で通行可能となっている。市内の幼稚園、保育所、小中学校は15日まで臨時休校だが、一部を除き、18日まで延期。食料の販売はヨーカドーあけぼの店、ヨークベニマル蛇田店、ロックタウン矢本などが一部で店頭販売を行っている。道路は南浜町がガレキで通行ができないほか、貞山、南中里、開北がまだ冠水している。ただし、三角茶屋周辺や市役所周辺など冠水がひどかった地域も徐々に下がってきており、通行可能な幹線道路が増えている。ただし、夜間はガレキや漂流物が道路に散在している為、「夜間は、外出を控えるように」と対策本部は呼び掛けている。

ライフラインは電気が公共施設、避難所を中心に徐々に復旧を始めているが、水道はもう少し時間がかかりそうだ。

電気が復旧すれば、一部コンビニなども営業が再開される見込み。多くの市民が避難している避難所では、インフルエンザなど感染症が流行している。そのためにひじの内側で口を覆ってセキやクシャミをするなど「咳エチケット」が大切。市内では徐々に復旧が始まり、全国から石巻地方に支援の輪が広がっている。

もう少しの間、避難者同士が支え合って「未曾有の災害を乗り切ってほしい」とのメッセージが全国から届いている。

「女川町5千人安否不明」

壊滅的な被害を受けた女川町でも約6千人が町立病院や総合体育館、女川一、二小学校など約11ヶ所に避難している。また旭が丘の高台にある住宅地は大きな被害もなく、自宅などで待機して

いる。

和歌山県や新潟県などからヘリコプター、レスキュー隊、自衛隊などが続々と到着し、女川第一中学校に対策本部を設置、ガレキの撤去作業や配給活動を行っている。避難した住民の中には、町内で津波に遭い、屋根の上にしがみつき、同町の沖合まで流されたものの、近くを航行中の船舶に救助された人もいる。しかし、未だに5千人の安否が不明のまま。

石巻日々新聞 号外

平成23年3月17日(木)

街に灯り広がる

「電気復旧1万戸超す」

東日本大震災から6日目過ぎた。甚大な被害を受けた石巻地方では、4万5千人以上が避難所で生活しており、安否確認はじめ、一刻も早い復旧と復興を願っている。東北電力(株)石巻営業所では、15日から復旧作業を展開しており、当初は368戸だが、16日午後5時現在では、1万1124戸まで復旧。全国から作業車と人員が石巻地方に集まり、少しずつだが街にあかりが灯り始めた。東北電力(株)によると、すでに復旧したのは石巻市役所や市総体、石巻署、病院では石巻赤十字、石巻ロイヤル、斎藤病院の3ヶ所、小学校は山下、中学校は門脇、石巻、青葉、蛇田。高校は石巻西、好文館、また浄水場は須江、蛇田、大街道と石巻水道取水口となっており、電線の経路によっては、周辺地域でも通電されたところもある。

県東部保健福祉事務所では、17日現在、市内3ヶ所で医療の提供を実施している。軽症は蛇田中避難所エアテント、石巻専修大学避難所エアテント、重症は石巻赤十字病院。持病の薬が無くなった人は「お薬手帳」を調剤薬局に持参すれば数日分は処方される。

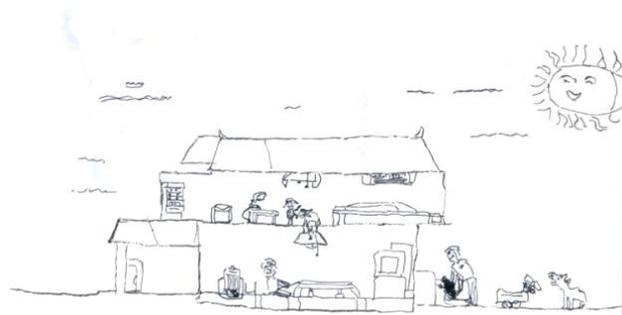
「希望が見えてきた！避難所にも通電開始」

東松島市の一部地域では、電気の復旧も始まった。災害対策本部が置かれている市役所や避難所などの公共施設が中心となるが、通電範囲は徐々に広がると見られる。

市立矢本第一中学校に避難している女性(59)は「あかりが灯った瞬間には、みんなで拍手して喜んだ。これで希望が見えてきた感じがする」と復旧とその先にある復興に期待を寄せていた。

同市教育委員会では卒業、修了式、今後の授業などの日程を協議しており、木村民雄教育長は「校内に避難者が居たとしても4月11日以降には、授業だけでも再開したい」と話した。

陸上自衛隊の復旧活動はすでに始まっており、赤井、鳴瀬地区などで人命救出や道路、ガレキの撤去作業を展開。16日からは給水車による活動も始まり、17日はロックタウン矢本やJR矢本駅前、大曲小学校など10ヶ所で実施した。



2 学校の記録

1) 避難所の記録 (3/11~5/8)

日付	学校の様子	避難者	教職員	物資等
3月11日 (金)	<p>14:46 地震発生(震度7)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・停電・断水・電話不通。 ・学校(体育館)を避難所に開設。 ・体育館/第一校舎のトイレを開放。 ・校内宿泊用布団/体育用マット ・高等部作業作品のろうそく/校内の石油ストーブ4台 ・余震が頻発。 ・学校にあったお菓子を食料として提供。 <p>夜中</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の対策会議。 	<p>夜中まで断続的に避難者が来る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の方 ・本校児童生徒の家族 ・帰宅困難者 <p>避難者 52名</p>	<p>玄関で避難者を受け入れ。</p> <p>校長・教頭 各学部主事 庁務・教諭数名が学校に残る。</p> <p>泊(21)名</p>	<p>学校内にあったお菓子の提供</p> <p>溜め置きの水</p>
3月12日 (土)	<p>6:00 給食室で米発見。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貯めおきの水を使い、鍋でご飯を炊く。 ・朝と晩、一人一個、塩おにぎりの提供。 ・プールの水を汲みトイレに使用 	<p>避難者 52名</p>	<p>一旦、食糧確保のために戻れる職員は戻り、食料を確保。</p> <p>出勤(38)名 泊(7)名</p>	<p>職員の体育着や教室のカーテンを衣類として提供</p>
3月13日 (日)	<p>8:00 対策会議。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒安否確認開始。 ・教職員持参のおにぎりを避難者に提供。 ・朝、晩食事の提供(おにぎり)。 	<p>避難者 67名</p>	<p>自転車、冠水の道路を徒歩で、10名ほど教職員が出勤。</p> <p>出勤(21)名 泊(7)名</p>	<p>自宅に戻った職員の持ち寄りの食料</p>
3月14日 (月)	<p>8:30 対策会議。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒安否確認。 ・地域ごとのグループ編成。 ・家庭、地区の避難所を搜索。 ・避難場所を体育館から第一校舎一階に移動する。 ・支援の必要度に応じた部屋割りを行う。 ・近隣の方、自宅へ戻る。 ・朝晩の食事に温かい汁物を提供。 	<p>石巻日赤病院から5名のお年寄り搬送</p> <ul style="list-style-type: none"> ・着の身着のままの单身/全介助等、支援の必要な方々が来る。 <p>退出 10名 避難者 62名</p>	<p>徒歩、自転車、知人の車等で教職員出勤。</p> <p>出勤(62)名 泊(11)名</p>	<p>校内のポータブルトイレ 暖を取るためダンボール ペットボトルで簡易湯たんぼ(重度重複障害の生徒) 地域の方から ・米/ガス釜</p>
3月15日 (火)	<p>9:00 職員打ち合わせ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員組織を安否確認と避難所運営に分ける。 <p>12:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女川高校教頭来校。 ・県教育委員会に連絡をする方法の確認。 <p>17:30 職員打ち合わせ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火の元管理を厳重に行なうことの確認。 ・お年寄りの方の介助。 	<p>石巻日赤病院から16名のお年寄り搬送</p> <ul style="list-style-type: none"> ・徘徊癖のあるお年寄り <p>避難者 78名</p>	<p>安否確認のため搜索活動</p> <p>出勤(30)名 泊(12)名</p>	<p>石巻祥心会 ・パン・米 卵5箱 高橋工務店 ・おにぎり 100個 (3/21まで提供の申し入れ) 地域の方から ・イチゴ</p>

<p>3月16日 (水)</p>	<p>6:20 職員打ち合わせ。 ・トイレ掃除・健康観察。 ・プールからの水汲み。 ・避難者自治組織立ち上げ。 毎日12時・16時 ・県教委へ学校の様子を報告する。 ・避難者の薬を受け取りに行く。</p> <p>安否確認 ・140名確認済み ・8名児童生徒のみ確認 ・8名不明 職員数名不明 21:30 ・自閉症のお子さんパニック</p> <p>*避難者名簿を市役所に提出</p>	<p>避難者 78名</p> <p>全介助のお年寄り3名搬送</p> <p>避難者 81名</p>	<p>安否確認のため 搜索活動</p> <p>出勤(37)名 泊(14)名</p>	<p>県から公用車 立正佼成会 ・おにぎり 100個 大橋商店 ・毛布/缶詰 給水車(毎日) 蛇田小 ・牛乳26本 ・ヨーグルト 26個 蛇田中 ・みかん11箱 渡辺拓朗議員 ・おにぎり 100個 (毎日の提供) 地域の方 ・ほうれんそう</p>
<p>3月17日 (木)</p>	<p>石巻市の「避難所」として認定。 避難者のストレス回避のために 話を聴くことの確認。</p> <p>各部屋に班長を置く。 Aコース教室(男) 8名 自活室(女) 8名 教室① 5名 紙工室(全介助) 6名 本部隣教室(重度重複の方) 6名 教室②(自閉症) 8名 教室③(赤ちゃんの家族) 4名 プレイルーム 26名</p> <p>夜間巡視2時間おきに実施。</p>	<p>避難者 81名</p>	<p>安否確認のため 搜索活動</p> <p>出勤(36)名 泊(11)名 ・市役所職員1名</p>	<p>石巻日赤病院 ・食料品多数 ・毛布 ・紙パンツ・ オムツ ・歯ブラシ ・トイレトペ ーパー 石巻市 ・毛布 ・食料品 教職員から 保護者から 卒業生保護者 から 名古屋大韓民 国総領事館から</p>
<p>3月18日 (金)</p>	<p>7:00 職員打ち合わせ 8:30 県内支援学校からボランティア ・古川支援6名 2泊3日 ・金成支援10名 日帰り ・3月一杯、応援に来る。 12:00 電気復旧!! 17:00 水道復旧!!</p>	<p>避難者 81名</p>	<p>安否確認のため 搜索活動</p> <p>出勤(42)名 泊(16)名 ・市役所職員1名</p>	<p>石巻市 ・カップめん ・菓子パン (朝晩用の食 料が毎日配布) ・灯油</p>
<p>3月19日 (土)</p>	<p>8:30 スタッフ打ち合わせ ・「介助班」「清掃班」「調理班」「救護 班」「受付」で組織する。 ・水道復旧したが浄化槽故障のため、 トイレの水は使えず。 ・ごみの回収始まる。 ・ガス業者、プロパン点検。</p>	<p>19:50 発熱 救急車搬送</p> <p>避難者 81名</p>	<p>安否確認のため 搜索活動</p> <p>出勤(21)名 泊(9)名 ・市役所職員1名</p>	<p>石巻市 ・おにぎり 170個 ・ドリンクゼリ ー120個 ・菓子パン ・オムツ等日用品</p>

3月20日 (日)	徳島県教育委員会来校。 日赤医療チーム来校。 自衛隊必要物資の聴き取り。 ボランティア ・古川支援 11名 ・小牛田高等学園 1名	お年寄りの方 市内の老人福祉 施設へ数名ずつ 移動が始まる。 退出 9名 避難者 72名	安否確認のため 搜索活動 出勤(38)名 泊(13)名 ・市役所職員1名	石巻市 ・カップめん 96個 ・クラッカー 70個 ・ジュース
3月21日 (月)	8:30 職員打ち合わせ。 ・避難者の方のストレス増 ・生活のリズム作りの意識 ・洗顔の習慣で衛生保持 拓桃医療療育センター職員来校。 ・田中先生, 葉補充 小学部プレイルームをリフレッシュ スペースとして開放する。 ・卓球台を置く。	避難者の方の着 替えがほしい。 お年寄りの方を 救急車搬送 退出 5名 避難者 67名	安否確認のため 搜索活動 出勤(25)名 泊(11)名 ・市役所職員1名	石巻市 ・おにぎり 162個 ・パン 81個 地域の方から ・梅干 株式会社 ブルボン ・ご飯/味噌汁 石巻市に大人 下着と紙お むつを要請
3月22日 (火)	ボランティア ・古川支援 4名 ・小牛田高等学園 3名 養護教諭ボランティアが入る。 ・泉館山高等学校 2名 19:00ウクレレ演奏会開催。 児童生徒, 教職員全員の安否確認が終了する。	日赤へ避難者の 薬受け取りへ 下痢・嘔吐症状 夜間病院へ搬送 避難者1名受け 入れ 退出 14名 避難者 54名	出勤(41)名 泊(8)名 ・市役所職員1名	石巻市 ・菓子パン 120個
3月23日 (水)	宮城県高等学校入学者選考試験合格 発表。 ・避難所の子ども3名と家族が見に行 く。 8:30職員打合せ	じんましんで病 院へ搬送。 一家族(4名) を受け入れる。 トイレでお年寄 り転倒する。 避難者 58名	出勤(38)名 泊(13)名 ・市役所職員1名	小牛田高等学 園 ・食料品 石巻市 ・おにぎり ・パン ・缶詰 ・紙おむつ等
3月24日 (木)	養護教諭ボランティアが入る。 ・柴田高等学校 1名 ・仙台二華高校 1名	腹痛で病院へ搬 送。 避難者 58名	出勤(35)名 泊(8)名 ・市役所職員1名	石巻市 ・おにぎり ・パン ・調味料 ・缶詰 ・カップめん ・歯ブラシ ・マスク ・飲み物 ・日用品
3月25日 (金)	ベガルタ仙台選手が来校する。 小学部プレイルームで古着市を開催	避難者 58名		石巻市 ・おにぎり ・パン

	<p>(18:00～) する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古着2点 ・肌着2点 ・スエットスーツ1セット ・替えの無い人へズボン <p>4月から本校職員の泊まりのシフト表作成。</p> <p>セコムの夜間巡視始まる。</p>		<p>出勤(12)名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学部から毎日の避難所運営協力者を2名ずつ出す。 <p>泊(7)名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市役所職員1名 	<ul style="list-style-type: none"> ・調味料 ・缶詰 ・野菜 ・シャンプー ・レトルトカレー ・肌着 高政 ・かまぼこ 100枚 地域の方 ・梅干
<p>3月26日 (土)</p>	<p>ボランティアが交替。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・船岡支援 3名 ・名取支援 5名 <p>養護教諭ボランティアが交替。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米山高校 1名 ・伊具高校 1名 <p>郵便局、避難者の郵便物回収を始める。</p>	<p>避難者 58名</p>	<p>泊(7)名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市役所職員1名 	<p>石巻市</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おにぎり ・パン ・カップめん ・ソーセージ
<p>3月27日 (日)</p>	<p>朝刊が届き始める。</p> <p>仮設住宅入居申込書の配布。</p> <p>徳島県教育委員会視察。</p> <p>兵庫県保健師2名来校。</p> <p>夕飯の受け取りをセルフ方式に替える。</p> <p>灯油が不足気味。</p> <p>ボランティア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名取支援学校 5名 ・船岡支援学校 3名 ・伊具・米山高等学校 2名 	<p>退出 2名</p> <p>避難者 56名</p> <p>病院搬送 2名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・胃痛 ・発熱 	<p>泊(6)名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市役所職員1名 	<p>石巻市</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワセリン (乾燥防止) ・携帯かいろ ・大型やかん ・パン ・コーヒー ・おにぎり ・牛乳
<p>3月28日 (月)</p>	<p>7:20</p> <p>震度5弱の余震(宮城県沖震源)。</p> <p>・津波注意報発令</p> <p>名古屋大学病院から医師団来校。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健室で希望者を診察 <p>ボランティア交替。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名取支援学校6名来校 ・船岡支援学校 <p>夜間当番を2時間交替にする。</p>	<p>退出 1名</p> <p>避難者 55名</p>	<p>ボランティア・避難所自治組織に仕事をお任せしながら学校再開に向けた準備を始める。</p> <p>泊(5)名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市役所職員1名 	<p>石巻市</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんぶり容器 ・おにぎり ・パン ・ねぎ ・お茶 <p>名取支援学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハンドクリーム ・湯たんぽ ・服 ・消毒液 ・電池 ・バケツ
<p>3月29日 (火)</p>	<p>4月から自助努力で食事を作ることに決定。市会議員(渡辺さん)よりガス釜の借用。</p> <p>9:00</p> <p>日赤より山口県医師団来校。</p> <p>NHKテレビ1台設置。</p> <p>10:00</p>	<p>退出 4名</p> <p>避難者 51名</p> <p>夜間救急搬送 1名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・胃痛 <p>救急搬送 1名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・持病の発作 	<p>泊(5)名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市役所職員1名 	<p>薬剤師会より薬</p> <p>NHK</p> <ul style="list-style-type: none"> ・携帯ラジオ 20台 <p>石巻市</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パン

	<p>学校のお風呂で入浴開始。 ・ガスの残量が十分でなく1週間に一回。 日本介護専門協会から職員来校。 石巻郵便局 郵便変更届の配布。 4月以後の避難所運営について石巻市との話し合いを行なう。 19:45 震度4余震 (福島沖)</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・ねぎ ・タオル ・石鹸 ・キャベツ ・豚肉・ゴミ袋 ・ゼリー ・ネクター ・りんご ・カップめん
3月30日 (水)	<p>朝食もセルフ方式に替える。 静岡県藤枝支援学校教員ボランティアとして来校。 名取支援学校 8名 石川県心のケアチーム来校。 兵庫県職員視察。 鳥取県教育委員会視察。</p>	<p>退出 3名 避難者 48名 卒業生(自閉症)ストレスによる行動目立つ。 夜間 発熱1名 嘔吐下痢1名</p>	<p>泊(5)名 ・市役所職員1名</p>	<p>石巻市 ・洗濯用洗剤 ・食パン ・トマト ・きゅうり 石巻日赤 ・うがい薬 ・マスク</p>
3月31日 (木)	<p>東海大学医師団チーム来校。 はらから福祉会来校。 徳島県教育委員会来校。 石巻市より2名の避難者について受け入れ要請あり。 臨時職員会議。 16:14 震度4余震 避難所生活の約束事を壁に掲示</p>	<p>退出 1名 避難者 47名 卒業生(自閉症)ストレスによる行動目立つ。集団から分け別室へ。</p>	<p>泊(8)名 ・市役所職員1名</p>	<p>高政 ・揚げたてさつま揚げ 石巻市 ・しょうゆ ・にんじん ・おにぎり ・パン 石巻日赤 ・菓</p>
4月1日 (金)	<p>7:15 震度3余震 学校再開に向けて部屋割りの見直し。 平成23年度のスタート。 NHKテレビ視聴希望の聴き取り調査。 ・テレビ視聴の約束事を決める。</p>	<p>退出 1名 避難者 46名 夜間 発熱 自閉症の生徒・卒業生のストレスケア</p>	<p>泊(3)名 ・市役所職員1名 転入職員出勤着任式</p>	<p>石巻市 ・スポーツドリンク ・おにぎり ・パン ・ロールケーキ ・カップめん ・チンゲン菜 学校納入業者 ・お菓子 地域の方 ・衣類</p>
4月2日 (土)	<p>徳島教育委員会来校。</p>	<p>退出 8名 避難者 38名 救急搬送 1名 自閉症の生徒・卒業生のストレスケア</p>	<p>泊(3)名 ・市役所職員1名</p>	<p>石巻市 ・きゅうり ・にら・レタス ・チンゲン菜 ・大根・ゴミ袋 ・パン ・おにぎり</p>
4月3日 (日)	<p>県特別支援教育センター所長来校。 石巻地区動物救護センター来校。 ・犬のえさ配給 東海大医師団6名来校。</p>	<p>退出 4名 避難者 34名 入院 1名 体調不良 3名</p>	<p>泊(3)名 ・市役所職員1名</p>	<p>無し</p>

		重度重複障害の生徒、肺炎 自閉症の生徒・卒業生のストレスケア		
4月 4日 (月)	読売新聞取材。 徳島県教育委員会来校。 千葉県看護師2名来校。 兵庫県臨床心理士チーム来校（兵庫ハート：阿部昇さん）。 東海大医師団6名来校。 17：45 震度3余震	退出 2名 避難者 32名 救急搬送 1 コインランドリーでの洗濯が経済的に負担 自閉症の生徒・卒業生のストレスケア	泊（2）名 ・市役所職員1名 職員室机移動。	石巻市 ・おにぎり ・パン ・カステラ
4月 5日 (火)	新しい部屋割り にする。 ・できるだけ家族単位 一斉に布団干し・部屋の掃除を教職員も加わり行う。 Aコース教室 5名 自活室 2名 教室① 1名 紙工室 4名 教室② 1名 教室③ 4名 本部隣教室（重度重複の方）3名 避難所運営を自治組織に任せる方針で話し合いを行なう。 東海大医療チーム5名来校。 TBS取材。 読売新聞取材。 湯たんぼ一家庭に一つ配布。	退出 2名 避難者 30名 救急搬送 自閉症の生徒・卒業生のストレスケア 卒業生の自閉症の方、数年ぶりにてんかん発作を起こす。	泊（2）名 ・市役所職員1名	石巻市 ・おにぎり ・菓子パン ・まんじゅう ・食パン ・カップ麺 宮城クリニック ・生活用品セット提供の申し入れあり。 11世帯が希望。 ・カセットコンロ ・やかん ・鍋 ・衛生用品等
4月 6日 (水)	東北大学歯学部チーム3名来校。 東海大学医療チーム5名来校。 東部児童相談所職員来校。 日赤医療チーム来校。 県教育委員会来校。	退出 1名 避難者 29名 自閉症の生徒のストレスケア	泊（5）名 ・市役所職員1名	石巻市 ・おにぎり ・菓子パン ・カップ麺 ・お茶
4月 7日 (木)	ボイラーの故障。 蛇田中で入浴サービス開始。 石巻市保護課来校。 ・二次避難場所の説明会実施について 東海大学医療チーム5名来校。 東松島市カノン職員来校。 NHK取材。 23：30 震度6強余震 ・みな落ち着いて対応する。 ・ 停電／断水	避難者 29名	泊（5）名 ・市役所職員1名	石巻市 ・スポーツドリンク ・お茶 ・ユンケル ・おにぎり ・菓子パン
4月 8日 (金)	石巻市二次避難場所説明会。 電気復旧。 日赤医療チーム来校。	避難者 29名	泊（5）名 ・市役所職員1名	石巻市 ・カップ麺 ・牛乳

	神奈川県進和学園職員来校。 ・ボランティア希望		第一回職員会議。	
4月9日 (土)	水がなくなり渡辺桂子先生宅に汲みに行く。 日本障害フォーラム(JDF)5名来校。 避難者の方々、学校再開に向け二次避難場所の準備と優先的入所を市役所に要望。 夕方水が出るが濁り水。	避難者 29名 風邪/1名 神経痛/1名	泊(5)名 ・市役所職員1名	石巻市 ・キュウリ ・トマト ・いちご ・水 ・お茶 ・パン ・おにぎり JDF宮城支援センター ・米 ・そば ・うどん ・にんじん ・ジャガイモ ・タマネギ ・トマト ・キャベツ
4月10日 (日)	石巻警察署生活安全課パトロールで来校。	避難者 29名 避難者の方々、石巻市に学校再開に向け第二次避難場所の紹介をお願いに行く。 頭痛/1名	泊(5)名 ・市役所職員1名	石巻市 ・ジャガイモ ・アルミホイル ・おにぎり ・菓子パン
4月11日 (月)	本日から2泊3日で宮城教育大学学生がボランティアで入る。 (~30日まで) 17:15 震度5弱余震(福島震度6弱) ・余震は3・11以来400回を超える。	避難者 29名 自閉症の生徒のストレスケア(家庭用ゲームの貸与) 肢体不自由の生徒のストレスケア(プレイルーム)	泊(5)名 ・宮教学生 3名 ・市役所職員1名 研究全体会 運営計画丁合	石巻市 ・菓子パン ・コーンスープ ・おにぎり
4月12日 (火)	足湯タイムを実施。 ・毎日14時から行なう。 学生ボランティアが学習指導。 ・20時から中高生を対象に学習やおしゃべりタイムとする。	避難者 29名	泊(5)名 ・宮教学生 3名 ・市役所職員1名 心のケアのための家庭訪問①	石巻市 ・スパム ・みかん ・バナナ ・菓子パン ・おにぎり
4月13日 (水)	石巻市報が届く。	避難者 29名	泊(5)名	石巻市 ・つえ・ソース

	20:00 石巻福祉事務所職員と避難者代表で今後の生活について話し合いを行なう。		・宮教学生 3名 ・市役所職員 1名 心のケアのための家庭訪問①	・菓子パン ・ロールケーキ ・ケチャップ ・料理酒 ボーイスカウト ・フェイスタオル
4月14日 (木)	兵庫県臨床心理士チーム来校（兵庫ハート：阿部昇さん）。 日本経済新聞取材。 河北新報取材。	避難者 29名 重度重複障害の生徒 肺炎で入院 自閉症の生徒 てんかん発作や睡眠不足	泊（5）名 ・宮教学生 3名 ・市役所職員 1名 心のケアのための家庭訪問①	石巻市 ・菓子パン ・おにぎり
4月15日 (金)	石巻市保護課来校。 ・バス時刻表掲示 ・学校と避難者代表と石巻市の話し合いの日程調整 兵庫県臨床心理士チーム来校（兵庫ハート：阿部昇さん） 部屋ごと電気釜で御飯を炊くことにする。	避難者 29名 大人用おむつが不足	泊（5）名 ・宮教学生 3名 ・市役所職員 1名 心のケアのための家庭訪問①	石巻市 ・野菜ジュース ・コーヒー・ガム ・菓子パン 宮城クリニック ・生活応援セット支給
4月16日 (土)	22:00 小さい余震あり。	避難者 29名 自閉症生徒に手足の痙攣 頭痛／1名	泊（5）名 ・宮教学生 3名 ・市役所職員 1名	石巻市 ・菓子パン ・おにぎり
4月17日 (日)	大学生ボランティア ・退出した方の布団干し 宮城教育大学菅井教授／拓桃医療療育センター田中医師／理学療法士「なのはな会」来校。 石巻警察署パトロールに来る。	避難者 29名 救急搬送 1名 身体のしびれ	泊（2）名 ・宮教学生 3名 ・市役所職員 1名	石巻市 ・パン ・おにぎり 市会議員渡辺さん ・うどん ・油揚げ ・ねぎ
4月18日 (月)	大学生ボランティア ・学習支援 ・タオルケット洗濯 第一回校務部会。	避難者 29名	泊（4）名 ・宮教学生 3名 校務部会	石巻市 ・おにぎり ・パン ・カップ麺 ・お茶
4月19日 (火)	学校・避難者・支援員・市役所の四者で今後の避難所運営について話し合い。 石巻警察署パトロール。	避難者 29名	泊（1）名 ・宮教学生 3名 *管理職が宿泊	石巻市 ・カレーパン ・あんパン ・スープ

	石巻北高校に体育館貸与。 ・避難所となり体育館が使用不可 ・高総体に向け部活動の練習 宮城教育大学中井教授来校。 河北新報取材。 雪が降る。		することにする。 委員会	・野菜ジュース ・お茶 ・おにぎり
4月20日 (水)	養護教諭が定期的に環境チェックを さらに細やかに行なう。 兼務教職員の兼務終了。 学校再開に向けた避難所スペースの 再検討。	避難者 29名 腹痛／1名	泊(1)名 ・宮教学生3名	石巻市 ・おにぎり ・パン
4月21日 (木)	1:00 小さい余震 10:00 避難所のみなさん、バーベキューに出 掛ける。 新潟県から薬剤師来校。 被災地障害者センター宮城の職員来 校。 13:00 小さい余震あり。 宮城県内小・中学校再開。	避難者 29名	泊(1)名 ・宮教学生3名 運営委員会	石巻市 ・おにぎり ・パン
4月22日 (金)	東京都から染谷先生来校。 ・肢体不自由の方のためのリラクゼー ション	退出 1名 避難者 28名	泊(1)名 ・宮教学生3名 職員会議	石巻市 ・おにぎり ・パン
4月23日 (土)	石巻警察署／石巻市保健推進課 巡回のため来校。 石巻市より食事は弁当支給の方向で 話が進んでいる。	避難者 28名	泊(1)名 ・宮教学生3名	石巻市 ・おにぎり ・パン ・野菜ジュース ・スポーツドリ ンク ・クッキー
4月24日 (日)	避難者の方から要望あり。 ・家庭用常備薬がほしい。 ・必要物品を市に要求できるようにし たい。 ・食事づくりを輪番で行ないたい。 ・情報は回覧し全員に伝わるようにし たい。	避難者 28名 救急搬送1名 自閉症生徒発熱	泊(1)名 ・宮教学生3名 ・自治連2名	石巻市 ・おにぎり ・パン ・雨合羽 ・飴
4月25日 (月)	石巻市／学校／避難者代表との話し 合い 避難所運営は学校職員から自治体組 織へシフトを替えていく。	避難者 28名	泊(1)名 ・宮教学生3名 ・自治連2名 スクールバス 打合せ	石巻市 ・パン ・お菓子
4月26日 (火)	外部来校者等なし。	避難者 28名	泊(1)名 ・宮教学生3名 ・自治連2名 医療的ケア検討 委員会	石巻市 ・弁当 ・串団子

4月27日 (水)	石巻市との話し合い ・学校の避難所を5/8に閉鎖し二次避難所へ移動の決定 テレビ朝日取材 石巻市から避難者の方へ移動の説明会	避難者 28名	泊(1)名 ・宮教学生3名 ・自治連2名 心のケアのための家庭訪問②	石巻市 ・弁当
4月28日 (木)	テレビ朝日取材 危機管理対策委員会	退出 4名 避難者 24名	泊(1)名 ・宮教学生3名 ・自治連2名 心のケアのための家庭訪問②	石巻市 ・弁当
4月29日 (金)	東京都からボランティア(荒井さん)来校	退出 6名 避難者 18名	泊(1)名 ・宮教学生3名 ・自治連2名	石巻市 ・弁当
4月30日 (土)	宮城教育大学附属支援学校今野副校長来校	避難者 18名	泊(1)名 ・自治連2名 ・東京都荒井さん	石巻市 ・弁当
5月1日 (日)	長野県美容師(永田さん)来校 ・避難者さんの散髪と洗髪 兵庫県臨床心理士チーム来校(兵庫ハート:阿部昇さん) ・『子どもの広場』の実施計画の話し合い TBS取材	退出 4名 避難者 14名	泊(1)名 ・自治連2名 ・東京都荒井さん ・大阪ボランティアさん	石巻市 ・弁当
5月2日 (月)	『子どもの広場』の実施 TBS取材	避難者 14名	泊(1)名 ・自治連2 ・東京都荒井さん 心のケアのための家庭訪問②	石巻市 ・弁当
5月3日 (火)	市議員渡辺さんと学校の話し合い 石巻市から二次避難所への移動取りやめの連絡	避難者 14名	泊(1)名 ・自治連2名	石巻市 ・弁当
5月4日 (水)	市議員渡辺さんのはからいで避難所の移動が可能と連絡あり	避難者 14名	泊(1)名 ・自治連2名	石巻市 ・弁当
5月5日 (木)	・避難所は5/8に閉鎖			
5月6日 (金)	避難所閉鎖に向け避難者の方引越し準備			
5月7日 (土)	・学校にある備蓄品を配布		心のケアのための家庭訪問②	
5月8日 (日)	避難所閉鎖 ・雨の中、石巻市の軽トラックで引越し(13:00) ・裏区会館と仲区会館の二つに分かれる。	避難者 14名		

石巻支援学校 避難所運営（3／11～5／8）の記録

石巻支援学校 教諭 片岡 明恵（震災当時：中学部主事）

●プロローグ

桜の淡い桃色…若葉の緑…夏の青空…木々の紅葉…季節は確かに移ろっていたはずなのに、いつの間にか今日を迎えている不思議な感じにとらわれています。ずっと昔のことに思えたり、時間が止まっていたのか、何か夢でも見ていたのかという錯覚に陥ったり、私の体内時計はまだ少し、いつもと違う速さで時を刻んでいます。

それでも確実に、着実に、力強く明るい心で、石巻支援学校の子どもたちは前を歩き始めています。5月12日、待ちに待った学校が再開した時、子どもたちの輝く瞳に多くの教職員が心から感動しました。学校は子どもたちの希望の光に支えられて、日々、教育活動を進めてきたことを実感しました。学校の、保護者の、地域の“希望の光”となる子どもたちを、これからも守り輝かせていくことが私たちの使命です。

そのためにも、今、この震災の記録を語り継いでいかなければなりません。今回の悲しい体験を次の幸せに生かすために「3・11からの石巻支援学校」を振り返ります…。

●3／9（水）震度5の地震…そして校長先生の危機管理

3月9日（水）11時45分頃、給食室に向かおうとした瞬間、震度5の地震がありました。久々に大きな地震でした。どの学級も普段の避難訓練の成果があり、みな冷静に机の下で身を守っていました。教職員の多くがほっとした表情を見せた時、校長先生が言いました。

「卒業式でも大きな地震があるかもしれない。いざという時の動きを考えておくように。」

●3／11（金）卒業証書授与式後…思いもよらぬ大地震…学校は避難所に

二日後の11日（金）は、第29回小学部・中学部の卒業証書授与式でした。朝の打ち合わせで、地震を想定した簡単な行動確認がとられました。卒業式は無事に終了し、温かい感動が学校中を包んでいました。

子どもたちも保護者も帰り、教職員が卒業式の余韻に浸っていると、14時46分、「ゴゴゴッ」という鈍い地鳴りと共に体験したことのない大きな揺れが襲ってきました。あまりの大きな揺れに、一瞬、頭が真っ白になりました。2、3分は揺れていたでしょうか…。揺れが落ち着き、玄関に集合すると、先程まで優しい日差しと青空だった空から、急に冷たい雪が降ってきました。大きなぼたん雪でした。

教職員の表情は顔面蒼白でした。

誰一人、話す者もいませんでした。冷たい雪と数分おきに頻発する大きな余震に恐怖で胸がいっぱいになりました。その時、校長先生から指示が出されました。

「災害対策本部の職員は残るように。それ以外の職員はくれぐれも気を付けて自宅に戻り、家族の安否を確認するように。」

職員のそれぞれが不安な表情で帰っていきました。

私は災害対策本部の一員として学校に残りました。管理職、各学部主事、庁務さん、近隣に住む独身の男性教諭が残りました。

校長先生の指示ですぐに玄関にストーブとラジオを出しました。校舎内を一回りすると、壁や床に亀裂が入ったものの、数年前の宮城北部地震の時にできるだけ倒れそうなものを固定する作業を終えていたため、物が倒れる被害はそう多くはありませんでした。しかし棚の中の散乱具合はひどく、(復旧に時間がかかるな…)と感じていました。この時、学校の外の状況はまったく分かっていませんでした。

すぐに電気・水道・電話・メールが使えなくなりました。4時半ごろから、玄関のストーブの明かりとラジオの音を頼りに近所の方が集まってきました。ライフラインが全て止まった混沌とした中で、多くの方が求めたのは心の安心だったのでしょうか。「どうぞ、中に入ってください。」と言うと、皆さん「よかった…」「すみません」と言いながら、少しだけほっとした表情を見せてくださいました。

地域の方が次々と学校に向かってきたことから、校長先生が体育館を避難所として提供することを決断しました。

私たち教職員はすぐに各教室にあるウレタンマットを回収し、体育館のマットと合わせて床に敷きました。学校中の石油ストーブも集めました。そして、校内宿泊学習のために用意している布団を全て体育館に運びました。さらに役立ったのは高等部生徒が作業学習で作成していたたくさんのろうそくでした。体育館の隅に灯りを置き、安心していただくようにしました。

そして地域の方が避難してくるたびに、場所を指定し布団をお渡しし、休んでいただきました。トイレの水も流れなくなっていたので、紙類は別の容器に入れていただくことを約束として使っていただきました。



●家族に会えない…水がない…灯りが無い…食料がない…情報がない…不安な長い毎日

夜になると、家に向かったはずの職員数名が真っ青な顔で戻ってきました。そして振り絞るように町の中の様子を語り出しました。

「石巻はとんでもないことになっています…あんな光景…信じられない…。道路には水があふれ、屋根の上に車があったり…ありえない状況です。もう私…家には帰れません。」

学校に残っていた者は避難所の準備に躍起となっていたため、初めてこの時、地震の被害の大きさを知ることとなりました。

夜中になっても、多くの方が次々と避難してこられました。中には体温調節の難しい重度・重複障害の生徒の家族もありました。ずぶぬれになった帰宅困難者の方もいました。着替え用においていた体操着をお貸ししたり、教室のカーテンを外し身を温めたりしてもらいましたが、決して十分ではありませんでした。それでも本校の児童生徒を含め、避難された皆さんは強い気持ちで不安な夜を過ごしていました。ばらばらになった家族の身を案じ、携帯を手に一晩中起きていた方もいました。(とにかく避難された方の命は守らなければ…)と思いました。寒さに凍えている方はいないか、重度・重複障害のお子さんたちは大丈夫か、数時間おきに見回りをし、起きている方には言葉を書きました。

家に帰れなくなり戻ってきた教職員から石巻の惨状を聞き、避難所は長期にわたりそうだということ、今後の食料確保をどうするか、夜中に話し合いました。ワンセグ携帯で見たニュース映像は

広い地域が火事になっていることを知らせているようでした。誰もが絶句してしまいました。朝になり、現実を知るのが怖い気持ちにもなりました。いったん自宅に帰れるものは帰り、家にある食料を持ち寄ることになりました。

しかし、翌朝（3／12）、学校の事情を熟知している庁務さんが給食室から給食用の米を見つけてきてくれました。さらにプロパンガスが安全に使えることを確認してくれました。明るい光がさしたように感じました。そして庁務さんが泊まってくださったことをありがたく思いました。溜め置きしていた水を大事に使いながら鍋でご飯を炊きました。炊き上がるのを待ちながら（水も無い…米も無い…。あと何日食料の提供ができるだろう…）と恐怖に近い不安と、（早くみなさんに温かいものを渡したい）という思いが複雑に入り混じっていました。一人一個ずつでしたが、朝と夜の温かいおにぎりは大変喜んでいただけました。

家に戻れる職員は食糧確保のために一旦、自宅に戻りました。私も家に戻り食料を手ですぐ学校に戻りました。途中、何台もの和歌山県の消防車が、けたたましくサイレンを鳴らし猛スピードで走っていきました。呆然とその列を見送りながら、改めて宮城県がただならぬ状態であることを知り、涙が止めどなく流れました。

この日（3／12）、津波に追われ帰れなくなり見ず知らずのお宅の2階や官舎の3階でお世話になっていたという職員や、1時間以上も歩いて冠水した道路を渡りながら数名の職員が出勤してきました。翌、日曜日（3／13）にはさらに10数名の職員が学校にやってきました。みんな家族がばらばらになっていた状態でもありました。それでも行ける範囲で本校児童生徒の安否確認を始めることになりました。（いち早く、子どもたちの無事を確認したい…。）集まった教職員の熱い願いでした。

● 3／14 児童生徒の安否確認と介助の必要なお年寄りの受け入れの開始

月曜日（3／14）になると半分以上の職員が自転車を使ったり歩いたり、知り合いの車に乗せてもらったり、おにぎりや布団を持ったりして出勤してきました。そして、それぞれが見てきた町の様子を報告しました。職員の顔は皆、こわばっていました。報告後、やはり心配になったのは子どもたちの安否でした。校長先生の指示で、すぐに全児童生徒の安否確認に出ることになりました。子どもたちを地域ごとで分けた名簿を作り、職員を振り分けました。遠かったり、危険が伴ったりするところには男性教員を中心にし、複数のチームを作って確認に行きました。車で行ける所は少なく、歩いたり、自転車を使ったりしながら、地域をくまなく尋ねました。地域の避難所には貼り紙をして子どもの情報提供を呼び掛けました。子どもの安否が確認できるたびに本部では拍手が沸きました。

町に出て歩けば歩いた分、被害の大きさが分かってきました。陥没した道路の穴で魚が泳いでいたり、家が道路の中央に流されていたり、瓦礫をよけながら道を作って前に進まなければならない状況だったり、職員から報告される状態は現実とは思えない話ばかりでした。

そしてこの日（3／14）、石巻日赤病院で手当てを受けたお年寄りの方21名が搬送されてくることになりました。市内の学校や避難所はどこもパンク寸前との事で、避難所指定の施設ではなかった本校でもお引き受けすることになったのです。相変わらず気温は低く体育館の底冷えも厳しかったことから、避難スペースを体育館から中学部棟一階教室へ移すことにしました。

21名のお年寄りは紙おむつの交換が必要だったこと、体を思うように動かさず介助の必要な独り身の方ばかりだったことから、教室を介助の必要度合いに応じて下記のように分けました。

- ①全介助の方 ②徘徊が心配される方 ③おむつ交換が必要な女性の方
④おむつ交換が必要な男性の方 ⑤自立している方及び家族単位で避難した方
⑥体温調整に特段の配慮が必要な重度・重複障害の方

以上の6種類の教室です。各教室の利用者が一目瞭然に分かるように、必要な介護の程度を教室の入り口に貼りました。また身内の方が探しに来ることや服用する薬の管理が必要だったことから、各教室のどこに誰がいるか分かるように個々の名前も貼り出しました。

ろうそくの火とストーブの火の管理、余震時の緊急避難に備え、泊まりの職員は4時間交代で廊下に待機し部屋の見回り、トイレへの誘導、紙おむつの交換を行いました。お年寄りの方々はどこかしら体を痛めていましたが、教職員は相手の痛みをおもんばかりながら複数で力を合わせて介助するスキルがあったので、安心して身を任せてもらうことができました。また徘徊するお年寄りの方には決まった教員が専属で寄り添い、じっくり話を聞いてあげることで、徘徊はなくなっていきました。徘徊は恐ろしいほどの不安に駆られたための保身行動だったことに、後になって気付かされました。



●物資がない避難所…地域の方の温かな支援

こうしたお年寄りを合わせ、学校には81名の避難者の方が生活していました。情報も物資も何もない状況でしたが、近くの福祉サービス事業所の石巻祥心会さんが、障害者支援のために届けられたNPOからの物資を分けてくださいました。着の身着のまま避難した方々のために、下着や洋服をいただくことができ、とてもありがたかったです。また学校近隣の方々にも助けていただきました。学校の目の前でイチゴを販売している方にはたくさんのイチゴを、学校の向かいの農家の方(星さん)からはガス釜を貸していただいたりお米を分けていただいたりしました。何の応援もいただけない辛い時期を支えてくださったのは地域の方々の温かい気持ちと支援でした。

火曜日(3/15)には、近くの高橋工務店さんが、毎日炊き立てご飯でおにぎりを作ってくださいと申し入れてくださいました。また水曜日(3/16)には、学校周辺に住む市議会議員の渡辺拓朗さんもおにぎりの提供を申し出てくださり、私たち職員は避難所の衛生管理やお年寄りの介助に時間が取れるようになりました。

この頃になると町にはたくさんの自衛隊の車が行き来するようになりました。「救援物資」と書かれた車も通っていきませんが、手を振っても学校に寄ってくださることはありませんでした。思い切って車を止め、「何とか水や食料、毛布をお願いしたい。」と話すと、「置いて行きたい気持ちはあるが、指定避難所にしか届けられない。」と申し訳なさそうに話し、行ってしまいました。給水車が来るという話を聞いては、みんなでタンクを手に並びましたが、「これは地域の戸数を計算して運んでいる水だから分けてあげたいけど…すみません。」と水をいただくこともできませんでした。(どうすれば指定避難所として認めてもらえるのか…)教職員がまだまだ冠水がひどい石巻市役所に向かって歩き、陳情に行きました。すると、避難者名簿を作って市役所に提出すれば認められることが分かりました。急いで避難者の方の名前と住所を書いたりリストを作り、再び市役所まで歩いて届けました。実は避難所指定になっている学校には、既に様々な物資が届けられていたようでした。学校に来ることができる少ない教職員で避難所運営と児童生徒の安否確認に奔走していた私たちには、周りの様子を知り得る機会が少なかったのです。

こうして3月16日の午後から本校も避難所として認定され、定期的に食料の配給をもらえることになりました。この時の教職員の安堵した表情は忘れられません。やっと避難所の方の生活が守

られるという安堵感でした。

私たちが奔走する姿を見て、避難所にいる方々も積極的に力を貸してくださいました。トイレに必要なプールからの水汲みやトイレ掃除、ごみの分別と管理など、進んで行ってくださいました。「本当に先生たちには感謝してる。この感謝は一生忘れねえがら。今は何もできねげっど、必ず恩返しにくっからさ。」と言ってくださる方もいました。

誰もが必死に毎日を過ごしていました。それでも私たち教職員は避難されてきた方々の前向きな姿に勇気をもらい支えられていました。お礼を言われるたびに何もできない無力さに罪悪感すら感じる時もありましたが、私にできることは笑顔でいること、そしてみなさんに安心していただくことだと言い聞かせ、過ごしました。

● 3 / 1 6 自閉症児童の健気な頑張りと底力

多くの方々の協力と頑なりに支えられた六日目の夜（3 / 1 6）のことです。消灯時間が過ぎた21時半、突然、「ぎゃーっ」と火のついたような叫び声が響き渡りました。自閉症のある男の子の声でした。その子の懸命で必死な表情には（誰か助けて！！）という心の声が、痛いほど表れていました。

手回し懐中電灯を持った父親が男の子に寄り添い、三人で真っ暗な校舎内をしばらく歩くことにしました。それでも一向に男の子の声と陰しい表情は穏やかになりませんでした。校長先生も心配し、男の子の生活しなれた小学部棟へ行くことを許可してくださいました。暗闇の中、トランポリンを一時間近く跳んでいたでしょうか…。憔悴したように側に寄り添うお父さんの姿と必死な表情でトランポリンを跳び続ける男の子の姿に、心が痛みました。この夜、この男の子とお母さんには集団から離れた小学部棟の教室で休んでもらうことにしました。

この日の出来事ではっと気付かされました。本校の子どもたちがもつ底力のある健気なまでの頑張りです。

急な予定変更やいつもと違う生活リズム、慣れない場所や集団での行動が得意ではない自閉症等の子どもたちや、体温調節の苦手な重度・重複障害のある子どもたち……。配慮が必要な子どもたちがたくさんいたはずなのに、この六日間、誰がどこにいるのか、ふと忘れてしまうほど、みんな落ち着いて過ごしていたのです。（親に心配をかけるまい。）（今はわがママを言うてはいけない。）（大変な時だから頑張らなくちゃ。）と子どもたちになり必死で過ごしていたのでしょう。

私は、本当に子どもたちの底力を見た思いがしました。心の中で（みんなえらい！）と思うと同時に、子どもたちが全てを抱え込み、必死に頑張っていたことに気付かされ、毎日の観察をもっと細やかにしていかなければならないと強く思いました。

翌朝（3 / 1 7）、避難所で生活する方々に自閉症の障害について説明をした上で、昨夜の叫び声が子どもの緊急事態であることをお話し、自閉症の子どもを家族を集団から分け、別教室に移ってもらうことに了解をいただきました。避難所生活が1週間に及び、24時間、誰かの声や動きが気になり、なかなか眠れないと訴える方々もいて、誰もがプライベート空間を求めていた時でした。それでも皆さんが「大変だね。かわいそうだもんね。いいよ、いいよ。私たちは我慢できっから、子どもたちを教室に入れてやって。」と理解を示してくださいました。私には、多くの皆さんが温かく理解してくださり、応援して下さったことがうれしく、涙がこみ上げました。

その日から、自閉症の障害がある男の子の二家族を集団から離れた中学部棟の一番端の部屋に移ってもらうことにしました。二人の男の子にほっとした表情が戻り、その家族の皆さんにもようや

く少しだけ、心を休めていただけるようになりました。

● 3 / 1 7 県内支援学校の心強いボランティア派遣

地震発生から一週間。

私たち教職員にも体力の限界が来ていました。常時出勤したり泊まることのできる教職員はまだまだ少ない状況だったので、疲労の色が濃くなっていきました。そこに宮城県教育庁特別支援教育室から視察の方が来てくださいました。校長が、緊急時に連絡が取れる設備のある石巻西高校から県に応援を求めてくださったのです。

「これは大変だ。」とすぐに県に応援してくださることになりました。

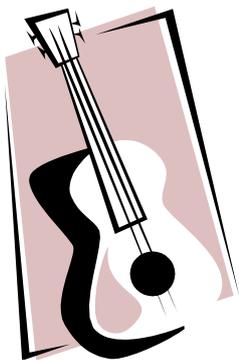
まず、県の公用車を事務連絡や急患対応に使えるように一台貸してくださいました。翌日（3 / 1 8）からは、**県内の支援学校の職員を数名ずつ派遣**していただくことになりました。宮城県には学校でスクールバスを保有している学校が二校ありました。一校は県南の船岡支援学校、もう一校は県北の金成支援学校です。県南と県北から石巻に向かう道すがらにある支援学校の教職員を乗せてくるのです。ローテーションしながら、5、6名の教職員が二泊三日で泊り込みの応援をしてくれました。食事班・衛生班・介護班のそれぞれに所属してもらいました。同じ「特別支援」の目と心を持った先生方なので、石巻支援学校の職員とあうんの呼吸で活動できました。一つ一つ説明をしなくてもアイコンタクトだけで「先生、〇〇やりましょうか？」と気付いてくださったり、お年寄りの方の身体介助も呼吸を合わせてできたり、床にできた段差を段ボールでカバーするような安全面の配慮も十分に行き届くようになりました。県内の先生方の応援が大変心強いものだったことで、私達も久しぶりに自宅に帰ることができたり、少し休憩できたり、励ましていただいたり、避難されている方だけでなく私達も支えていただいたのです。さらに嬉しいことがありました！

待ちに待った『電気』が復旧したのです！！17：00にパッとついた時には、仙台の光のページェントのように「わあっ」と歓声が上がり、みんなが手をたたきました。そして『水道』も復旧したのです。電気がつく、蛇口をひねれば水が出る…当たり前の生活のありがたみをしみじみと感じました。

● 3 / 2 2 児童生徒の安否確認終了と「上を向いて歩こう」の励まし

3 / 2 0（日）2 1（月）頃になると、少しずつお年寄りの方々が市内の老人福祉施設に入所できるようになりました。混乱していた行政（石巻市）が少しずつ動き出し、二、三名ずつ、環境のよい施設に移動できるようになったのです。しかし、私たち教職員にはまだまだ重い心配事がありました。どうしても安否の分からない児童生徒がまだ数名残っていたのです。健脚に自信のある男性教員が必死の思いで瓦礫を掻き分けながら被害の大きい地区を探していましたが、ようやく3 / 2 2（火）に最後の児童生徒の安否が分かり、3 / 1 2（土）から行っていた1 5 7名の安否確認作業が終了しました。

この日の夜には、プレゼントがありました。大阪からワゴン車いっぱい到下着や靴下等を積んで支援に来てくださった平坂さんとケロさん（仮称）が、得意の楽器（ウクレレ）で急遽ミニコンサートを開いてくれたのです。プレイルームで聞いたウクレレの優しい温かい音色は一生忘れません。地震から十日以上がたち、みなさん、本当に憔悴しきっていました。生活の見通しが立たない不安な心境の中で聴いた文部省唱歌の「ふるさと」。天井を見つめ涙をこぼされる方、思わず口ずさみながら我が家を思う方、一点をじっと見つめている方…いろんな方の表情と思いがありました。「希望



に向かっていきましょう！」と励ましの言葉を聞いた後のパッフェルベルの「カノン」、坂本九の「上を向いて歩こう」。“上を向いて歩こうよ。涙がこぼれないように…”まさにみんなの心を歌っているようでした。ウクレレの繊細な一音一音が心に染みしました。そして最後は全員でアンパンマンの替え歌を合唱しました。“何が君の幸せ？分からないまま終わるそんなのはいやだ”“忘れないで夢を。こぼさないで涙。”みんなが自分を励ますように歌いました。そしてみなさん、笑顔になって終わりました。音楽の力と人の優しさに感銘した夜でした。

●県立学校養護教諭の応援…避難者の心と命を守るために

しかしほっとするのは束の間でした。

21時過ぎ、コンサート会場を片付ける間もなく、お年寄りの方がおなかの調子を崩し、布団や着衣の全てを汚してしまったと連絡が入ったのです。汚れ物は処分するしかありませんでした。しかし替えの布団や着替えが無く、慌ててやりくりして着替えていただき布団を用意しました。病院へも搬送しなければなりません。この日、職員にも嘔吐が出始めました。毎日、掃除をし、アルコール消毒や食べ物に火を通すことを徹底していたにもかかわらず、嘔吐や下痢の症状が出てきてしまったのです。

翌朝（3/23）から、感染症を広げないために、朝の放送で消毒の徹底を呼び掛けるようにしました。これまでも行っていたことでしたが、一人一人の健康観察でおなかの具合が悪い方がいなかどうか聴き取ったり、時間を決めてトイレのアルコール消毒を行ったり、手洗いをまめにすることをさらに強く呼び掛けました。

このことを機に避難された方々の健康を守るために、校長が県に養護教諭の派遣を依頼しました。そこで本校の養護教諭に加え、県内の高校の養護教諭も二泊三日で応援に入ってくれるようになりました。

避難生活十二日目、この時が子どもにも大人にも辛さと疲労が最大のピークだったように感じます。

3/11日以来、（避難されてきた方々の大切な命は何があっても守らなくては…）そう強く思っていました。この日から本校の養護教諭、県から派遣された応援の養護教諭を中心に、さらに心と体のケアを十分に進めていくことになりました。

このことが功を奏し、市内のあちらこちらで感染症が流行しましたが、本校では感染症が広がることはありませんでした。避難所にいたみなさんが、互いに声を掛け合い温かい気持ちで過ごせていたことが何よりの心と体の安定剤だったように思います。何も無い不自由さが避難所にはありましたが、避難されたみなさんが互いを気遣い支え合おうとする気持ちに、私たち教職員も助けられていました。

●4月…たくさんのうれしい支援

4/2（土）頃になると、スーパーやガソリンスタンドも通常に近い状態に戻り始め、避難所にいるみなさんも日中は気分転換に外出する方が多くなりました。

4/5（火）には介助の必要なお年寄りの方が全員、市内の福祉施設に移動でき、81名だった避難者の方が44名になったことから、部屋割を見直しました。家族単位で少しプライベート空間が保てるようにし、洗面のための部屋や中学生や高校生の学習室を用意するようになりました。

4月になると、さまざまな支援が入るようになりました。少なかった肌着や洗面道具、衛生用品、毛布などの物資だけでなく、心とからだのケアのための医師団や心理士チームの定期的な来校、自衛隊のお風呂開設などうれしい支援が始まりました。

また4/11(月)からは宮城教育大学の学生ボランティアが二泊三日で30日まで入ることになりました。若い学生の笑顔は避難所を一気に明るくしてくれました。毎朝、起床時刻になるとさわやかな声で校内放送をいれ、みなさんの顔を見ながら健康観察をしました。腕まくりをしながら、調理の鍋を運んだり、日中は子どもたちの遊び相手になったり、夜は中高生の学習室の先生になって勉強を教えてくださいました。避難所の方にとって、ちょうど1か月後にさわやかな風が入り込んだ感じでした。学生たちの表情に合わせてみなさんの笑顔がまた戻り、宮城教育大学のみなさんにも感謝の気持ちでいっぱいでした。



●4/12 避難所から学校再会に向けて～「学校は子供に生かされている」～

4月。多くの方々の協力に支えられて、学校は避難所中心から学校再開へ向けて動き出しました。年度も新しくなり、新しい教職員が加わりました。まず平成23年度、入学・在籍の子どもたちと家族の健康状態や生活状況の把握を行うことになりました。4月12日から4日間で、第1期「心と体のケアのための家庭訪問」を行いました。子どもたちの表情、健康状態や心の状態を観察すること、その子どもを支える御家族が疲れていないか、生活に不足しているものはないか、教員の目と心でしっかりと見てくることになりました。まだまだ市内の道路事情は悪かったため複数の教員で回るように校長から指示が出ました。通れるはずのところが通れない。あつたはずの建物が無い。根こそぎ倒れた大木があちらこちらに転がっている市内の惨状に、しばし言葉が出ませんでした。

家庭訪問に伺うと、子どもたちはみな安心したように顔を見せてくれました。御家庭からのお話で、子どもたちに様々な変化があつたことも分かりました。自分の頭をたたくようになった、物音に敏感になった、失禁するようになった、小さな余震が来ると体をこわばらせ動けなくなった、嘔吐するようになった、居間以外の部屋に行きたがらなくなった…。子どもたちは震災後の大きな不安を体験し、困惑していたのです。

「あぁ怖かった。」と気持ちを言えれば自分が抱える不安は人と分け合うことができます。でもうまく話したり伝えたりできない子どもたちは全て自分自身で受け止めるしかないのです。(次に大きな地震がきたらどうしよう…) 肢体不自由がある子どもたちの恐怖は計り知れません。心の安定のために自分の宝物や生活のパターンがある自閉症の子どもたちは地震の度に(また好きな〇〇が無くなるかもしれない…)と喪失の不安に駆られていたかもしれません。

石巻支援学校の子供たちは、みな、人の心を敏感に汲み取ります。地震の時に見た人々の悲しく辛い表情や大好きな住み慣れた地域の変わりように、大きく心を痛めていたのでしょう。

家庭訪問を終えて、(継続した支援が必要な御家庭には積極的に足を運ぼう)と教職員で共通理解がされました。また、子どもたちは家庭から外に出ることがなくストレスがたまっているようだとの話も話題になりました。

そこで兵庫県から石巻の支援に来ていた臨床心理士チーム「ひようごHeart」(代表:阿部昇先生)の力を貸していただき、5/2(月)に学校を会場に『子どもの広場』を開くことになりました。

この頃には学校再開を5/12(木)と決めてあつたので、第2期「心と体のケアのための家庭訪問」(4/27~5/6)で、子どもたちと家庭のその後の様子を観察しながら学校再開のお知らせと5/2の『子どもの広場』のお知らせをしました。

5/2(木)『子どもの広場』。学校に52日ぶりに子どもたちの元気な声に戻ってきました。玄関で子どもを待つ教員は歓声を上げて子どもを迎えました。初めは少し堅かった子どもたちの表情が見る見る笑顔を取り戻していきました。歌ったり踊ったり、トランポリンをしたりサッカーをしたり、ボウリングやゲーム、お絵かき、クッキー作り…好きなコーナーに行き活動しました。

子どもたちが学校に来て、学校も見る見る輝きを増しました。子どもたちのうれしそうな表情を見て涙がこぼれました。学校は子どもたちがいてこそ学校なのだと改めて感じました。校長も、取材に来ていたTBSのカメラマンも、目にいっぱい涙を浮かべながら子どもたちの様子を見ていました。そして校長は「長く学校が閉じられていたことによって、当たり前前の教育活動が子どもたちにとっていかに大切か、いかに心と体を育む大きな役割を担っているかと感じたし、学校は子どもに生かされているということを改めて感じさせられた…」と感慨深く話されました。

●学校再会を応援して下さった避難者の皆さん

5月の連休を迎え、私たちは学校と避難所の共存体制を考えていました。しかし、避難されていた方々が自主的に何度も何度も市役所に掛け合い、自分たちで二次避難先を決めてくださっていました。地域の方と本校の児童生徒と一緒に生活することによって、地域の方々はずっかり障害のある子どもたちの可愛さや困難さを理解してくださっていたのです。

「自分たちがここにずっといたら、子どもたちに迷惑掛けてしまうでしょ。ここは子どもたちが安心していられる場所でないとダメだと思うんだ。ここにいる子どもたちが戻ってきた時に、学校がいつもと違っていたらかわいそうだっちゃん。俺たちはここにいたほうが楽だけど、そんなごど…できねっちゃん。」と言ってくださいました。

そして5/8(日)、みなさんは第二次避難場所に移ってくださいました。さらに5/10(火)には学校に対するお礼にと、みなさんで学校の掃除をしに来てくださいました。

おかげで5/12(木)、避難所となっていた痕跡はどこにもなく、きっと誰もが気付かぬほど、何事も無かったかのように入学式と始業式を迎えることができたのです。



●エピローグ

千年に一度と言われる未曾有の震災でした。

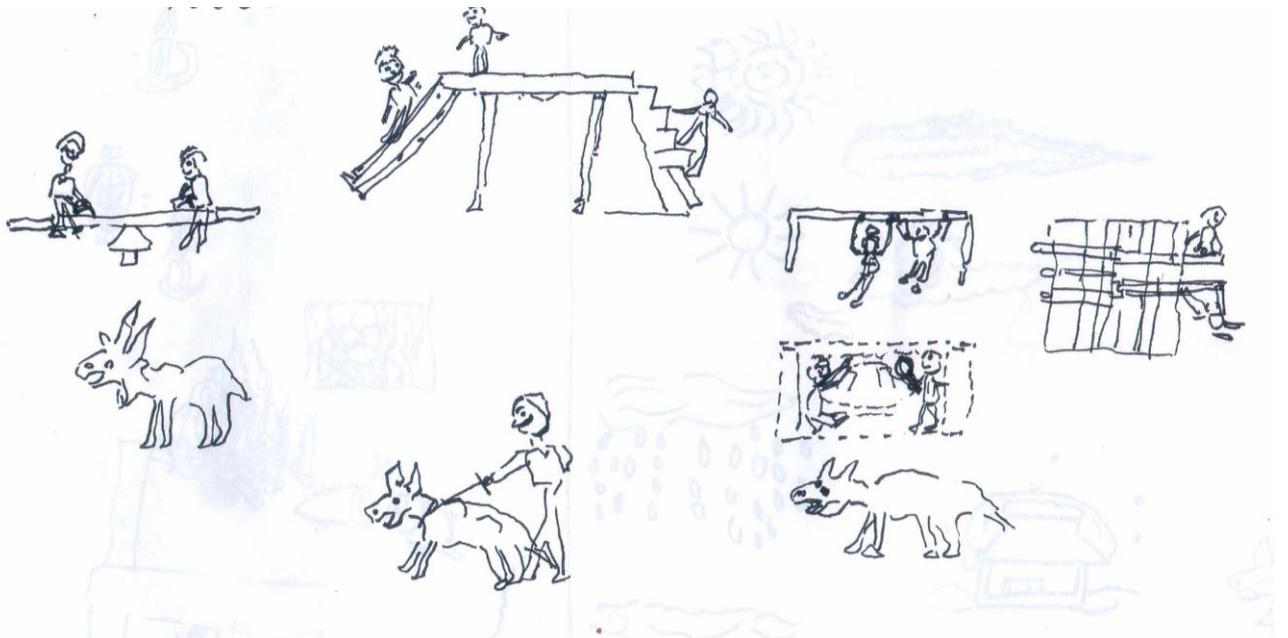
この東日本大震災を通して感じたことは「人は、人によって人として生きていくことができる」ということでした。多くの方が手を取り合って身を寄せ合って支え合えたからこそ、不安や困難を乗り越えられました。気づきがあり、勇気を与えられました。地域の方、NPOの方、本校に携っている医師の方々、他県からのボランティアの皆さん…たくさんの人の励ましのおかげで「今」があります。人の心を前に動かすものは、やはり「人の力」なのだと感じます。

指定避難所ではなかった本校を避難所として開くことによって、地域の方々との絆が一段と深まりました。他の支援学校や大学との結び付きも強まりました。多くの方に本校の子どもたちを知ってもらう機会にもなりました。学校が地域の方を受け入れた以上に、地域の方に助けていただきました。学校は地域に支えられ、守られ成り立っていることを痛切に感じました。

また、子どもたちがいることによって、自然と大人が笑顔になる様子を見て、子どもは大人を元気にする活力源だと改めて子どものすばらしさを痛感しました。そして障害のある子どもたちの繊細さと健気さに触れ、支援学校の教員として、子どもたちの心の声にもっともっと敏感でありたいと思っています。

大切な方々を失った悲しみはなかなか癒えませんが、でもその方々の心はずっと私たちの心の中で生きています。

多くの方々の思いと絆をつなぎ続け、この辛い体験を幸せの形に変えていくことが残された私たちの努めだと思い、前を向いて歩いていきたいと思っています。



2) 学校再開後の記録 (5/12～ 学校だより「立野」より)



立野

たのび

校訓

一 一 一

敬 明 健

愛 朗 康

宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

宮城県石巻市蛇田字新立野 410 番の 1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

i shinomaki-hs@pref.miyagi.jp

http://syou.myswan.ne

石巻支援学校 学校便り 平成 23 年度 第 1 号 平成 23 年 5 月 12 日発行



5月 一学校の再開一

校長 櫻田 博

今年、東日本大震災の影響で始業式・入学式が大幅に遅れました。学校も5月8日まで避難所としての運営をしており、本校の児童生徒数名も学校での避難所生活をしていました。未曾有の大震災は、4名の尊い子どもの命を奪い、家屋を破壊し町並みも一変しました。人々の暮らしにも大きな影響を与え今も避難所生活を余儀なくされている御家庭も多くいらっしゃるのではないかと思います。様々な困難がありますが、心には常に希望をもって明るく前向きに生活していく姿勢が、子どもたちへ伝えることができる「生きることの意味」であると思っています。

5月2日(月)に、兵庫県の臨床心理士会が、本校で「子どもの広場」を開催し、50数名の児童生徒が参加しました。校庭でサッカーをしたり、プレイルームで遊具で遊んだり、おもちゃや絵本を楽しんだり、楽器の演奏もありました。本校職員との合同演奏でトトロの名曲「散歩」(歩こう 歩こう 私は元気～)を聞きながら、元気に笑顔で遊びまわると子どもたちの姿を見ていたら自然と涙が出てきました。学校は、子どもたちの笑顔と元気な声があつて初めて命を得るのだとも思いました。学校はまさに子どもたちが主人公です。主人公なき学校がこんなに寂しいものとは思いませんでした。それだけに今日の学校の再開は、感無量です。例年より1か月以上遅い学校の始まりですが、子どもたちと共に充実した学校生活を築いていきたいと思ひます。

本校の今年度の在籍者数について、5月1日現在で、小学部49名、中学部34名、高等部62名、計145名です。

【校訓】

・健康 ・明朗 ・敬愛

【学校教育目標】

- じょうぶで、元気な児童生徒
- 明るく、すなおな児童生徒
- 仲良く、助け合う児童生徒
- くじけず、がんばる児童生徒



この目標については、本日の入学式や始業式で、子どもたちに話をしたところ。今後とも保護者の皆様の思いや願いをしっかりと受け止めながら、学校の主人公である子ども一人一人が輝きを放ち、その可能性を最大限伸ばすことができる教育の充実に向け、教職員一丸となって努力してまいります。本年度も、保護者の皆様の御支援と御協力をお願いします。

5月の行事予定		
日	曜	予定
1	日	
2	月	
3	火	憲法記念日
4	水	みどりの日
5	木	こどもの日
6	金	
7	土	
8	日	
9	月	
10	火	
11	水	
12	木	披露式、始業式、入学式 (11:30 下校)
13	金	
14	土	
15	日	
16	月	高1 結核検診胸部レントゲン
17	火	高3 身体測定
18	水	高2 身体測定
19	木	高1 身体測定 自衛隊音楽隊訪問演奏会(10:30~)
20	金	中身体測定 清掃の日 父母教師会会計監査・執行部会 (10:00~)
21	土	
22	日	
23	月	小身体測定
24	火	高3 聴力検査
25	水	高2 聴力検査
26	木	高1 聴力検査
27	金	中聴力検査
28	土	
29	日	
30	月	小4~6 聴力検査
31	火	小1~3 聴力検査



立野 たての

校訓
一 一 一
敬 明 健
愛 朗 康

宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

宮城県石巻市蛇田字新立野410番の1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp

http://syou.myswan.ne

石巻支援学校 学校便り 平成23年度 第2号 平成23年6月1日発行



自衛隊音楽隊訪問演奏会 自衛隊のみなさんから 音楽の贈り物



学校が再開して1週間目の5月19日(木)に「自衛隊音楽隊訪問演奏会」がありました。

すてきな音楽をプレゼントして下さったのは山形県東根市に駐屯する陸上自衛隊第6音楽隊のみなさん。総勢35名の本格的な吹奏楽団がくり出す楽しくすてきな音楽の数々に、いつの間にかうきうき気分になりました。

演奏していただいたのは

1. ドラゴンクエストの音楽
序曲「荒野を行く」
2. アンパンマンのテーマ
3. 夢をかなえて～ドラえもん～
4. 森の音楽隊(楽器紹介)
5. ありがとう～いきものがかり～
6. 勝手にシンドバット
7. とんりのトトロより～さんぽ～
8. 歌えパンパン

そしてアンコールはスマップの

「世界に一つだけの花」

みんなで一緒に歌ったり、演奏に合わせて踊ったりして、とても楽しいひとときを過ごすことができました。音楽隊のみなさん、ありがとうございました。

こんにちは～。



ありがとう～。



歓迎の言葉を発表してくれた中学部3年のT君。お礼の言葉は高等部3年の河野楓さん。プレゼントの贈呈は小学部4年Mさん、5年Yさん、6年Aさんでした。音楽隊のみなさんのりりしい姿を間近にして、ちょっと緊張したり、感激したり、お話したいことがいっぱいあったり・・・

ごころうさまでした。

6月の行事予定

日	曜	予定
1	水	安全点検 高3視力検査
2	木	清掃の日 高2視力検査
3	金	学習参観, 父母教師会総会
4	土	
5	日	
6	月	全校朝会① 高1視力検査
7	火	中視力検査 プール開き小上
8	水	小4~6聴力検査 プール開き小下
9	木	小1~3聴力検査
10	金	小中内科結核検診
11	土	
12	日	
13	月	プール開き中
14	火	
15	水	防災訓練I(地震)
16	木	血液循環器検査(小1,4中1高1)
17	金	高内科検診(13:00~)
18	土	
19	日	
20	月	
21	火	
22	水	
23	木	眼科検診(13:30~)
24	金	
25	土	
26	日	
27	月	
28	火	
29	水	耳鼻科検診
30	木	小学部5年校内宿泊学習(~7/1)



立野 たでの

校訓
一 一 一
敬 明 健
愛 朗 康

石巻支援学校 学校便り 平成 23 年度 第 3 号 平成 23 年 7 月 1 日 発行

宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

宮城県石巻市蛇田字新立野 410 番の 1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp

http://syou.myswan.ne



6月7日(火)に小学部4~6年生、次の日の6月8日(水)には小学部1~3年生が、また、次の週の6月12日(月)には中学部のプール開きがありました。子どもたちは待ちに待ったプールに飛び込み思いっきり水しぶきを上げました。

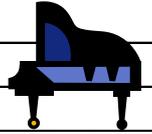


6月17日(金)に石巻北高等学校農業科3年の生徒さん17名が学校を訪れ、本校高等部の3年生と一緒に花の苗を植えて交流を深めました。植えたのは北高校の生徒さんが今年1月に種を蒔き、丹精込めて育てたペコニアの苗180鉢。北高校の生徒さんに植え方を教えてもらいながら、校庭の二つの花壇と30個のプランターに赤、白、ピンクの花の苗を丁寧に植えました。できあがったプランターは高等部校舎や正面玄関や保健室前などに設置しました。同じ故郷で同じ時代を生きていくこの若者たちのそれぞれの人生においても、きっとすてきな花を咲かせてくれることと思います。



7月の行事予定

日	曜	予定
1	金	安全点検日
2	土	
3	日	
4	月	
5	火	
6	水	
7	木	指導主事訪問(13:30 下校)
8	金	福祉サービス 講話会 (10:00~12:00)
9	土	
10	日	
11	月	
12	火	
13	水	
14	木	
15	金	河野康弘ジャズコンサート (9:45~10:45 体育館)
16	土	
17	日	
18	月	海の日
19	火	
20	水	歯科検診
21	木	
22	金	第1学期終業式(11:30 下校)
23	土	夏季休業 (~8/21)
24	日	河野康弘(カノヤヒロ)さん
25	月	ジャズピアニスト。矢沢永吉バンドでプロデビュー。石巻出身の中村雅俊さんの伴奏も務めたことがあるそうです。作業所などを訪問しダイナミックな演奏で音楽の楽しさを伝える「ワッハッハ 60分1本笑舞(しょうぶ)」などの活動もしているそうです。
26	火	
27	水	
28	木	
29	金	
30	土	
31	日	





立野

校訓

一 一 一
敬 明 健
愛 朗 康

宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

宮城県石巻市蛇田字新立野 410 番の 1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp

http://syou.myswan.ne

石巻支援学校 学校便り 平成 23 年度 第 4 号 平成 23 年 7 月 22 日 発行



鈴木優輔君のお礼の言葉



弾くも跳ねるも楽しみ方は自分流



中学部訪問の大将君もジャズセッションを楽しみました

ワッハッハのリズム ジャズを堪能



8月の行事予定

日	曜	予定
1	月	
2	火	家庭訪問 1
3	水	家庭訪問 2
4	木	家庭訪問 3
5	金	
6	土	
7	日	
8	月	
9	火	
10	水	
11	木	
12	金	
13	土	
14	日	
15	月	
16	火	
17	水	
18	木	
19	金	
20	土	
21	日	
22	月	第 2 学期始業式 (11:30 下校)
23	火	
24	水	
25	木	
26	金	
27	土	
28	日	
29	月	
30	火	
31	水	高等部石巻西高交流

7月15日(金)にジャズピアニストの河野康弘さんをお招きし、ジャズコンサートを行いました。

体育館フロア中央にセットされたピアノで最初に演奏されたのは映画「サウンド・オブ・ミュージック」より「私のお気に入り」。指だけでなくげんこつや腕も使う自由奔放な演奏スタイルにみんなびっくり。童謡「チューリップ」や「かえるの歌」「大きな古時計」はジャズのリズムと一緒に歌いました。高等部の生徒の突然リクエストに応じてのピアノの名曲「エリーゼのために」や「ショパンのノクターン」もジャズのリズムでちょっぴり大人の気分。

お楽しみは河野さんとのジャズセッションのコーナー「みんな一緒に～ワッハッハ」。会場はワッハッハ、ワッハッハのかけ声と手拍子。ピアノの周りには長い列を作って順番を待ち、河野さんと一緒に自分流ジャズピアノ演奏を楽しみました。お囃子のように引き続けられるジャズのリズムに共鳴し踊ったり跳び跳ねたりする子ども達もたくさんいて会場は笑顔と熱気に包まれました。

最後に高等部3年の鈴木優輔君が河野さんの目の前でホワイトボードに「ピアノのりのりありがとう」と書き醒めやらぬ感動を文字に込めてお礼の言葉にしました。

お迎えの言葉は小学部6年永沼颯太くん、終わりの言葉は中学部3年の高橋大知くんでした。ごくろうさま。



は8月のプール開放日です

平日 9:30~11:30 13:30~15:30

金曜日 9:30~11:30 13:30~15:00



立野

たのびの

校訓
一 一 一
敬 明 健
愛 朗 康

宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

宮城県石巻市蛇田字新立野 410 番の 1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp

http://syou.myswan.ne

石巻支援学校 学校便り 平成23年度 第5号 平成23年8月31日発行



2学期に向けて～地域と共に

校長 櫻田 博

8月22日に2学期が始まりました。東日本大震災の影響で1学期のスタートが遅れたことから夏休みを6日間短縮しました。比較的涼しい日が続いたこともあり、子どもたちの元気な笑顔が見られ、学校は活気づいています。また、校庭に目をやると築山は形を変えて移転され、校庭が広くなりトラックの周囲には芝生が植えられています。8月末に校庭整備事業が終了し、9月からいよいよ運動会に向けた練習が始まります。10月には運動会と学習発表会の2大行事があります。どちらも子どもたちの日ごろの学習の発表の場であると同時に、「開かれた学校」として地域住民への理解・啓発の場でもと考えています。震災からの教訓は、子どもたちの非常時の生活を考えたとき普段から地域住民との交流の中で障害児への理解を促進させることが重要であるということです。PTAが推進しているハートバッチの運動も障害児の理解・啓発を推進し、バッチの認知度を高めることにより、支援が受けやすい基盤を形成するという意義があるのだと思います。鍵は地域との連携です。将来の自立と社会参加も、現在の地域生活の充実無くしてあり得ません。地域で生きることは、地域の人々と共に自助・共助の精神で、地域生活を作り上げながら自己実現を果たしていくことであると思うのです。学校は地域の人々に支えられている事を震災の体験を通して改めて学びました。食料も生活物資も地域の人々の善意に支えられて本校は避難所としての運営を行うことができたのです。地域に支えられ育てられ、地域に貢献できる学校に成長したいと思います。運動会、学習発表会は、保護者のみならず地域への発信の場でもあります。

最近、学校に新しい学びの場ができあがりました。玄関前にミニ図書室ができました。松川PTA会長の御尽力により、多くの団体から絵本や図書を寄贈していただきました。また過日は、保護者の方々に図書室を憩いの場として活用できるようかわいらしいマットを敷いたり、部屋を掃除していただいたりとてもすてきな場所に変身しました。子どもたちも寝ころびながら絵本を見たり、バス乗車前に立ち寄って絵本を眺めたりするなど、子どもたちの楽しみや心の居場所としての役割も果たしているようです。

学校は、教師だけの力ではなく保護者や地域の方々など、総合的な力を結集することにより、より質の高い教育活動が展開できるのだと思います。

2学期も保護者の皆様と共に、子どもたちの教育の充実を目指し、職員一同力を尽くしてまいります。



9月の行事予定

日	曜	予定
1	木	運動会全体練習(9:45~10:45) 介護等体験1(~2)
2	金	須江小交流②
3	土	
4	日	
5	月	全校朝会② 教育実習(~16) 高等部3年施設実習(~16) 高等部2年個別面談(~9)
6	火	
7	水	プール発表会小学部1~4年
8	木	プール発表会小学部5.6年 小学部修学旅行事前検診 中学部アゼイリア訪問
9	金	指導主事要請訪問(13:30下校)
10	土	
11	日	
12	月	高等部1年個別面談(~16) プール発表会中学部
13	火	
14	水	高2生活実践学習 ぼかぼか教室
15	木	小学部修学旅行(~16)
16	金	
17	土	
18	日	
19	月	敬老の日
20	火	
21	水	
22	木	高1生活実践学習
23	金	秋分の日
24	土	
25	日	
26	月	異校種体験研修(~28)
27	火	サンサン教室
28	水	
29	木	運動会総練習
30	金	



立野 たの

校訓
一 一 一
敬 明 健
愛 朗 康

宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

宮城県石巻市蛇田字新立野 410 番の 1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp

http://syou.myswan.ne

石巻支援学校 学校便り 平成23年度 第6号 平成23年10月4日発行

感動!みんなで運動会! 地域で育つ石巻支援学校の新たな一歩

10月1日、どこまでも高く澄み渡る秋空の下、震災復興を祈念する石巻支援学校の運動会が盛大に開催されました。広々としたトラックと一面の芝生に整備された校庭で繰り広げられる数々の感動の演技に、保護者の皆様をはじめ、共に震災からの復興に向けて尽力してきた地域の方々などたくさんの方々から大きな声援を頂きました。



大きな声援の中、堂々と入場行進をした小学部、中学部、高等部の児童生徒。



最後の演技「ジェンカ」では児童生徒、職員、保護者、地域の方々などが肩を寄せ合い輪になって踊りました。



小学部演技「ぱくぱくもりもり」

お腹ぺこぺこのアンパンマン、ドラえもん、ドラミちゃん、キティちゃんは、小学部のみんなの協力でお腹いっぱいになり、大きくなることができました。御声援ありがとうございました。

小学部主事 柴田喜一郎

10月の行事予定		
日	曜	予定
1	土	運動会
2	日	
3	月	振り替え休業日
4	火	吉川よしひろチェロコンサート (18:30~体育館)
5	水	
6	木	
7	金	
8	土	
9	日	
10	月	体育の日
11	火	
12	水	
13	木	
14	金	高等部学部 PTA(10:00~) 「卒業生の親の話聞く会」
15	土	
16	日	
17	月	
18	火	初任研体験研修 高等部入学希望者教育相談① (~25)
19	水	
20	木	
21	金	
22	土	
23	日	
24	月	
25	火	
26	水	
27	木	校内発表
28	金	
29	土	学習発表会
30	日	
31	月	振り替え休業日





立野 たのびの

校訓
一 一 一
敬 明 健
愛 朗 康

宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

宮城県石巻市蛇田字新立野 410 番の 1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

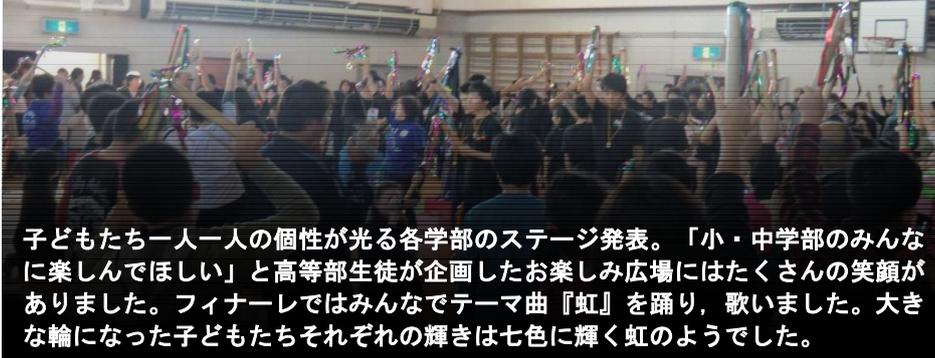
ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp

http://sekiyou.myswan.ne.jp

石巻支援学校 学校便り 平成23年度 第7号 平成23年11月1日発行

虹色に輝け!!

感動! 夢いっぱい! 笑顔いっぱい! の学習発表会



子どもたち一人一人の個性が光る各学部のステージ発表。「小・中学部のみんなに楽しんでほしい」と高等部生徒が企画したお楽しみ広場にはたくさんの笑顔がありました。フィナーレではみんなでテーマ曲『虹』を踊り、歌いました。大きな輪になった子どもたちそれぞれの輝きは七色に輝く虹のようでした。



高等部合奏「いつも何度でも」 小学部1~4年「たのしい! だいすき! 春・夏・秋・冬」



小学部5.6年「アンパンマン・ワンダーランド」 中学部「ふるさとの空に響け、祭り太鼓!」



高等部の生徒が、小・中学部の子どもたちのために準備した「お楽しみ広場」も盛況でした。

11月の行事予定		
日	曜	予定
1	火	
2	水	高入学希望者教育相談② (~'9)
3	木	文化の日
4	金	蛇田小交流② PTA 役員会 (10:00~)
5	土	
6	日	
7	月	全校朝会③ 高2施設実習 (~18)
8	火	須小交流③ 中学部修学旅行事前学習 防災訓練Ⅱ (火災) ぼかぼか教室
9	水	高等部生活実践学習③
10	木	学校見学会② 中学部修学旅行事前検診
11	金	
12	土	
13	日	
14	月	
15	火	赤井南小交流① 小PTA 研修会 (10:00~)
16	水	中学部修学旅行 (~18)
17	木	
18	金	
19	土	
20	日	
21	月	
22	火	乗務員さんに感謝する会
23	水	勤労感謝の日
24	木	
25	金	中学部1.2年校外学習
26	土	
27	日	
28	月	
29	火	
30	水	指導主事要請訪問 (13:30 下校)



立野

校訓
一 一 一
敬 明 健
愛 朗 康

宮城県立石巻支援学校
〒986-0861
宮城県石巻市蛇田字新立野 410 番の 1
TEL 0225-94-0202
FAX 0225-94-0206
ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp
http://sekiyou.myswan.ne.jp

石巻支援学校 学校便り 平成23年度 第8号 平成23年12月1日発行

思い出いっぱい! 夢の旅

中学部修学旅行11/16~18



中学部修学旅行は11月16日(水)から3日間の東京・千葉の旅。1日目はフジテレビを見学してテレビの中をのぞいた気分。2日目はディズニーランドでミッキーとご対面。クリスマスのパレードも見ました。3日目は葛西臨海水族園で魚に囲まれて・・・。

夢のような旅でした。



乗務員さんに感謝する会



11月12日(木)乗務員さんに感謝する会がありました。毎日気持ちよく安全にバス通学できるように、乗務員さん方がバスの窓や床を丁寧に掃除をしたり、安全点検をする様子がスライドで紹介され、日頃お世話になっている乗務員さん方への感謝の気持ちを深めることができました。



バスのてんけん



バスのなかのそうじ

12月の行事予定		
日	曜	予定
1	木	
2	金	学習参観日 父母教師会 中学部 PTA 研修会(13:30~)
3	土	
4	日	
5	月	
6	火	
7	水	開放講座・特別支援ネットワーク会議(15:20~) 高等部PTA研修会(施設見学) PTA 特別支援学級との懇談会(10:00~)
8	木	
9	金	高等部修学旅行事前検診
10	土	
11	日	みやぎ手をつなぐ冬祭り (11:00~14:30 体育館)
12	月	
13	火	高等部修学旅行(~16)
14	水	
15	木	
16	金	
17	土	
18	日	
19	月	
20	火	
21	水	
22	木	第2学期終業式 (11:30 下校)
23	金	天皇誕生日
24	土	
25	日	
26	月	冬季休業日
27	火	
28	水	
29	木	
30	金	
31	土	大晦日

Ⅱ それぞれの3. 1 1

1 職員の手記

亡くなった方々のご冥福をお祈りいたします

石巻支援学校 教諭 菅原 康

地震後、自宅が旧市内にある私はいつでも学校と家を行ったり来たりできるという甘い考えで、通勤用の50CCバイクに乗って市内の状況を確認し、学校に報告することにしました。初めに学校の南側方面、大街道を目指して南下して行きました。すでに道路では渋滞が起きていましたが、小型バイクの私は車の脇を擦り抜け北上運河にかかる中浦橋にたどり着くことができました。大勢の人が工業港方面を眺めているので、何かかと思いをやると、工業港から大街道西の交差点(中浦交差点)へ茶色い水が激流となってなだれ込んでいました。何が起きているのか初め理解できませんでしたが、「津波だ!」と気付くには時間は掛かりませんでした。急いで引き返して学校に報告することにしました。津波が渦巻いている中浦の交差点から、100メートルも離れていない場所に渋滞で止まっていた車の中の人から、「この先、どうにかなっているんですか。」と聞かれました。移動に便利な車ですが、渋滞にはまってしまうと周囲の状況が全く把握できなくなる恐ろしさがあるのは、震災後の大きな教訓になっているのは言うまでもありません。

その後、清水町経由で市の中心部や自宅がある日和山周辺の情報収集に再度向かいました。途中、運河が黒い濁流となっていたほかは、冠水もなく自宅にたどり着くことができました。南浜町方面の火災を確認しに行ったところで、門脇町や南浜町が大変な被害を受けていることを知り、慌てて学校に帰って報告しようとしたのですが、すでに清水町の冠水が始まり、学校にはどの道でも行けないことが分かりました。暗くなってきたので自宅に戻りましたが、余震と門脇町・南浜町地区の火災延焼の恐れからほとんど眠らずに一晩をすごしました。

翌日、学校に石巻中心部の被災状況を報告しに行こうとしたのですが、中心部が完全に水没していて、やはりどのルートでも行けないことが分かりました。何とか支援学校に行ける方法を探していると、大街道から中浦橋方面へ水の中を歩いて行けることが分かり、意を決して水の中を歩きました。刺すような冷たい水の中を歩きながら、いつも通り慣れた大街道の悲惨さに驚くばかりでした。

翌日から、児童生徒の安否確認が始まりました。まず私が住んでいる日和山や鰯山地区のお子さんたちの安否確認をしました。多くのお子さんの安全が確認されましたが、地震当日、施設を利用していたお子さんの安否確認ができず、御家族の皆さんともどかしい思いをしない数日間を過ごしました。結局安全な場所に避難し保護されていることが分かりましたが、何らかの方法での素早い安否確認はできなかったか私の今後の課題となっています。

山手地区以外の安否確認では車とがれきに阻まれて、御自宅がすぐそばにもかかわらずたどり着けない児童宅もありました。3日後には大街道の水も引き、数名の児童の自宅にたどり着くことができました。皆元気で、津波の被害を乗り越えることができ、大変うれしく思いました。家の中の泥の掻き出しや整理に追われながらも、災害に負けずに前向きに一生懸命がんばっている御家族の皆さんの姿に大きな感銘をおぼえました。

私は50ccのバイクで通勤していますが、今回このミニバイクが大活躍しました。渋滞する車の脇を擦り抜け、目的の児童宅にいち早く到達できたり、がれきの隙間をぬって探索に出掛けたりすることができました。交通規制で中心部に車が入れない場合でも、バイクは入ることができ安否確認に大変役立ちました。そんなバイクでも入っていけない場所も多く、歩いて泥とがれきを超えたり、水没している地区へは、線路をつたって電車のガードを越えたりして安否確認をしました。大街道南地区では自衛隊の方々が多数の御遺体を収容している脇を何度も通って安否確認をしました。また御遺体に遭遇しても何もしてあげることができず手を合わせるばかりでした。

4日後からは、学校内に設けられた避難所の対応に当たりました。御高齢の方や体が不自由な方など多数の皆さんのお手伝いをしました。ある御高齢の男性は、避難先が「お住まいの近所の小学校→日赤病院→西部の中学校→当支援学校」と転々と変わり、混乱していて自分の身に何が起きているか冷静に考えられない状態にありました。お話をゆっくり聞いてあげること、冷静さを取り戻し、ようやく御自分に何が起きたかを理解していただくことができました。

先生方が手分けをして児童生徒の安否確認をし、次々に安全が確認される中で、担任している小学部1年生の女子の安否がなかなか確認されず、もどかしい思いでいました。10日後、女川の御自宅近くの車の中で、お母さんや妹さんと津波にのまれ亡くなっていたことが判明し、言葉を失ってしまいました。御冥福をお祈りするばかりでした。

大きな犠牲を払った今回の震災ですが、今後の防災教育に役立てて行くことで、亡くなった方々の遺志をついでいきたいと思います。



長い単位で見守りたい心の傷

石巻支援学校 養護教諭 鈴木純子

今日も子どもたちの元気な声が校舎内に響き渡り、校庭では青く澄んだ秋空の下、散歩や遊具で楽しく遊んでいる無邪気なかわいい子どもたち！保健室に声をかけてくれる子もいて私たちは、仕事の手を休め触れ合いそのひとときを楽しみます。木の葉が色づき葉を落とし木枯らしが吹き始め、またかぜの季節が巡ってきます。何事もなかったかのように・・・そんな穏やかな日々が未来永劫続くと誰もが思っていました。

あの日、保健室は立って居られないほどの大きな揺れを感じ薬品戸棚が傾き“何が起きたのか”言葉では言い表せない強い恐怖と不安とで胸がざわめきました。

暗くなる頃から学校は、避難所になり残っていた職員はその対応に追われました。今、具体的に何をどうしたか時系列には思い出せませんが、その時その場で智慧をしぼりながら動いたような気がします。

保健安全部の職員を中心に感染症対策に重点をおき、手洗いやうがいの励行、部屋の換気やトイレの管理など細やかに計画し、職員で分担しながら、呼び掛けや掲示物で徹底しました。かぜやインフルエンザを流行させてはならないという一念でした。そのお陰で養護教諭は避難者個人の健康管理に専念できました。

最初にしたのは、避難して来た人の健康状態を知ることでした。名前の聞き取りから始まり、住所や家族・健康状態を裏紙にメモ程度のお粗末なカルテを作成しました。それを基に朝夕健康観察し体調が悪い人や薬が切れた人などを、病院に連れて行くことも初期には多かったと思います。

通院もガソリンがなく一苦勞でした。職員の車や県の公用車・金成や船岡支援学校のバス（支援のために職員を送迎していた）なども利用させていただき助かりました。受診先は、主に蛇田中学校に開設していた救護班や石巻赤十字病院でした。私事ですが、蛇中に来ていた救護班は、偶然にも学生時代の実習病院でした。“遠くから応援にきてくれている”それは暗く不安な日々を過ごしていた私にとって、少しの明るさと元気を取り戻した一瞬でもありました。石巻赤十字病院で目にした光景は、野戦病院さながらでした。（野戦病院は映画の世界でしか観たことはありませんが・・・）外来の待合室には、数え切れないほどの簡易ベットが並び、ブルーシートにはたくさんの人が横になり、通路がやっと確保してある状況でごった返していました。病院の帰りは、不足していた物資を譲り受け小雪が舞う中、歩いて学校に戻ったときもありました。

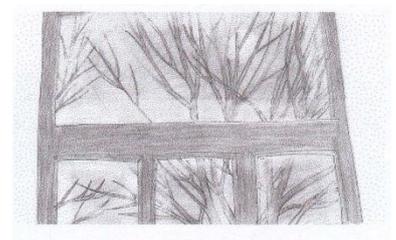
時が経ち、健康観察時には、被災時の様子を語り始める人が増えてきました。遅々として健康観察が前に進まなかったことを覚えています。話すことにより心の闇をほんの少しずつ開いていくことが、前に進む力となっていたのかもしれませんが。話を聴くことしかできませんでした。

蛇中の医療班に通っているうちに、避難所対応の違いが見えてきました。市職員が在中し、対策本部と随時連携しているのです。先生方と市役所や電力会社等を回り本校の実情を分かっとうこともしました。何日経過したが定かではありませんが、各大学や日赤等の医療チームが来校するようになり、保健室は臨時診療所に変身し診察や薬の処方をしていただきました。毎回違う医療団なので戸惑うこともありましたが、後半は同じチームが来てくれて大変助かりました。

とても苦い経験もしました。処方となった薬を一回に服用されたケースがありました。幸いにも大事には至らずに済みましたが、薬物依存傾向があることを事前に把握してない事が原因でした。しかし、避難者の特性をこちらがすべて掌握することは難しく、薬をはじめとする健康管理の厳しい現実を突きつけられました。養護教諭の応援も県からあり高校の先生が、2名1組・2泊3日の予定で何回か支援いただきました。とても心強く感謝でいっぱいでした。

大きな震災を経験し、特に医療的ケアを受けていた児童生徒の皆さんの厳しい現実を知るにつけ、今までの危機管理の見直しをしました。もちろんケアを受けている児童生徒だけではありませんが、いくつかの改善策を講じました。一例として①薬の預かり ②発電機の充実 ③足踏み式吸引器の設置 ④医ケア児童生徒の災害用物品の準備 ⑤車のシガレッターから電気をとるインバータの準備などです。二度と起きてほしくない災害ですが、その準備はしていかなければという思いです。

最後になりますが、本校児童生徒も4名が犠牲になりました。親や兄弟など身近な人を突然に失い、また生活環境も大きく変わってしまった子どもたち・保護者そして職員・・・月日が経過しても、子どもはもちろん大人もそれぞれの心の隅に、この震災の影が大なり小なり潜んでいるかと思うと心が痛みます。今後も子どもたちの成長を見守るとともに、その心の傷をも長い単位で見守っていかねばならないと思っています。



それでも、支え合い、助け合い、誰かのために

石巻支援学校 教諭 荒井はるか

あの日、東松島市赤井の自宅アパートに帰宅して間もなく、防災無線の声を確認しようと窓を開けると、いつの間にか周囲を水に囲まれていた。まさかここまで津波の影響があらうとは、と、我が目を疑いつつも、2階の部屋に取り残されて一晩を過ごした。懐中電灯一つ。浸水して電気系統がおかしくなった車のライトが消え、クラクションの音が止むと、暗闇だけがしんと、どこまでも広がっていた。夜中にベランダから外を眺めると、東の空がぼんやりと赤く染まっていた。後になってから火災によるものだと知る。その晩、私は世の中で何が起きているか知るすべもなかった。ただ、余震におびえながら、帰ってこない家族について余計なことを考えないようにひたすら手を動かし、足の踏み場のなくなった部屋を片付け、降るような星空を眺め、まんじりともせず過ごした。

次の日になってもとにかく情報がない。時折、アパートの2階から見える道路（と言っても、川のような）を、歩いていく人や、船で通り過ぎていく人を見かけては、話し掛けた。「どこから来ましたか?」「水はどこまで来ていますか?」がらんとした住宅街に、お互いの声だけが響き渡る。そこで交わした「頑張りましょう」の言葉が、胸に染みだした。昼過ぎになって、松島の職場から帰宅した家族から沿岸部の被害状況を教えられた。前の晩に私が見上げた星空を、一体どれだけの人が、どんな痛みを抱えながら見ていたのかと想像したら、誰かのために自分のできることを。そう思わずにはいられなかった。

13日（日）、少しだけ水かさが減ってきた。意を決して冷たい水に足を踏み入れ、支援学校に向かう。どんな状況になっているのかは分からなかったが、ただ、たどり着けば何とかかなると思っていた。

たどりついた学校は、震災当日から集まってきた近所の方や在校生の家族らを受け入れ、すでに自給自足の避難所の体をなしていた。その一方で、児童生徒や職員の安否確認をするための情報拠点でもあり、当時の学校は一つの器で二つの役割を担い、混乱しているという印象は否めなかった。避難者の皆さんと、児童生徒の所在や安否を確認しに居住区域に出かける職員、児童生徒や職員の情報を求めに来る方など、人の出入りも多かった。そこで、避難者兼職員として、食料の管理と提供を担当することになった。

避難所の生活を支えたのは、学校にあった食料、近所の農家の方からいただいた段ボール何箱分ものイチゴ、大きなビニール袋にいっぱいキュウリやほうれん草、何百個の鶏卵、学校の向かい側にある施設で焼いたという食パンやお米、職員の家族が勤める和菓子店のおまんじゅう、職員宅の搾りたての牛乳、近所の工務店の方が差し入れしてくださったおにぎりや野菜のおひたし、職員が営む飲食店の冷蔵庫で浸水を逃れた食材。被害の少なかった地域から通勤してくる職員も、手に手におにぎりなどの差し入れを持ってきてくれる。幸い、プロパンガスの設備に被害がなく、調理室が使えた。それらを何とかやりくりしながら、不公平感が出ないように、一日に一度は何か温かい食べ物を提供できるように、食事を準備した。それでも、公的な支援が入る見通しもなく、調理に使う手袋や、おにぎりを包むラップも、大事に切り詰めながら使った。盲点だったのは調味料で、味噌や塩、梅干しの残りにとにらめっこしながら、おにぎりの味付けを考えた。避難されているご家族が、家の冷蔵庫などに残っていた食料を取りに行って提供してくださったこともあった。その日

の汁物には、時々お肉が入っていて、しみじみおいしかったことが印象に残っている。

参考までに、14日のメニューはこんな感じだったと記憶している。

○朝・昼兼用で小さなおにぎり1個、キュウリの漬け物3切れ、チョコレート3個。

○昼前に食パン1枚、イチゴ3個追加。

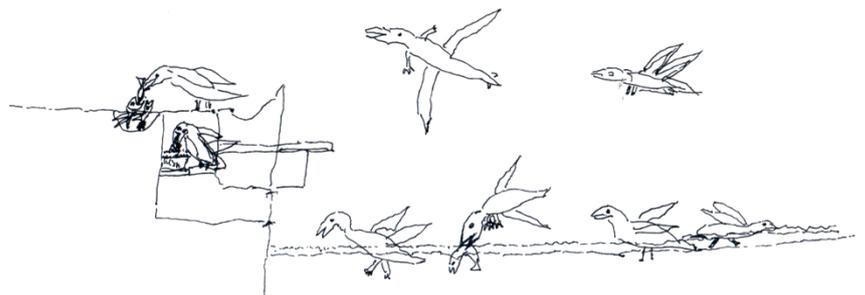
○夜におにぎり1個、汁物。

市からの要請で、自衛隊や日本赤十字による物資が初めて届けられたのは15日のことである。おにぎりやバナナや水分、とりあえずの食料が届き、十分とは言えないまでも、食料が底をついてしまう不安から少しだけ解放された。それでも、次はいつ、どれだけの量が手に入るのか、先行きが不透明なことは確かで、夕方にならなければ次の日にどんな食料を提供できるか定まらない日が続いた。避難者の皆さんにとっては、余計、不安で先行きの見えない日々だったと思う。日持ちのしない食料の支援が重なった時には、無駄にしないように職員に持ち帰ってもらうこともあった。津波の被害が大きかった地域から、やっとのことで出勤してくることのできた職員には、できるだけ食料を持ち帰ってもらおうとしたが、食料だと分からないように新聞紙でくるんだり、リュックサックに入る分だけ、と限られた量しか提供できなかった。食料を持って歩いていると襲われる可能性がある。そんな物騒な状況も、当時は現実だった。

震災から1週間たった頃を境に、人・物・情報の出入りが格段に広がった。携帯電話が使えるようになり、少しずつガソリンが手に入るようになり、各地で何が起きているのか、正確にやりとりされるようになってくる。生活に必要な物資で必要な物は数え上げればきりが無いが、水や食料に関しては、学校や地域で自給自足をしていた危機的な状況は脱したのではないか。避難所がだんだんと生活の場になっていくのに、1週間という期間が一つの目安だったという印象がある。この間、たくさんの人々に支えられて、少しずつ体と心が温まっていた。

* * *

あれから3か月、半年、7か月…と、指折り数えるように過ごしてきた。共に震災を経験した人とは、自然とあの時のことが話題になるが、遠く離れた地から心配してくれる友人には、自分の体験を言葉にして伝えることがなかなかできない。私自身はともかくとして、私たちの学校、地域は尊い命とともに多くのものを失った。多くの人生が、思い描いたとおりにならなくなった。それでも、支え合い、助け合い、誰かのために懸命に力になろうとして、一步ずつあゆみを進めている。振り返ってみれば、その最初の一步は、混乱しているようにも見えた、あの避難所からスタートしていたのだろう。児童生徒の安否確認に出掛ける時に、自分の家族が学校に寄るかもしれないから、と、置き手紙を残していった職員がいた。添えられていたのは彼女が朝食に食べるはずだった小さなおにぎり。「きっとお父さん何も食べてない…。」そんな祈りにも似た大切な思いを、色褪せさせずに伝えていかなくては、と思う。



千年に一度を経験してしまった私たち 生きることができた私たちの使命

石巻支援学校 講師 村上 典子

3月11日。あの大きな揺れの後、私は学校を後にし、祖父母を迎えに行こうと車を走らせていた。ラジオの情報は錯綜していてとても慌ただしく、ほとんど頭に入ってこなかった。少しでも情報を・・・と、雪が降る中、車の窓を開けて防災無線を聞いたが、これもまた頭に入ってこなかった。町中の信号は全て止まり大渋滞が起こっていたが、交差点では譲り合いながら交互に車が走っていた。その光景を見て、やっぱりこの町が好きだと思った。

結局、祖父母には会えなかった。会う前に「この先は津波が来ている。早く逃げて。」と、対向車の運転手に言われ、慌ててUターンをした。近くにいた警察官に、試しに「湊に帰りたい。」と言ってみた。返ってきた答えは「湊にはもう津波が来ている。絶対にだめだ。」何を言っているか分からなかった。来た道を引き返し、別なルートを通って行こうと考えた。しかし、後方からの水と横道から流れてくる水で、水かさが増してくるのが分かった。進行方向の先はバイパスと交差するが、バイパスも水が流れていた。「このままバイパスを横切れないか・・・横切って家に帰ろう。けど・・・」と早急に正確な判断をしなければならぬ状況にいたが、家に帰りたい気持ちが強すぎて、決断ができなかった。そんな時、ふと横のコンビニに目をやると、小学部の阿部美波さんがお母さんに抱えられて立っていた。やっと決断ができた。コンビニの駐車場に車を止め、美波さんを車に乗せた。お母さんが車に荷物を取りに行っている間、一緒にお菓子を食べた。冷静になることができ、お母さんが戻ってきたら近くのアパートに逃げようと考えていた。おんぶした美波さんをはさみ込むように、流れる水の中を3人で渡った。その時の水かさは膝より少し上くらいだったが、流れは速く、何度も足が取られそうになった。親切な住人が家の中に入れてくれ、タオルや着替えまで貸してくれた。私たちのほかにも避難してきた人が10数名いたが一部屋を借りることができた。とても有難かった。いつしか防災無線も聞こえなくなったが、その代わりに、水没した車のクラクションとハザードランプでとても賑やかになった。初めて見る、とても異様な光景だった。

外が真っ暗になり、クラクションも聞こえなくなった。さて、今、世の中ではどんなことが起きているのか・・・。大きな地震があり、おそらく津波がきた。海とは程遠いこの場所で、1m以上は水がきている。じゃあ、海の近くでは？分からなかったが、昼間の警察官の言葉が頭の中で繰り返し流れていた。とにかく明るくなるのを待つことしかできず、じっと朝を待った。お母さんの携帯ストラップと私のヘアゴムで、美波さんが好きなくなる回るおもちゃを作った。なかなか眠れない美波さんは、その即席おもちゃをくるくる回していた。私も借りて回してみたが意外と難しい。上手に回せずに悔しがっている私を横目に、美波さんは得意気に回し続けていた。とても穏やかな楽しい時間だった。

私は、朝になる頃には水が引くものだと思います、何度も外に出ては水の引き具合を見ていたが、何度見ても一向に引く気配はなかった。水が引いていくのを見て安心したかったが、日和山の方で起きている火災の炎と煙に、逆に不安を掻き立てられた。唯一、やたらときれいな星空が私の心を和ませてくれた。しばらく星空を見ながら、「これからどうなるのか。どうするべきなのか。」と漠然と考えていると、流れ星を見ることができた。この先どうなるのかなんて、その時はいくら考えても分からなかったが、「大丈夫。私は頑張れる。」ということだけは確信できた。

薄っすらと夜が明けてくる頃、自衛隊や警察官がカヌーを漕ぐ姿が見られるようになった。あれに乗せてもらい、美波さんを学校まで・・・と思ったが、カヌーでは細すぎて、とても安全に乗れる安定感はなかった。いつになるか分からないが安全に避難できるまで待とうと思い、美波さんの薬を自衛隊員に頼んで持ってきてもらった。すっかり夜が明けるとカヌーやボートが増えてきた。ペランダから、どれなら安全に乗れるかとしばらく見ていると、幅の広いエンジン付きのゴムボートを見つけた。迷わず、それに決めた。もちろん、要請してから実際に乗れるまでには少し時間が掛かったが、それでも13時頃にはボートに乗せてもらうことができた。外は快晴で少し暖かく、ボートの上の美波さんは笑顔で楽しんでいて、その姿にまた和ませてもらうことができた。ボートに乗っていた時間はわずか5分程度だったと思う。水がない場所に着いた時には、テレビでしか見たことがないような自衛隊の車があり、大勢の人ばかりもできていた。その中に、美波さんのお父さんがいた。とても安心した表情で美波さんを抱きかかえた。そのまま4人で自衛隊の車に乗せてもらい、無事、学校に避難することができた。自衛隊の車が学校に着くと、先生方が車に集まってくるのが小さい窓から見えた。少し照れくさかったが、またみんなに会えたことと学校に戻ってくることができたことが嬉しかった。美波さんと一緒に自衛隊の車から降りると、先生方は皆一様に驚いた表情だったが「おかえり」という言葉がとても温かく、安心することができた。

その日から、学校での避難生活が始まった。学校に着いてすぐに、夕食のおにぎり作りをした。その時はまだ世の中の現状を知らず、ただ学校に戻れたという安心感から、とても楽しく感じた。電気がない生活は、あっという間に夜を迎えた。夜になり、ようやくラジオの情報に耳を傾けることができた。何か大変なことが起こっている・・・ということくらいしか、頭の中で処理をすることができなかつたし、どこか非現実的で映画の話のようにしか捉えることができなかった。それに、じっくりとラジオの情報を処理する間もなく、次々と緊急地震速報が流れ、大きな余震が何度も続いた。その度に体育館に行き、ストーブの火を消しては点け、消しては点けを繰り返した。本部で横になったりもしたが、やっぱり寝ることができず、落ち着かないまま、また朝を迎えた。学校にいと、家族や親戚、友達が私の安否を確認に来てくれた。しかし、うれしい情報と同じくらい、悲しい情報も入ってくるようになった。ラジオから聞くよりはリアルなものだったが、それでもやっぱりまだ現実として受け止めることができなかった。

児童生徒と教職員の安否確認に分担して行くことになったとき、私は湊・鹿妻・渡波方面を希望し、行かせてもらうことができた。手段は、自転車と徒歩。初日は稲井から万石浦に抜け、各学校を回った。避難者名簿を見たり、各教室や体育館にいる人を見て確認したり、拡声器で呼び掛けてもらったり、できる限りの手段を使って一人でも多くの無事を確認したかった。どこに誰がいるかも分からない状況の中、無事が確認できたときは、本当にうれしかった。しかし、すさまじい現実も目の当たりにすることになったし、安否確認は常に危険と隣合わせだった。歩いている途中で津波警報が発令され、急いで宮城水産高校の屋上に避難したり、行く先々でもしもの時に備えて逃げる場所を考えながら、瓦礫で道を作って瓦礫の上を歩いたりした。途中、私の家を見た。なぜか国道をまたいで家が建っていた。おかしい光景だったが、少し離れて見ると外観はそのまま、「ただいま」と帰りたくなった。家に近付くと、私が大切にしていたスキー板とポール、スキーブーツを持って瓦礫の山を越えてくる父の姿があった。「おー！これでまたスキーできるぞ。」と、父。思わず、「何してるの！」と言ってしまったが、私もやっとなんか現実を受け止め、覚悟を決めることができた。生まれ育った町の変わり果てた姿を現実のものとして受け止めるには、一步一步歩く必要があったし、じっくりと時間を掛けて歩かなければ受け止めることができなかったかもしれない。翌日は、

牧山トンネルの中を歩いた。それまでは車で毎日走っていたトンネルだったが、別なものに感じだし、とにかく長かった。「もし、今ここで地震がきたら・・・」と少し急いで歩いた。徒歩や自転車で安否確認は効率的ではなかったかもしれないが、ガソリンが入っている車も少なく、携帯が通じない状態で、いつ来るかも分からない走行可能な車を待つほど呑気にはしていられなかった。少しでも早く、多くの無事を確認したかった。結果、多くの無事を確認することができた。時間は掛かったが、必要な時間だった。

数日すると、各地域の現状も流れるようになり、「着の身着のまま」「瓦礫の山」「壊滅的」という言葉がラジオから頻繁に聞くようになった。今まで聞きなれない言葉だったので、やたらと耳に残り、その度に恐怖を感じた。しかし、「壊滅的」の「的」という言葉に、少しの希望を感じた。「壊滅ではないのだから、大丈夫。」と。もしかしたら、ラジオのアナウンサーは意識して使っていたわけではないのかもしれないが、そういう些細なことでも頑張れた。

避難所生活。避難所運営。もちろん初めての経験だ。試行錯誤の繰り返しだったが、私は、とにかく安心して過ごしてもらおうことを考えた。居心地の良い避難所・・・少し不思議な表現にも感じるが、避難してきた人たちは津波を目の当たりにしたり、怖い思いをしてきた人たちだ。無事に避難してきてくれたのだから、まずは安心できる心地良さを感じてもらいたいと思った。だから、大きな余震の度に「大丈夫ですよ。」と部屋を回ったり、話をたくさん聞いたりした。話しをするときには、今この人は話を聞いてもらいたいのか、話をしてもらいたいのか、またそれは震災の話なのか、それとも全く関係のないたわいもない世間話なのかなど、いろいろと考えた。さらには「辛かったですね。大変でしたね。」なのか「みんなも同じだから大丈夫ですよ。」なのか、どちらのタイプの返事が求められているのかまで考えた。私が適切に対処できていたかどうかは分からないが、しばらくすると、毎回そこまで考えずに避難生活を送っている方々と冗談を交えながら笑って話ができるようになった。避難所生活も少し落ち着いてくると、清掃やストーブの火の管理、物資の分配、水くみなど、みんなで分担し協力して行う体制ができてきた。そのおかげで、4月7日の最大余震の時も適切に対処でき、大きな混乱もなく乗り切ることができた。

家が片付いたり住む場所が決まったりした方は、避難所を退所していく。当たり前なこと、とても嬉しいことなのだが、少し寂しく感じることもあった。これから無事に安全に暮らせますように・・・という願いを込めながらお見送りをした。一人、また一人と徐々に避難生活を送る方が少なくなり、ついに5月の新学期前に避難所の閉鎖が決まった。ほぼ同時期に、私もアパートを借りることができ、引っ越すことができた。約2カ月の避難所生活は終わった。今まで体験したことのない濃厚な日々だった。

あの日から8か月近く経った現在でも、まだ「夢なのでは？夢だったら・・・」とってしまうことがある。少しずつ更地が多くなり、なんとなく復興が進んでいるように思う一方、瓦礫置き場の山が高くなっていく現実。今後、この町がどうなっていくのかは正直まだ見えない。しかし、千年に一度を経験してしまった私たちは、記録を残し、しっかりと後世に引き継ぐことで、千年後に同じような辛い思いをする人をなくすことができる。これは、生きることができた私たちの使命だ。この悲しい思いを決して無駄にせず、大好きなこの石巻地区の復活を楽しみにしていきたい。



たいせつなものに気づく日々

石巻支援学校 元教諭 宮川和子

あの日から7か月が過ぎようとしている今も、私の目の前には流されていく数々の車が目に浮かびます。帰宅途中、大街道中浦地区で大津波に被災し、すぐに民家の2階に避難させていただき九死に一生を得ました。今も時々津波の夢を見ます。街を歩く時は、高い場所を確認するように「今津波がきたらどうするか」をシュミレーションしてしまいます。街はどんどんきれいになっていきますが、私の『3・11』は簡単にあの日に戻ってしまうのです。

車を失いその日から1週間ほど10km以上は歩いたと思います。職場に行く前に高校や中学校等の避難所や総合体育館、市役所を回りそれから職場に向かうこともありました。市内の水の状況は実際にほとんど歩いたので把握することができました。私はじっとしていることができませんでした。歩かずにはいられない、そんな気持ちがありました。それは、目の前で亡くなった人がたくさんたくさんいたからだ、今振り返るとそう思います。安否確認をしてあげなければという強い気持ちは、自分だけが助かったという罪悪感が働いてのことでした。

避難所になった本校にも児童生徒やそのご家族、そしてほかにもたくさんの方が集まりました。食品がわずかしかなかったこともあり市役所へ行って物資の支給をお願いしたこともありました。被災から10日もするとたくさんの物資が届くようになりましたが、私の心はとても不安定でした。行方不明の児童生徒、親戚、そして友人の家族がいて、どうしても落ち着くことができませんでした。

『人が生きていくためのたいせつなものは水。

そして、少しの食料ときれいであたたかい空間。』

避難所に限らず、親戚の家等に避難することができれば、ある程度困らないくらいに生活空間を得ることができました。でも、少しずつ環境が改善しながらも、混乱期は2か月続いたと思います。大きかったのは心の混乱でした。

『一瞬の出来事でどうすることもできなかった大津波。

人の手ではどうすることもできない程の破壊力。

大震災は、立場や環境、大切なことの順位をも混乱させました。』

避難所の対応をしてくださった市役所職員や本校職員の中にも、家族や家が流されたけれども仕事をしている方が大勢いました。肉親や身近な人を亡くした悲しみは慰めのことばや物で癒すことなどはできません。そばにそっといることしかできないことも分かりました。

『人間の心は弱いものです。一人では何もできない。

二人いれば二人以上の力になるんですね。』

緊急学校支援員として渡辺桂子先生と二人で避難所運営に取り組みながら、それを実感しよく話

していました。明るく生きることは、心の芯の部分に希望が生まれてきます。忙しい中にも笑顔が多くありました。二人で環境整備やたくさんの物資を整理整頓した貴重な体験でした。

『私たちができることは、この震災を次の世代へつなぐこと。』

『少しずつ、正しい知識として次世代へつなげること。』

私は震災後、生かされたという気持ちで毎日を過ごしています。大きな津波を体験し助かった命だということを心にとめるようになりました。『命』の大切さ、『普通であること』の大切さを気づかせてくれたのは震災であり津波です。失ってみて初めて分かる苦しい『気づき』です。

時間が経過し7か月が過ぎようとする今、ようやく考えることができるのでしょうか。普段気にもとめなかった普通の幸せに気づき、感謝し、自分ができる範囲で、身近な人の「心」にそっと寄り添いながら、少しずつ前を見て進むことができればと思います。

『明るく、元気に前を向いて』

石巻に住み

きれいな石巻をつくるために

自分でできることをしていこうと思います。



2 保護者の手記

3月11日 突然の大地震

佐々木 ひろみ（高等部1年 佐々木唯の母）

唯の卒業式も無事に終わり、自宅で昼食中、あまりにも大きな揺れで立ち上がることもできず、唯と弟に覆い被さり、揺れが収まるのを待ちました。揺れが少し収まり掛けて辺りを見ると、本棚から本が散乱し、いろんなものが倒れ、一瞬何が起きたのか分からなくなりました。唯も顔面蒼白で、目をぱちぱちさせていました。

「大丈夫。大丈夫。」と唯と弟、そして自分に言い聞かせながら、下の階にいる祖父母の所へ向かいました。二人とも怪我もなく安心したところに蛇田小学校から迎えに来るようとメールが来ました。余震が続いていたので、唯と弟をこたつの中にもぐらせ、祖父母に留守を頼み蛇田小学校に向かいました。蛇田小学校に向かう途中、近所の人たちが避難所に向かっており、道路は渋滞していました。

すると途中で大津波警報のアナウンスが響きました。わけが分からない混乱した気持ちで急いで自転車をこぎ、小学校に向かいました。小学校に着くと、体育館に入りきれない人達が外にあふれていました。やっとの思いで息子を探し出し、家へ急ぎました。家に着くと、既に水が迫っていました。（急いで避難しなくては…）と子どもたち、祖父母を車に乗せて走らせました。蛇田小学校が指定避難所でしたが、（大勢の人があふれかえっていた…もう入れない。）と思い、無我夢中で石巻支援学校に向かいました。

大渋滞の中、支援学校に着く頃にはすっかり日が暮れていました。不安な気持ちの中、車を降りると、先生方が玄関で待っていてくれました。すぐに唯を抱きかかえて「体育館に入りましょう。」と家族全員を誘導してくれました。先生に抱かれ喜んで唯を見た時、そして体育館のろうそくの灯りを見た時は、とても温かく明るく感じ、涙がこぼれました。

先生方は「体育館は寒いから」と言って、マットの上に布団を用意してくれました。寒さに弱い唯も、闘病中の祖父も身体を休ませていただきました。ありがとうございました。

慌てて避難したため、唯の常備薬を忘れたことに動揺しましたが、学校に予備の薬とラコール（栄養剤）を置いていたことを思い出しました。一日でも飲み忘れることはできないてんかんの薬だったので、置いてあって良かったと思いました。おかげで大事には至りませんでした。唯はいつもと違う環境で不安な表情を見せていましたが、先生方がたくさん声を掛けてくれました。声を掛けられるたびに喜ぶ唯を見てほっとしました。毎日の食事でも、先生方が炊き出しをしてくださったり、お菓子などを自宅から運んで分けてくださいました。本当にありがたかったです。

地震の翌日からは、近くのイチゴ農家の方からイチゴを分けていただいたり、地域の方に野菜などを届けていただきました。地域の皆様にも感謝の気持ちで一杯でした。

先生方は支援学校に避難している人達のお世話をしながら、毎日生徒たちの安否を気遣い、探しに出かけていました。危険な道を自転車や徒歩で泥まみれになりながら探してくださいました。夜になれば、懐中電灯を持ち、廊下で一晩中待機して、「足下に気を付けてください。」と言葉を掛けながら誘導してくれました。

数日後、体育館から1階の教室に移動してからも、ストーブを用意してくださったり、ろうそくの火を灯しながら「寒くないですか？大丈夫でしたか？」と言葉を掛けてくださいました。暗いのが苦手な唯でしたが、先生方の優しい声、そして真っ暗な中のろうそくの優しい灯りが心も身体も温め、私の癒しになりました。唯もろうそくの灯りを喜び、じっと見つめていたことが思い出されます。

体調を崩したときも、薬をもらいに行くときも、車で搬送していただき付き添ってもらい、本当に心強かったです。

自宅に戻ってからも、水、食料、おむつなどがなくとも支援学校や病院の先生、他県から応援の方が来てくださいました。多くのボランティアさんの支援に助けられたことで、今の生活に戻ることができたと思っています。

本当にたくさんの方々にも唯も家族も支援していただきました。ありがとうございました。

私たちの心を温かく灯してくれたろうそくは、支援学校の生徒の作業作品でした。ろうそくを作ってくれたお友達、本当にありがとう。

石巻市では宮城県石巻支援学校（児童生徒148人）が震災後、障害のある子どもたちや家族のよほどこころなつた。

避難所での生活が難しい子どもも多く、震災当日だけで家族が避難。その後、一時は在校生の10家族を含む約80人が学校に身を寄せた。自閉症の子どもがいて約1週間、車で避難生活を送った末に学校にたどり着いた家族もいたという。

支援学校よりどころに

石巻

2次避難へ ストレス懸念



石巻支援学校に母熊谷宏美さんと身を寄せる司君。避難生活に慣れ、徐々に笑顔を取り戻してきた＝19日

学校も避難先に困っている家族を積極的に受け入れる方針を打ち出した。子どもの障害などに合わせて7教室を生活スペースに提供。教職員が2時間おきに巡回した。

飲食店パートの熊谷宏美さん（24）は、手足が不自由な小学部5年の長男司君（10）と2人暮らし。自宅に大きな被害はなかったが、2010年10月に心臓の手術を受け、司君を背負って長時間、配給や買い物に並ぶことができない。震災後3日ほどは水も食料も入手できず、学校に避難したという。

震災後、司君は何度か高熱を出すなどしたが、ようやく避難生活に慣れたという。熊谷さんは「周りに知っている人がいると安心するようだ。笑顔を見せる回数も増えた」と安堵（あんぶ）の表情を浮かべる。

ライフラインの復旧が進み、学校に身を寄せているのは現在、在校生の5家族を含む計26人にまで減った。学生ボランティアの支援や避難家族による自治運営も始まった。

教職員の仕事は避難者の世話から、5月12日の授業再開に向けた準備に力点が移りつつある。20日には、子どもたちがストレスを感じることなく避難者全員で移動できる2次避難先の提供を市に要望した。

校田博校長は「避難者にはさまざまな事情があり、2次避難にも特別な配慮が求められる。自治体とともに、在校生、避難者それぞれが不安を感じずに済む方策を探ってきたい」と話している。（門田一徳）

復興・だれもが安心安全に暮らせる街に

新田 理恵（中学部1年 新田綾女の母）

3月11日は石巻支援学校の卒業式。次女「綾女」が小学部卒業を迎え、夫婦で式に参加しました。午前中に無事卒業式を終え、その後3人で自宅へ帰りました。

そして一息つき、綾女は疲れていたのか眠り始めた時でした。ぐらぐらと強い揺れが始まりました。揺れはどんどん強くなり、しかも長くどうすることもできず、早く収まるのを待つしかありませんでした。

やっと揺れが収まりテレビを付けようとするすると停電で消えています。その時、外からサイレンで大津波警報の発令を知らせる放送が聞こえてきました。そして夫の「山に逃げろ！」の一声。

慌てて娘に必要なものを鞆に詰め込み、避難準備を始めました。綾女は気管切開からの吸引と胃瘻からの注入のための医療ケアが必要なので、吸引器・注入セット・薬・おむつなどを持ち、そのほかにも着替えや布団、毛布、車いすを車に積み、高台に急ぎました。早めに避難したので、渋滞に巻き込まれず近くの山の上へたどり着くことができました。そして車でしばらく待機することになりました。その後、津波の被害状況などの情報が全く入ってこなかったため、その場から動くことができず、不安なまま車の中で一晩を過ごすことになりました。吸引器の電源を車のバッテリーからとり、寒かったので暖房も付けていました。

途中ガソリンがもつかどうか気になり、近くの避難所になっている中学校の体育館の様子を見に行ってみました。ところがそこは電源の確保もできず、暖房もなく、何百人の人が横になるスペースもない状態でした。（とてもこの中に娘はいられない・・・）と思いました。そして、夜が明ける頃、家にはもう戻れないほど津波の被害が大きかったことを知り、そこから近くにある親戚の家へと向かうことにしました。

そこは津波の被害はなかったものの、ライフラインは完全に寸断されていました。とにかく吸引を何とかしなければならなかったため、車で充電をしながら何とか吸引をしていました。

3日くらいにガソリンがいよいよ少なくなってきたため、そこからは非常用足踏み式吸引器を使い、電気が来るまでの間を何とか乗り切ることができました。その他の必要な物品なども3日分くらいしかもっていなかったため（どうしようか・・・）と困ってしまいました。避難先の近くに支援学校のお友達の家があるのを思い出し、訪ねてみることにしました。事情を話すと、快く必要なものを分けてくださり大変助かりました。

7日目で携帯電話が通じ、拓桃医療療育センターの先生から電話が入りました。そして薬や経管栄養剤、紙おむつを手配してくださいました。それを酸素の業者の方が避難先まで車で届けてくださったのです。その後も友人や親の会、福祉施設の方、支援団体などに助けていただき、必要なものは何とかそろい、ぎりぎりのところで切り抜けることができました。

それから数日後、学校に緊急用の物品や着替えなどを取りに行くことができました。学校では日ごろから先生や看護師さんと、緊急時に必要な物品や薬などを準備しておいたのです。今回、この備えも大変役に立ちました。

緊急時をどうにか切り抜けたものの次に待ち構えていたのが、これから生活していく上で重要な住まいの問題でした。自宅は津波で全壊したため仮設住宅に申し込むことにしました。申し込みの時点で「障害児は優先枠に入れる」と言われ、早めに入れると思って期待して待ちました。と

石巻の重度障害児家族 生活再建に悩み

医療的ケア不可欠 地元施設なく

重い意識障害のある子どもを持つ石巻市の一家が、東松島市の祖母宅で避難生活を送っている。海沿いの住宅街にある自宅は、津波で1階部分がほぼ全壊。たんの吸引など医療的ケアが必要で子どもから離れられず、自宅の片付けは進んでいない。家族は「いつごろ元の暮らしに戻れるのか分からない」と、生活再建のめどが立たない状況に焦りを募らせる。

祖母宅に 避難 「仮設住宅望み」

避難生活を送るのは、新田綾女さん(17)の一家4人。3月11日の震災後、石巻市の親戚宅に1カ月ほど身を寄せ、現在は東松島市の祖母宅に避難している。

綾女さんは1歳の時に水難事故に遭い、脳に重い障害を負った。頻繁なたんの吸引が必要で、家族が片時もそばから離れない。

自宅は石巻工業港から約500㎡の場所であり、津波で1階天井まで水没した。片付けは父親の英樹さん(46)が休日を利用して長女の遙菜さん(17)と床の泥を取り除いた程度。流された隣の家

の納屋が自宅にもたれ掛かり、がれきが周囲に散乱したまま。ポランティアの支援も考えたが、家族の立ち会いが必要なため利用できずにいる。

石巻市にはもともと、医療的ケアが必要な重症心身障害児が利用できる施設がない。

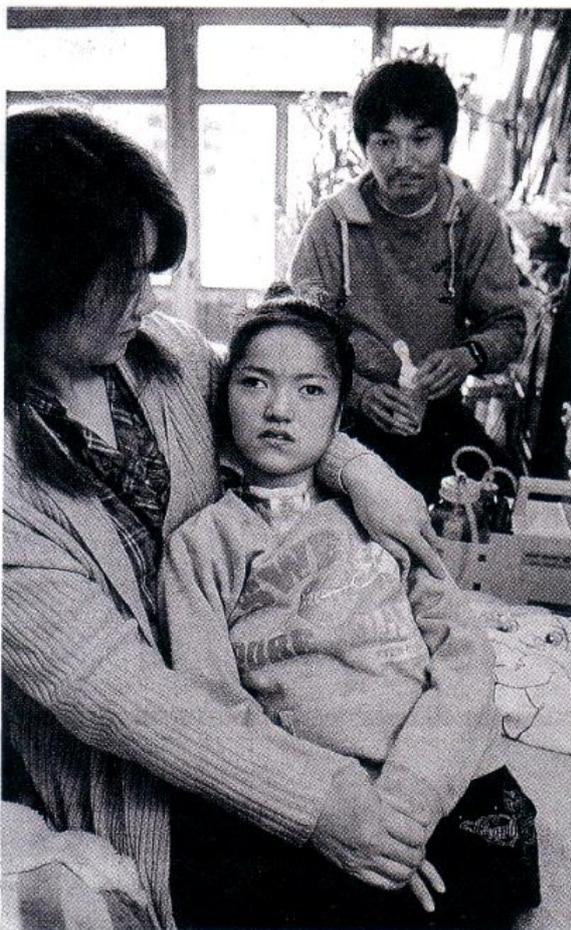
石巻市にはもともと、医療的ケアが必要な重症心身障害児が利用できる施設がない。

かかりつけの宮城県拓桃医療療育センター(仙台市太白区)からシヨウトステイでの受け入れを提案されたが、母親の理恵さん(41)は「初めての綾女さんは大きなトラウマで生活しよと、

仮設住宅への入居を申請した。市は障害者や高齢者を優先すると説明するが、第1次分137戸に

理恵さんは「親族とはいつまでも世話に頼るの申し訳ない。仮設住宅に移り、早く自宅の片付けを進めたい」と話し、26日にある抽選、入居選考結果を待てる。

(門田一徳)



たくさんの人に支えられて

阿部 美樹子（高等部 史織里の母）

3月11日のあの日、二人の娘は自宅で、小6の息子は小学校で、そして私は外出中で牧山トンネルを出た所であの大地震に遭いました。運転中でもすごい揺れで車を端に寄せ停車させました。前方に見える信号が壊れたのを見た時（これはただ事ではない）と急いで家に戻りました。

家の中は倒れたものが散乱していましたが娘たちは無事でした。その日、デイサービスに行っていた同居していた私の母が心配でしたが、きっと避難していると思い息子を迎えに鹿妻小学校へ向かいました。小学校で息を引き取り3人を車に乗せたまま、自宅に荷物を取りに一人で歩いていると、前方から大勢の人たちがこちらに向かって走ってきます。誰かが「こっちはだめだ！津波だ！！もう水、来てるっ！！」との叫び声が聞こえたため、私は慌てて学校へ引き返し、車から子どもたちを下ろすと山の方へ走り出しました。運動が苦手な長女の手を力いっぱい引きながら、山に登る途中の神社の境内のような所で、雪の振る中暗くなるまで待機していました。そこは大勢の人たちが避難していて、強い余震と津波の恐怖と不安でいっぱいだったことを覚えています。暗くなった中、思い切って小学校に停めていた車に戻りました。

翌朝、車から出てみると世の中は一変していました。

小学校の駐車場では3日間過ごしました。その間、学校には当然ながら食料の配給はほとんど無く、体育館内に場所を確保しグループ登録しなければ、車上生活の私たちに配給はありませんでした。

12日に夫が学校に尋ねてきて無事を喜び、早速二人で冠水した道路を水・瓦礫を掻き分け自宅へ。そこは壁は抜け、流出したガソリン、瓦礫が入り無惨なものでした。それでも食べられそうなものを探し、まるで戦後のようでした。

その後、同じく被災した夫の実家の二階にお世話になり、そこでも食料が尽きそうになった頃、河北地区に住んでいる夫の弟が自転車で尋ねてきてくれ、自分のアパートに来るよう誘ってくれました。夫の実家家族と私たち計8人で河北の2DKのアパートにお世話になることになりました。ライフラインが戻った時、たまたま空いていた同じアパートの一室を借りることができました。そして現在に至っています。河北地区は地震の影響でライフラインは麻痺していましたが、津波の被害は無く、別世界のようなようでした。

鹿妻小にいた間から河北地区に越してきてからも行方不明の母を捜すため、避難所や遺体安置所を回りました。安置所はまるで地獄でした。そして心配の甲斐もなく、母は津波の犠牲になっていました。見つけた時は、覚悟はしていたもののショックで一気に悲しみがこみ上げてきました。今も母が発見された湊地区にはあまり近寄りたくはありません。

そして振り返ってみると、本当に今までのことが現実だったのか夢のようです。水が出るまで公園まで水汲みに通った日々、平和な地に来て何の配給も無く、店頭販売を始めたスーパーに何時間も並び食糧を買っていた日々、ガソリンを求めガソリンスタンドに何時間も並んだ日々、2DKのアパートに総勢9人で住んでいた日々、自衛隊の湯に通った日々…。

今、落ち着いたようには見えますが、将来の見通しは全く立たず、渡波中に通う子どもたちを稲井小の仮設校舎へ送迎し、ただただ毎日忙しく過ぎてゆきます。日々を淡々と消化しているかのよう…。

それでもこんな大災害でも生き残った私たちは亡くなった母の分、犠牲になった多くの方々の分まで命を大切に生きていかなければならないのです。幸い、障がいのある娘も震災の影響も無く、とても元気です。この大切な3人の子どもたちを生きる支えに、明日からも頑張っていこうと思います。

そして最後に、今回の災害でとてもたくさんの人に支えられて今日まで来ました。小学校で車上生活をしていた時、水や食べ物を分けてくれた昔同じ地区だった方、被災前のご近所の方、さらに被災者のために働いてくれた自衛隊、警察、ボランティアの方々、心から尊敬、感謝いたします。ありがとうございました。

中学校で、娘の頑張りみなさんの理解で

三浦由里香〈高等部エリの母〉

●激しい揺れに身動きがとれない

3月11日、その日は支援学校小・中学部の卒業式だった。高等部2年生の娘（エリ）はお休みで、大学生の兄と共に家でお留守番。私は午後の仕事を終え、銀行へ出かけていた。そろそろ急がないと、またエリが台所で何かを作り出すぞ。料理好きの娘、人が見ていないときに動き出すのだ。早く帰ろう！

「！！？地震！！！」

キャッシュカードをATMに入れたとたん、大きな揺れ。すぐ店内に入り、おさまるのを待った。というより、激しい揺れに身動きがとれなかった。すぐに主人から電話。「今、どこだ？大丈夫か？俺は大丈夫だ」「今、大街道の銀行にいる。エリはお兄ちゃんと家で留守番。お兄ちゃんにすぐ電話して！戻ったらA中に避難するから」と伝えた。



●娘は地震！がたがたがた！」と

やっと小さな揺れに変わった。銀行を出て車を走らせ、家へ急いだ。道路は大渋滞。再び大きな揺れ。ラジオをつけると「沿岸地域住民は大至急、高台に避難してください！」と、アナウンサーの声。

「え？津波？まさか！・・・この辺はどうなの？・・・大丈夫だよな・・・」

心の中でつぶやきながら、とにかく早く家へ戻らなきゃ。家に着いた息子が玄関に立っていた。娘は居間に座っていた。娘は私の顔を見ると「地震！がたがたがた！」と言った。「そうだね。地震だね。怖かったね。大丈夫だよ。すぐA中に行くよ」と伝えた。娘はすぐに立ち上がった。息子と急いで、懐中電灯、電池、ブルーシート、毛布1枚、あとは覚えていない・・・とにかく車に積んだ。息子が私の実家と主人の実家のことを心配し、行ってみようと言い出した。しかし近くの橋ま

で行ったが水があふれていて、それ以上は進めなかった。
みんなどうか無事でいて、祈る思いで、仕方なくUターンした。

●体育館は娘には無理だな・・・

地域の指定避難所はK小学校かA中学校。息子と娘の卒業した学校。娘は小学校・中学校と支援学級で9年間お世話になった。A中は2年前までいたから、知っている先生もまだ何人かいるだろうな。もちろん、A中に避難するつもりだった。もしも宮城県沖地震がきたら、避難場所はA中だねと、日ごろから家族で話をしていた。迷いはなかった。

息子が「車は置いて歩いていった方がいい」と言う。家のすぐ前にある駐車場は1メートルほど高い。そこに車を止め、歩いてA中に向かった。

A中に着くと、すでに避難してきた人たちでいっぱいだった。娘は自閉症で・聴覚が過敏で幼児の泣き声や奇声が苦手。たくさんの音が飛び交う中では、耳ふさぎをして固まってしまう。体育館では大勢の人の声や騒音から逃げられない。娘には無理だなと思った。先生方に促されて、校舎の中に入った。階段を登り、なるべく娘の苦手な幼児や赤ちゃんの声が少なそうな教室を探した。

●美術室ならなんとか落ち着けるかも

このとき私は、娘のお絵かきセットや宝物（大好きなキャラクターのぬいぐるみやお気に入りの本）を持ってこなかったことに気づいた。大失敗！娘に「〇〇、忘れてきました。〇〇、持ってきてください」と連呼されるかもしれないな。そのことに気づけなかった。ごめん！なんとか娘の落ち着ける教室を探したかった。そうだ、美術室なら、娘の好きな「絵を描く」材料を借りることができるかもしれない。美術室は、中学時代の娘の「なじみ」の教室だ。もし長期間滞在することになったとしても、美術室ならと思って、3階の美術室を選んだ。

ぎゅうぎゅう詰め教室で、日も暮れて真っ暗になっても、娘はじっと我慢していた。時々、不安になるのか、「地震！がたがたがた！」と言った。夜も不安なのか、何かの音が気になるのか、「お母さん！」と私を呼ぶ娘。この状況の中では「静かにね」と言わざるを得なかった。娘はずっと耳をふさいで耐えていた。

●携帯で「アンパンマン」を娘に見せる

2日目。朝になった。校舎の窓から見える道路はまだ水が引いていない。娘は時々「お腹すいた」とは言っても、騒ぐことなく我慢している。息子が持っていたチョコを食べさせたり、持ってきたおせんべいを食べさせた。近くの方にパンをすすめられたが「いらない」と言う娘。申し訳なかったが、娘は食パンは食べられるが、菓子パンはほとんど口にできなかった。この状況を予測できたはずなのに、食料をほとんど持ってこなかった。本当にだめな母。家には買い置きの食べ物はなかった。周りの人たちも食べ物を食べている様子はあまりなかったのも、娘もなんとか我慢できていたのかもしれない。でも、かわいそうなことをした。ごめんね、エリ。もう少しで戻れるから。頑張ろう。

ふだんから、外出したときに、店の音や人の声、ざわめきを紛らわすために見せる、私の携帯電話に録画していた「アンパンマン」を娘に見せた。画面と音に集中できるのか、このときは耳をふさがなくて済む。



●頑張ってるなあ、エリ

でも充電が切れ、見られなくなると、たちまち耳ふさぎをした。息子が携帯の乾電池式充電器を持っていたので、どうしても必要なときは落ち着かせるために見せることにした。頑張ってるなあ、エリ。

娘はこの状況を理解して、必死に「今は普通じゃないんだ」と納得させているのかもしれないと思えるほど、落ち着いて静かにしていた。娘は、見通しが立たない不安を、アンパンマンの動画で紛らせていたのかもしれない。エリ、早く帰りたいね。もう少し我慢だね。

この日の午後、1階と2階には高齢者と体の不自由な人、乳幼児の家族。3階と体育館は健康な人たちと、避難者が振り分けられた。我が家はお願いして美術室に留まった。主人は無事だろうか？地震直後に聞いた「俺は大丈夫」を信じよう。今夜は私が耳をふさいであげるから、少しでも眠れたらいいね。

●「エリ、いますか？」「エリちゃん、いますよ」

3日目。窓から外を見ると、水が少し引いていた。息子が校舎の周辺を見に行っただけの様子を伝えてくれた。家の周りはどうなっているのか？我が家は大丈夫だろうか？そんな状況だったが、一緒に避難した友人と、昨日の夜中、いろんな音がする中で、娘が「しずかに！」と言ったひとりで、周囲がシーンとなった場面を思い出して、笑いながら話したりもした。私が友人と笑って話せるなんて、それだけ娘が頑張って静かにしてくれていたおかげだった。

突然、主人が教室に来た！一番危険な場所で仕事をしている主人だったが、職場のみんなと日和山まで車で逃げて無事だった。日和山から下り、腰まで水に浸かりながら市役所まで歩き、そして今日、私たちの元に駆けつけてくれた。よかった！無事でよかった！主人はA中に着くと職員室に行き、「エリ、いますか？」と聞いたそう。すると「エリちゃん、いますよ」とすぐに返事が返ってきたという。「ああ、エリが有名人でよかったと思ったよ」と笑いながら話した。

この日から食事が配給された。一人3センチの味噌パン1個。娘はお腹がすいていただろうに、一口しか食べなかった。

●家に行って、使えるものを探す

外は水が引いてきたので、主人が「家に行ってみよう」と言った。まず息子が家に戻り、車に乗って来た。そして、みんなで車に乗って家に戻った。家の中は浸水し、何もかもが水浸し。畳は盛り上がっていた。娘は「地震！がたがたがた！水びたし！」と言った。自分の宝物が全て濡れて使えないのだ。「触らないんだよ」と伝えた。ここに長くは住めない。とにかく濡れていない使えるものを探した。

乾電池を探した。娘に1秒でも長く携帯の動画を見せてあげたかった。乾電池だけは見つけた。この乾電池で、娘はその後の数日を乗り切った。そして、教室に戻ったときに床に敷けるようなもの、厚手のジャンパーなど暖を取れるようなもの、娘が食べられるものを探したが、何もなかった。その後も毎日のように家に戻っては、使えそうなものを探した。ホワイトボードやカレンダー、お絵かき用の濡れていないペンや鏡を見つけた。

地震から5日以上が経ち、ガソリンもなくなってしまった。家の中は、海水と泥が混じった水が入ったので匂いがきつく、長くは住めなかった。早く片付けたいのに。避難所生活はまだしばらく続きそうだ。「どこかで何か物資の配給がないか」「どこか店は開いてないか」とにかく娘が落ち

着けるものを、何でもいいから手に入れたかった。その頃は、蛇田方面ではお店が開いていた。娘と一緒に、そこまで歩いて行った。それも、娘にとってはいい気分転換になったようだ。娘にとっては、母と一緒に歩いたり、父に自転車の後ろに乗せてもらったり、「外の風を受ける」ことが、大のお気に入りになっていた。

本当は、私も主人も、食料の調達に必死だったのだけれど。

●少しでも以前の生活に戻せるように

娘は避難している人たちと一緒に配給の列に並び、渡される食料が嫌いなものには「いらない」と言い、好きなものには「もっと」と言ったりした。結局、娘は、主人が調達してきた「いちご」と「ドレッシングがかかったレタス」ばかり食べていた。夜は物音が気になって眠れないようで、「静かに！」と言ってはみんなを起こすなど、自閉っこ丸出しだった。でも、そんな娘が周りのみなさんの笑顔を誘ったのも事実だった。それだけ、周りのみなさんが娘を知ってくださり、理解してくださった。娘は夢中でお絵かきをして、娘なりに心の安定をはかっているようだった。

1週間が経った頃、家のプロパンガスが使えるようになった。やった！家にはまだ住める状態ではなかったが、ガスが使える！感謝！これで娘の大好物の味噌汁が作れる、食べさせられる！それから毎日、主人は朝5時に起き、水筒に給水した水を家に持ち帰り、プロパンガスでお湯を沸かしてA中に戻る。私がお湯を使ってインスタント味噌汁を作って、娘に食べさせる、ということをした。さらに数日すると水道も復旧した。洗濯ができる！娘は洗濯が大好き。それからは、昼間はA中から家に戻り、私が手洗いして絞った洗濯物を「干す」ことが娘の日課に加わった。娘は震災前から常に料理や洗濯をしていたので、こうして少しでも以前の日常の生活に戻せることが、娘の心のケアにつながるのではないかと思った。その頃は毎日、ホワイトボードに「洗濯を干す。しみ汁を飲む」とスケジュールを書かせられ、実行していた。

●娘のストレスはピークに

2週間が過ぎた頃のある日、夕方突然、娘は大声をあげて周囲のみんなをびっくりさせた。寝不足と偏食による食事のストレス、先が見えない不安など、娘のストレスはピークに達していたのだろう。とうとう限界がきたようだ。避難所に来ていた赤十字の医療班に相談した。この不自由な生活から少しでも楽にしてあげたくて、睡眠薬を処方してもらった。A中の先生方にも相談し、昼間はみんなと同じ教室で過ごし、夜はできるだけ音が気にならないように別の部屋をお借りすることができた。娘の特性を知っていてくださる先生方だから、わがままな申し出も許してくださったのだと思う。一緒に避難している周りの方々には申し訳ない気持ちだったが、周りのみなさんも娘と過ごす中で、娘の特性を理解してくださり、娘の頑張りや限界を認めて、許してくださった。ありがたかった。避難所で一緒に過ごしながら、娘が、時には大声を出したり、時には夢中でお絵かきをしている姿を見てくださり、同じ部屋の方々が娘に優しい言葉を掛けてくださることが増えてきた。私は心が救われていた。

●娘は優しい方たちに囲まれて

みなさんととても優しい方ばかりだった。Sさんご夫婦、4年生のH君、6年生のCちゃんの姉弟家族、Nさん家族、Aさん家族。Sさんは「エリちゃんも頑張ってるんだよね。全然気にしないでいいんだよ。お母さん、みんな分かってるから、大丈夫だから」と言ってくださった。S

さんには避難生活の間、何度も励ましていただいた。Sさんのおばあちゃんは、朝と夜のあいさつのとき、娘に必ずハイタッチをしてくれた。それがCちゃん親子に連鎖し、娘もその姿を見て笑顔を見せてくれた。みなさん、携帯の充電をしながらテレビを見せてくださったり、娘のいらいらが溜まらないように「わがまま」を許してくださった。20代のお姉さんもいて、娘がお姉さんに「ゴムで髪を結びます」と要求すると、アニメキャラクターやセーラーームーンの髪型に自分の髪を結んでくださった。娘にとっては、大好きなキャラクターが目の前に現れたようで、とてもうれしそうだった。また、エリの中学時代の同級生が避難所でボランティアに参加していて、エリのことを気にかけてくれた。同級生の男子は廊下で会うたびに、「エリちゃん、おはよう。おやすみ」と声を掛けてくれた。女子は中学時代に一緒に歌っていた歌を振り付きで一緒に歌ってくれた。その光景はとても温かいものだった。

2年下のチイちゃんとは小学校時代からの仲良しだった。お互いに「エリちゃ〜ん」「チイちゃ〜ん」と呼び合う声が廊下に響く。そのたびに「静かに！」と親が叫ぶ。そんな光景を「心地よい」と言ってくれる人もいた。

●みなさんの優しさが支えてくれた

娘はおもてなしが好きだ。言葉は多くはしゃべれないが、「はいどうぞ」と一人一人にのど飴を手渡し、その人が口に入れるのをじっと見ている。誰もが嫌がることなく「エリちゃんありがとう。おいしいよ」と言って、すぐに口に入れてくれた。それを見て満足そうなエリ。世の中には食べたくない人だっているんだからと、これまで態度で示してきたのに、避難所のみなさんは笑顔で許してくれた。あったかかった。

小学3年生のハヤテ君。好奇心旺盛な男の子。ハヤテ君はエリの絵を「とても上手だ」と褒めて、エリのことを一目置いてくれて、自分の紙やペンを貸してくれた。はじめはエリのお絵かきの様子を隣でじっと見ながら話し掛けてくるので、エリは「はなれてえ〜」のサインを出していた。主人は「エリにあんまりくつつくと、パンチが飛ぶぞ〜」とジョークを飛ばした。ハヤテ君は驚いて少し離れた。そんなことないのにね。それでもエリに近寄るハヤテ君を、そのうちエリも受け入れるようになり、飴をあげたり、「ハヤテ君・ペンを貸してください」と言うようになり、ハヤテ君も「いいよ」と答える。そんなやりとりが変わっていった。

このような、みなさんの理解のうえの優しさが、私たち家族を、避難所での長い生活を、支えてくださった。



●学校で先生から予定を伝えてもらう

3週間が過ぎた。娘は4月のカレンダーを見ては、「3月〇日、離任式。4月〇日、始業式です。学校行きます。春休み終わりです」と連呼することが増えていった。見通しが立たない不安を表に出すようになっていた。ちょうど支援学校の担任の先生から連絡が入ったので、お願いして、娘と会ってもらい、娘の様子を見てもらい、先生からも春休みの期間、始業式の予定などを娘に伝えてもらうようにした。そうすれば娘も納得するかもしれないと思ったから。

娘を連れて支援学校へ出掛けた。支援学校もやはり避難所になっていた。学校の中を歩いて見学した大好きな作業を行う教室にも連れて行った。職員室にも顔を出した。そのあと、一緒にカレンダーを見ながら、先生から始業式の予定を伝えてもらった。娘は「はい」と返事をした。それから娘は学校のことを言わなくなった。娘なりに納得したのだらうと思う。

●「早く家に帰れるようにしないと」

この頃から、睡眠薬があまり効かなくなってきた。なかなか寝付けないようだ。違う薬を処方してもらおうかと考えていた頃、私が炊き出し班のお手伝いに行っている間に、「問題」が勃発した。娘が突然、主人の頭をぼこぼこ叩き、お兄ちゃんの足も何度も叩いた。そして、一緒にいたいところにも手を出した。教室にいた誰もが驚いたようだ。でも誰も娘の行動を何も言わなかった。いつもは大声で怒鳴る主人もさすがにこたえたらしく目が赤くなっていた。主人が「早く家に帰れるようにしないと。我慢の限界なんだろうな」と言った。私たちも毎日、家の片付けで疲労もピークだったけれど、それよりも娘の気持ちを、娘の日常を、取り戻してあげたかった。

次の日、医療班の医師に相談に行き、違う睡眠薬を処方してもらった。心のケアチームに相談もし、精神安定剤も処方してもらった。心のケアチームの精神科の先生や内科の看護師さんたちに話を聞いてもらうことで、私の心の安定を図ることもできた。

●洗濯を手伝ってもらったり、料理を作らせたり

娘本人は、薬を飲むことにも抵抗せず、毎日のスケジュールをホワイトボードに書き込んで、それを実行していた。家の片付けに行くと、娘に洗濯を手伝ってもらったり、そうめんやそばなど娘の好きな食物を料理させて食べさせたり、その料理を同じ部屋の人たちに持って帰って食べてもらったり、できるだけ震災前の娘の「日常」に近づける生活がおくれるように心掛けだ。家の片付けも、いろいろな人の手を借りながら少しずつ進めていった。こうして、少しずつ先が見えてくるようになると、娘も鼻歌を歌ったり、走ったり、元気が出るようになり、少しずつ明るくなっていった。

●自分から気持ちを切り替えた、エリ

娘は、ふだんからいろんなこだわりを持っていて、困ったなと思うことは多々あった。今回一番困ったのは、「お風呂」に入る時のこだわりだった。2か月の間で、娘がお風呂に入ったのはたったの2回。

自衛隊がシャワーをA中の校庭に設置してくれ、いつでも入れる状態だったけど、娘は自分のお気に入りの下着（水没してしまっても見つからない）に着替えると言い、それが見つかるまでお風呂に入らないと言う。毎日「青マークのピンクのパンツと、びろ〜と靴下（よれよれの意味）、グレーのカバーパンツを探しましょうね」と言いながら、泥だらけの衣類が入った袋とゴム手袋を手渡され探すことを要求されたのにはまいった。まあ毎日入らなくても死ぬことはないし、まあいいかと思ったりもした。

要求された下着は結局見つからなかったが、その袋をごみ収集車が瓦礫とともに回収していく様子をしっかりと目の前で見ていた娘は特に騒ぐこともなく、ゴミ回収車を見送ったあと、「買いましょう」と言った。「探しましょう」から「買いましょう」と言ったのには驚いた。あきらめて、自分から気持ちを切り替えたんだね。エリ、すごいぞ！

●主人も息子も頑張ってくれた

私たち家族は、結局、2か月以上A中で避難生活を送った。この間、学校の先生方をはじめ、娘に関わってくださったみなさんのご協力や優しさに対して、言葉で言い尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。それは思い出すだけでも、涙が出るほどです。同時に、主人も息子も本当に

頑張ってくれた。主人は娘の食べられるものを探し回ってくれ、娘の落ち着くグッズを求めて走り回ってくれた。家の片付けにも毎日出かけた。息子も、娘の面倒を見てくれた。娘のために、携帯の充電ができる場所を探して歩き回ってくれた。A中に避難している子どもたちの面倒を見たり、一緒に遊んだりしながら、心のケアのボランティアもしていた。美術室の部屋リーダーをしながら、家の片付けもしてくれた。2人とも本当にありがとう。

●地域の中で育ててきて良かった

今回被災して思ったことは「娘を地域の中で育ててきて良かった」ということです。地域の中で育ててきたからこそ、誰かしらご近所さんが娘や私ら家族のことを知ってくれていたのだと思う。そして地域の小中学校で過ごした9年間で、娘の集団生活で生き抜く力も育っていたのだと思う。それから娘自身が、自分で自分の時間を過ごす方法、自分を落ち着かせる手段を見つけていたことも大きかった。娘のこの「力」があったからこそ、2か月という長い避難生活を送りぬくことができたのだと思う。それは、今まで関わってくれた全ての方々のご協力があったからこそ育ててきたのだと思う。保育所・学校の先生方や子どもたち、地域の方たち、病院の先生方、発達指導の先生、SSTの会の人たち、私の友人たち一緒にマラソンを走ってくれた先生、みなさんに本当に感謝です。その気持ちを忘れず前に進んでいくこと、エリが親がいなくても生きていけるように育てていくことが恩返しだと思って、これからも頑張れたらと。

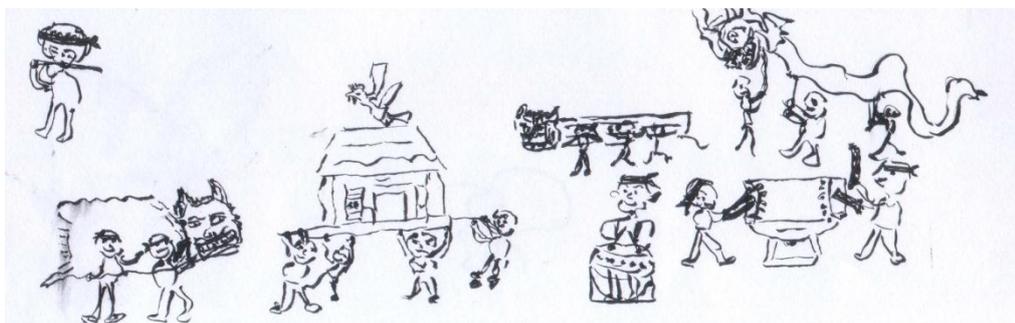
●娘の頑張り、みなさんの理解で

一方、私の反省は……やはり何の準備もしていなかったことです。震災グッズ、本人のお気に入り宝物グッズ、食料の買い置き、特に娘本人が食べられるものを買って置きしておくべきだった。本人の混乱を予測して準備したものも何もなかった。心から反省。

しかし、娘の「問題勃発」の時に、落ち着いて考えて対処できたことは良かった。娘の頑張る姿と、頑張るのが無理な時は周りのみなさんに助けてもらうという姿勢を崩さなかったことで、周りのみなさんの理解にもつながったのだと思う。これまで娘を育ててきた17年間の中で、いろんな失敗をくり返しながら、困難にぶつかっても逃げずに頑張って克服してきた。強い精神と前に進もうとする努力は続けてきたつもりだった。娘にも集団の中でできることは一緒にやらせてきた。集団のルールは守らせてきた。その結果、2か月以上の長い避難生活を送る力が、娘にも育ったのだと思う。

※本文は、高橋みかわ編著「大震災自閉っこ家族のサバイバル」(ぶどうしゃ)より転載しました。

(一部加筆、修正)



教師として母として

宮城県東松島市立大塩小学校 戸田祥子（小学部智之の母）

3月11日14時46分、2年生はパソコン室で6時間目の授業中でした。勤務校は夏にはオニヤンマが教室に迷い込み、冬になれば雪の朝は校庭にキツネの足跡がついているような山の上の学校です。私は、白閉症・情緒学級で、2年生と5年生の担任をしており、2年生の銀ちゃんとパソコンの授業に出ていました。その時、突然、どどどと壁、柱、ガラス窓などがうなりだし、校舎全体が揺れ出しました。それは不気味な物音でした。女の子は泣きだし、男の子が飛び出そうとするのを通常学級の担任と一緒に制止、机の下に潜り込ませているうちに、ぱぱぱとパソコンの電源が次々と切れました。

●何が起きてるのか分からないまま

津波・・・津波が来たことを私はどうやって知ったのでしょうか。一階の図書室に全身ずぶぬれの人たちが次々と避難してきたからでしょうか？

銀ちゃんのおばあさんがぬお時近くになって迎えに来ました。「今でも震えが止まらない。茶碗も全部割れて・・・」と、勤め先のうどん屋さんの様子を教えてくださいました。銀ちゃんのお母さんは職場から車で避難する途中、津波の増水で車が水没、車を捨てて胸まで水につかって逃げるところを、2階に逃げた見ず知らずの人が呼んでくれて、そこで1泊、翌日助けてくれた人の家族が迎えに来たので、また胸まで水につかって歩いて、その人のところに泊めてもらったそうです。携帯はつながらず状況がつかめない中、お母さんと連絡がとれない2日間、銀ちゃんは終始落ち着かない様子で心細い思いをしたことでしょう。

もう一人の5年生ひろ君は、5時すぎ、買い物に出ている助かったおじいさんが迎えに来ました。翌日見に行くと、ひろ君のおじいさんの家は海になっていたそうです。

●息子のもとへ

私の末の息子智之は石巻支援学校の小学部5年生です。学校は卒業式で、11時半の下校でした。いつものように共生園という施設に日中一時でお願いしていました。私が迎えに行くといつものように帰宅しようと思ったようでしたが、わが家のあたりは水が上がり近づけないということを聞き、駆け付けたお父さんと家族3人で施設に泊めていただきました。電気も水も止まり、夜、外のトイレに行くために、外に出て、1階に海水の入った自宅のこと、子どもたちのことに思いをはせ、空を見上げると、そこには眩しいほど美しい星空がありました。その頃、山の上や竹やぶの中で水につかりながら、2階の押し入れの中で一夜を過ごし、命拾いをした人がいたということは、もちろん何日も後で知ったことです。

家を離れてまず困ったのは、偏食の智之の食事でした。私たちは共生園に備蓄してあった缶づめのパンなどをごちそうになりましたが、智之は食べようとしません。ミニサイズのカップラーメンでしのぎました。共生園には二日泊めてもらい、石巻支援学校が避難所になっているという情報を聞き、移ることにしました。園長先生が、「食べられるものないと困るでしょ」とスナック菓子を持たせてくれました。ありがたかったです。

「帰ってくる？」が口癖

太一・15歳

いま No.64
子どもたちは

震災を生きる 9

宮城県石巻市の武内太一君(15)に新しい口癖ができた。誰かが出かけようとするとき、必ずこう言う。「帰ってくる？」「じっじは仕事に行きました」

太一君には知的障害がある。あの日、帰ってこない人がたくさんいた。祖父は仕事に出たまま、3日間連絡が取れなかった。祖父が無事に帰ってきたあとも、口癖はやまない。仕事なら必ず帰ってくる、と自分に言い聞かせるように。

4月下旬、自宅近くを母の車で走ると、ボタンを押すのを楽しみにしていた信号がなくなり、石巻港にかかる橋から見える家々が全部流されていた。

「信号ない」「つちなかつたよ」。そう言って顔をこぼらせた。余震のたび、彼は食パンを探す。津波のとき、食パンの入った袋を持って逃げ、逃げ込んだ小屋でパンを食べたのいまだ経験があるからだ。

一家は近くの小学校の音楽室で2週間、避難生活を送った。太一君は慣れない場所が苦手だ。母は車中生活も覚悟した。初日に「今日からここにお泊まり」と言っと、太一君は納得し



ネクタイがうれしい。がれきの残る家の前で跳びはねた一宮城県石巻市、岩波写す

たようだった。だが、音楽室の外に出ようとしな。トイレに行っても、走って戻る。熱が出て、のどが潰瘍になるほど腫れても、知らない医師を怖がって「痛くない」と言い張った。1週間経ったころから、水く

みを手伝い始めた。最初はおやつのパナナにつられて始めたけれど、自分から「水くみする？」と言うようになった。部屋ではラジオから流れるアイドルの歌に合わせて踊った。同室の子たちが笑顔で手をたたいた。

1カ月遅れて支援学校高等部1年生になった。中等部には制服がなかったから、ネクタイを楽しみにしていた。冬からずっと「ネクタイする」と言い続けた。制服が届いた日、ワイシャツを着るより先に、ジャージーの上からネクタイだけ着けた。家族に「かっこいいよ」とほめられると、すべ外して「もうおしまい」と袋にしまった。

口癖はもう一つ増えた。ネクタイかっこいい。こぢろはいつも必ず笑顔で。(岩波精)

感想はedu@asahi.com

共生園には、三週間たった今でも残っている人がいるようです。家も流され、ご両親も行方不明だと聞きました。そうした人も受け入れながら施設の再開をめざして準備をすすめておられます。日中一時支援にまではまだ手が回らないようですが、障害児者のために頑張っていると思います。

息子智之が利用していたもう一つの場所「子どもの広場」は9時から5時までの一時預かりのみの施設なので、多少水は入ったものの、3月24日から再開しました。食料等の生活必需品を買うにも、3時間も行列しなければならなかったのが助かりました。

●支援学校での避難生活

支援学校では、はじめ大部屋でした。プレイルームに10家族ぐらいがいました。昼間は小学部や校庭で遊び、夜だけ戻るようにしていたのですが、息子は3日目にパニック。支援学校の先生に、「お母さんもつらいでしょう」と声を掛けてもらい別室で2人で眠り込んでしまいました。翌日「ともちゃんの声は気にならないけど、人が大勢いるところは苦手」という中2の子の家族がやってきました。その日の夜もパニックを起こしましたが、だんだん落ち着いてきました。智之も、私たちと同様に、これからどうなっていくのか不安だったのだと思います。それからはこれからのことを説明するようになりました。

昼間は散歩に出掛けました。智之が少しでも食べられる物を確保したくて、スーパーの長蛇の列にも並んでみました。案の定、並ぶ意味が理解できなくて、パニックになってしまい挫折しました。翌日懲りずに再挑戦。私も必死でした。多少泣き叫んでも頑張りました。まわりの人の反応は様々で、振り返ったりする人もいましたが、「ズボン下がったよ」と直してくれた人もいました。人の温かい気配りです。日ごろから智之のことを隠していたつもりはないけれど、取り立てて人の中に出しても来なかった私にとっていい経験でした。だんだん並ぶ時間も短くなり、智之も見通しがもてておとなしく並べるようになりました。今まで食べなかった汁ものが大好きになるというおまけつきでした。

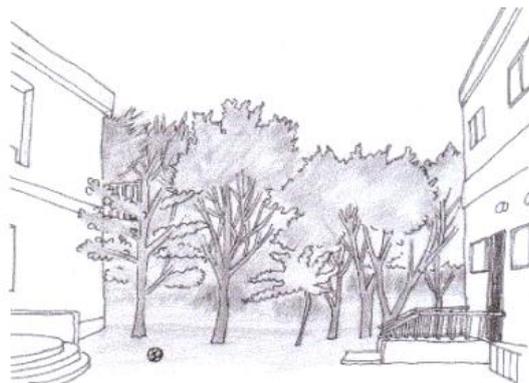
●私にできることそれは・・・

支援学校でも、災害に備えて備蓄をしておこうという

案が出され、23年度には予算化される予定だったそうです。発電機だけはちょうど3日前に来て間に合いました。食事は、近所の農家の寄付や給食室にあった食材、先生方の持ち寄りだったそうです。県内の支援学校の先生方がローテーションを組んで応援に来てくださいました。普通の体育館のようなところには智之はいられなかったと思うので、とてもありがたかったです。しかし、そんな場所でもいられず、車の中ですごしていた人もいました。自閉症の子どもたちでも、安心して避難できるためにはどうしたらいいのでしょうか。避難場所でも、食事の場所と寝る場所がちがうといいなあと思います。智之は場所で判断しているところがあるので。また、支援学校に寄宿舎のような場所があって、子どもたちが宿泊経験をしていれば、いざというときに安心だと思います。残念ながら、宮城県の支援学校には、視覚支援学校と聴覚支援学校、船岡支援学校、岩沼高等学園、小牛田高等学園以外は寄宿舎が併置されていません。

全国の友達が心配してくれました。同じような災害がまた起きたとき、障害のある子どもたちでも安定して暮らせる体制づくりのために私にできることはないか考えています。同時に、智之のことをもっと周囲に発信していきたいと思いました。我が家は奇跡的に家族みんな無事でした。けれど同級生や、おもちゃの図書館で一緒に活動してきた友達が亡くなってしまいました。私が生き残った意味を考えながら、生きていきたいと思います。

※本文は、「みんなのねがい」（全国障害者問題研究会）より転載しました。（一部、加筆修正）



Ⅲ 学校の再開に向けて

県内の学校の多くは県教育委員会の方針に基づき、4月21日学校再開を目指して準備を進めていましたが、本校は①バスルートの再構築と安全確認、②完全給食の提供、③医療的ケア体制の確立を学校再開の必要条件と押さえ、5月12日を学校再開と決めた。

震災により運行不能となった道路の復旧と自宅が全壊、半壊した児童生徒の居住地がある程度決まらないとスクールバスコースの再構築はできない。また、津波に対する万全の運行体制も整えなければならなかった。給食については、食材の納入業者の被災状況を確認して食材の納入先を確保することや地震の被害を受けた厨房の復旧も必要だった。新年度から直接雇用することになった医療的ケアの看護師5名全員が被災していることなどから、医療的ケアの必要な児童生徒の学習体制作りにも時間を要する事が予想された。

1 通学手段の確保

本校は児童生徒の通学に7台のスクールバスを運行している。コースは、鳴瀬、桃生、石巻、牡鹿、女川、雄勝、北上の7コースで、車いすの児童生徒の乗降の為にリフト付きのバスも数台ある。5つのコースが海岸部を始発とし、内陸部に位置する学校に向かう。その多くが今回の震災の津波で浸水した地域を路線としていた。バスは朝9時に学校に到着し、午後2時30分に学校を出発する。幸い震災当日は、小・中学部卒業式だったため11時30分に出発し、バスの運行は終了していたが、平日どおりの運行だったとするその被害の大きさは計り知れないものとなったように思われる。

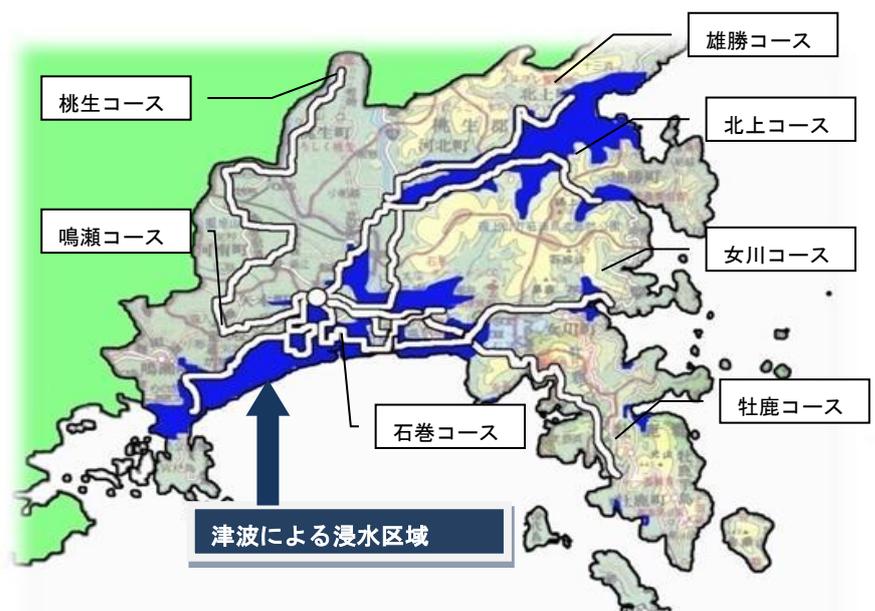
平成23年度のスクールバスの運行準備がほぼ整い、県への書類提出が済んだ後の震災であった。

4月に入りスクールバス路線再構築を行うことになり、プロジェクトチームを立ち上げ、4月20日の新時刻表完成を目標に動き始めた。

スクールバス路線再構築までの日程は「資料3」のとおりである。

NO	コース名	乗車数	運行時間 (片道)	運行距離 (片道)	備考
1	鳴瀬	17	1時間24分	40.3 km	リフト付
2	桃生	16	1時間40分	41.1 km	リフト付
3	石巻	14	1時間21分	18.2 km	
4	牡鹿	21	1時間35分	39.6 km	
5	女川	13	1時間2分	30.2 km	リフト付
6	雄勝	13	1時間32分	54.5 km	リフト付
7	北上	22	1時間35分	38.0 km	

資料1 各コースの状況（平成23年度運行計画から2月現在）



資料2 各コースの路線（平成22年度）と浸水区域

プロジェクトチームのメンバーは、平成22年度の担当教員、過去スクールバスの業務に携わったことのある教員と新年度の担当教員、計8名だった。二人一組になり、7コースのバス路線（鳴瀬・桃生・石巻・女川・雄勝・牡鹿・北上）を1～2コースずつ担当した。

プロジェクトチームは下記の業務を行った。

1) 平成23年度計画していたバス路線状況の確認（1回目の試走の実施）

試走の際は、平成23年度も本校のスクールバスを担当することになっていた豊石観光バスを使用した。試走に当たっては、

- ① どこまで運転可能な道路なのか。
- ② 設定予定だったバス停は可能か。
- ③ 現時点での道路の状況はどうか。（がれき・破損した車・ゴミ等が出されたことによってどの程度の道幅になっているか他）
- ④ 信号は作動しているか。

についてそれぞれ確認することにした。

試走の結果、石巻市街を走る石巻コースは津波の被害が甚大で、この地区の家庭は、家屋が全壊のところが多く、親戚や避難所などに移っての生活となっていた。多くは瓦礫の撤去が進まず、幹線道路の一部がやっと通行できる程度であったり、通行できても瓦礫に狭められた道路は車一台が通るのがやっとだったり、対向車とぎりぎりの状態ですれ違う状態であった。津波の被害を受けない内陸部であっても家屋の倒壊や道路の崩壊、山間部では崖崩れの恐れなど危険な箇所が数多く見られた。（資料4）

スクールバス路線再構築までの日程

日時	曜日	行事等	日程内容
4月 4日	月	主事会・職員室机移動	スケジュールの提案 生活本拠地の確認
5日	火		スケジュールの案が通れば豊石の佐藤さんと打ち合わせ
6日	水		道路状況確認のための試走①(鳴・桃・石・牡)
7日	木		道路状況確認のための試走①(女・雄・北)
8日	金		試走①のまとめ・新経路のための試走準備
9日	土		*
10日	日		*
11日	月		新経路のための試走②(鳴・桃・石・牡)
12日	火		新経路のための試走②(女・雄・北)
13日	水		新バス停・時刻表作成開始
14日	木		
15日	金		
16日	土		*
17日	日		*
18日	月		豊石の佐藤さんに新路線等を確認
19日	火		
20日	水		新時刻表の完成(予定)
21日	木	運営委員会	
22日	金	職員会議	
23日	土		*
24日	日		*
25日	月		スクールバス打ち合わせ
26日	火		
27日	水		
28日	木	運営委員会	
29日	金	みどりの日	*
30日	土		*
5月 1日	日		*
2日	月		
3日	火	憲法記念日	*
4日	水		*
5日	木	こどもの日	*
6日	金		
7日	土		*
8日	日		*

資料3 スクールバス路線再構築の為のスケジュール

スクールバス路線再構築のための道路状況の確認の結果（1回目の試走の結果）

鳴・桃・石・牡 H23・4月6日現在 女・雄・北 4月7日現在

コ ー ス	どこまで運転可能道路か	設置予定バス 停は可能か	道路の安全状況 信号は作動しているか	信号は作 動している か	その他・気付いたこと等
鳴 瀬	<ul style="list-style-type: none"> 全線通行できる。 野蒜駅の通りはがれきは撤去され、道路の通行は可。 	<ul style="list-style-type: none"> 岩淵クリーニング店以外は可。 	<ul style="list-style-type: none"> 南新町児童公園周辺の道路にゴミが沢山出されているが通行は可。 	<ul style="list-style-type: none"> 野蒜以外は可。 	<ul style="list-style-type: none"> 思ったよりも道路は走行可能であった。
桃 生	<ul style="list-style-type: none"> すべて運転可。 	<ul style="list-style-type: none"> 大曲以外は可。 今までのバス停場所は可能だが道路状況しだい。 	<ul style="list-style-type: none"> 寿昌院周辺が破損した車や流れてきた車、災害ゴミ等で相当に道幅が狭くぎりぎりの状態。 平河ヒューテック前バス停に行く途中数カ所陥没。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題なし 	<ul style="list-style-type: none"> 桃生町内古い家屋、ブロック塀の倒壊多数。特に豊里方面から中津山二小前300メートルぐらいがひどい。 矢本国道渋滞のため、大曲から赤井方面へ出て帰校
石 巻	<ul style="list-style-type: none"> 稲井駅に通じるガード下は船が上がり不可。 津田海運前までの経路の途中船が上がり通行不可。別ルートで走行するが陥没した道路に水がたまっており走行に危険性あり。 二チロ～市営南浜住宅～日本製紙出張所～まで通行可能だががれきで道路が狭くなっている。 グリーンハイツ前は更に道幅狭くなり不可。 大街道から入る横道は道幅狭くなり不可。 中部自動車から大曲に行く道路(ツグヨ工業前)は陥没通行止め。 	<ul style="list-style-type: none"> 稲井駅×，日本製紙前×，グリーンハイツ×，ムミ理容所×，大曲保育所×， 	<ul style="list-style-type: none"> 門脇南浜町は見るも無惨な状況。中心となる道路の走行は可。 矢本大曲45号線は道路陥没。脇のコンクリートの壁も崩れている部分有り。 	<ul style="list-style-type: none"> 中央町，門脇南浜×大街道の一部も× 	<ul style="list-style-type: none"> 情報として(バス停の変更) 狩野拓磨→狩野電気前三浦えり？(転居あるいは避難) 石川千尋→須江から徒歩通学に変更 阿部いずみ→蛇田江口邦洋→青葉東熱海ここな→小野駅裏村田歩夢→大街道西
牡 鹿	<ul style="list-style-type: none"> 始発の大原浜まで可。 	<ul style="list-style-type: none"> あいのや鹿妻店前× 県営1号アパート前×(大量のがれき) 鹿妻小前の通り，セブンイレブンあたりに設置可能か。 	<ul style="list-style-type: none"> 大原バス停～祝田→道路のひび割れ，崩壊がひどい。(いつ崩れ落ちるか分からない状態。通行止めになってもおかしくない。) 祝田～不動町→幹線道路は整備されているが，脇道は大量のがれきのため道幅が狭くなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校～中里イエローハットまで作動。以降× 	<ul style="list-style-type: none"> 市内中心部，国道108線，石巻バイパス，大橋の交通渋滞がひどく進まなかった。 半島方面の道路面の状況がよくなく安全走行のためかなりスピードを落としていた。大原～渡波が通常30分以内のところ45分要した。 運転手さんがかなり不安気。 半島の各集落が壊滅状態で助けが欲しい時どうなるか。

女川	<ul style="list-style-type: none"> ・沢田の苔浦バス停可。 ・1-ティリティー3 番館～理容ササキ前～食堂末広前×（がれきで車一台やっと通れる） ・R398渡波は車ぎりぎり対向できる状態。 ・食堂末広前から本日は日和大橋回り。 ・山～大街道は○ 	<ul style="list-style-type: none"> ・1-ティリティー3 番館～理容ササキ前～食堂末広前× 	<ul style="list-style-type: none"> ・女川は第1保育所より先は× ・R398 渡波方面も両側がれき等で対向するのはぎりぎり。 ・魚町の道路はR398はきれいだが、魚町とR398の間は一台通るのがやっと。周辺はつぶれた家屋、流れた家屋、がれき、ゴミの山。 	<ul style="list-style-type: none"> ・渡波は手信号あり。 	
雄勝	<ul style="list-style-type: none"> ・最終地点まで走行可。 	<ul style="list-style-type: none"> ・雄勝小、加納工務店×・高泉君のバス停から可。（入釜谷バス停） 	<ul style="list-style-type: none"> ・河北町県道30号線中央部の亀裂が目立つ。 ・大川中周辺県道の堤防破壊→仮の道路ができていて走行可。 ・道路が狭くなっているところは無いが脇には根がついた木、ゴミ、がれき等あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・釜谷トンネル内のライトが消えているため真っ暗。走行は可。 ・雄勝以外は作動。 	<ul style="list-style-type: none"> ・釜谷トンネルを抜けた後の雄勝町内は見ても無惨。何もなくながれきのみ。 ・阿部真優と加納勇樹の乗車場所再考
北上	<ul style="list-style-type: none"> ・始発のみ×。（スズキ土建前はがれき状態） 	<ul style="list-style-type: none"> ・始発を除く中原バス停以降は可。 	<ul style="list-style-type: none"> ・北上の土手に亀裂、でこぼこあり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中里方面×。 	<ul style="list-style-type: none"> ・乗車人数とのかかわりで始発を10～15分早めたほうがよい。

資料4 1回目の試走の結果

2) 新バス停設置再考

1回目の試走の結果を基に通行可能な道路を考え新バス経路とバス停の位置の設定を行った。5月の時点で①自宅②仮設住宅③避難所④親戚等どこから通学するのかを家庭訪問等で担任に確認してもらいながら作業を進めた。バス停に関しては、運行可能な経路が限られていることや乗車時間の短縮を図るために、できるだけ幹線道路まで出て来てもらう、距離が近いのであるならばできるだけ同じ所で乗車してもらうなどこれまで以上に乗車場所の集積を図るようにした。



瓦礫に挟まれたバス経路（鳴瀬コース）



更地になってしまったバス停（鳴瀬コース）

3) 新時刻表の設定（2回目の試走の実施）

この試走ではプロジェクトチームが分担して実際に距離と時間の測定を実施した。この結果を基にプロジェクトチームと豊石観光のチーフとの話し合いを重ね時刻と距離を計算し、新しい時刻を設定した。

4) 課題となったこと

スクールバス路線の再構築の際、以下のことが課題として出された。

(1) 乗車人数の偏り

高等部で自力通学を予定していた生徒が、公共の交通機関が利用できなくなり、スクールバスに乗車することになったり、居住地変更によりコースに乗車人数の偏りが生じた。

(2) なかなか決定しなかった居住地

5月の時点では誰一人として仮設住宅への入居が決まっていなかった。結局、最終的に時刻表がほぼ整ったのは2学期であった。

(3) かかりすぎる乗車時間

道路事情が悪いこと、道路の渋滞等で所要時間に問題が発生した。始発の時間が早くなるコースがでてきた。乗車時間が2時間のコースもあり、本来ならば9時到着の予定が大幅に遅れ、授業の開始時間にも支障がでた。



4月、各コースの試走を実施した際、バスの中から見た変わり果てた風景に言葉は出なかった。新年度のスクールバスが運行し7か月が経過した今、朝の9時ごろまでには全コースが到着し子どもたちの元気な姿が見ることができるようになった。授業にも全く影響が出なくなり通常の生活に戻ることができた。これからは雪の降る季節に入る。道路の修復が整っているわけではないので、例年以上に凍結等安全面に配慮していく必要があると考える。

2 給食の再開

震災後の給食再開までの取り組みについて

本校の給食は栄養士と5名の調理員による自校給食方式である。食数は児童生徒、職員合わせて240食で、刻み食1名、ペースト食9名、アレルギー食3名の特別食も対応している。小学部、中学部の児童生徒と職員は厨房に隣接した食堂で食べ、高等部生徒は各教室でクラスごとに食べている。米飯を主として地場産品を活用した季節感のある献立を工夫している。

今回の震災で食堂の冷蔵庫が倒れ、厨房増築部分の壁に亀裂が入り外部が見える箇所があった。厨房の床はわずかだが亀裂が入った。水道及び電気は止まったが、ガスはプロパンで異状はなかった。調理員1名の自宅が床上浸水したがほかは大きな被害はなく自宅待機し、勤務再開を待った。栄養士の自宅は津波の被害を受けたが、近くの親戚宅から通勤を続けた。

電気、水道は3月18日に電話は22日に復旧したため給食再開に向けての取り組みを始めた。まず、平成22年度の給食費精算と、平成23年度の見積書の提出依頼のため各業者に連絡を試みた。学校に給食物資等を納めていただいている業者のほとんどが震災の被害を受けていた。連絡がとれない業者も多く、店舗が壊滅状態になったりしているところもあった。給食物資の確保のため、営業している業者さん、営業していそうな業者さんへ連絡し、見積りに参加してもらえるか伺った。原発の問題やガソリン等燃料の問題、食品製造等に伴う様々な問題があったので、連絡可能な業者さんとは、常に連絡をとって食品の流通状態等の情報収集をした。

4月中旬、平成23年度の給食物資の見積書を提出してもらい、なんとか給食物資の契約を締結することができた。4月末、調達できる食材で簡易給食ではなく完全給食の献立を作成し食材発注した。5月の給食再開時点で魚屋さんへの連絡が取れず、他の業者さんも宮城・岩手の漁港が震災の被害を受けたので魚の納入は難しく、5月は魚メニューを献立に入れず、他のメニューで対応した。5月中旬、魚類取り扱い業者さんから仮加工場での作業の見通しがついたとの連絡がきたのでH23年度の見積書を提出してもらい、その後契約締結し、魚メニューは6月から実施した。

月	日	曜日	行事等	給食施設・設備	納入業者確認期間	見積・契約関係	給食物資	調理員勤務	
4	1	金		○給食施設・設備の点検	○各業者の被害状況			自宅待機	
	2	土		※故障・破損箇所の把握	今後の営業について確認				
	3	日			○3月請求書受け取り				
	4	月							
	5	火							
	6	水							
	7	木							
	8	金							
	9	土							
	10	日							
	11	月					○見積書提出依頼		
	12	火							
	13	水							
14	木								
15	金					○見積書提出締め切り			
16	土								
17	日								
18	月			○故障・破損箇所の修理・修繕		○給食物資契約締結			
19	火								
20	水								
21	木								
22	金								
23	土								
24	日								
25	月						○物資発注		
26	火							勤務	
27	水							勤務	
28	木								
29	金	昭和の日							
30	土								
5	1	日							
	2	月						勤務	
	3	火	憲法記念日						
	4	水	みどりの日						
	5	木	こどもの日						
	6	金		○施設・設備の最終チェック				勤務	
	7	土							
	8	日							
	9	月		○清掃等の新年度準備				勤務	
	10	火					○物資納入	勤務	
	11	水						勤務	
	12	木	始業式、入学式					勤務	
	13	金	○給食再開					勤務	

給食関係業者の被害状況 (は被害の大きかった業者)

業者名	所在地	納入食材	被害状況	今後の営業予定等
A 卸問屋 (有)	東松島市	野菜等	石巻青果市場内の会社は大きな被害はない。石巻門脇町の自宅兼店舗は津波の被害を受けた。	学校の給食再開時にすぐに納入できる状態。 (納品の際は福島原発の事故等で放射能汚染のない、安全な品物を納品すること)
B 商店	石巻市	野菜等	向陽町の店舗等は大きな被害を受けていない。	学校の給食再開時にすぐに納入できる状態
C 青果 (株)	東松島市	野菜等	ほとんど被害を受けていない。	学校の給食再開時にすぐに納入できる状態
(有) D	石巻市	食肉・卵等	会社は床下まで浸水。一時、店の水道、電気、ガスがストップ。	3月30日ライフラインが復旧し、営業再開ができる状態。震災で肉の産地も被害を受けており、品薄状態になることが予想される。
(有) E 商店	仙台市	食肉・卵等	店舗等は被害なし。	学校の給食再開時にすぐに納入できる状態。 ※養鶏用の飼料は石巻、釜石、茨城等海岸部で生産されているため、鶏肉や卵の供給不足から価格高騰が予想される。
(有) F	石巻市	食肉・卵等	電話が繋がらない。店舗は壊滅状態。	早くても営業再開まで数か月かかる。 ※4/7 自宅電話で被害状況確認
(有) O 商店	石巻市	魚等	電話が通じない。 ※被害状況等の確認ができないが、津波被害が大きい地域と思われる。会社そのものが流されたことも予想される。	今後の見通しが立たない。
(株) P	石巻市	魚等	電話が繋がらない。津波の被害を受けたものと思われる。	
M 海産物店	石巻市	海産物	震災で浸水等の被害がでた。	今すぐの営業再開は難しいが5月に入れば通常通り営業できる見込み。納入業者等と連絡を取り営業再開に向けて準備中。
(有) N	石巻市	海産物	電話が繋がらない。津波の被害を受けたものと思われる。	
G 商会 (株)	仙台市	一般物資	冷凍庫等が破損	学校の給食再開時にすぐに納入できる状態。 ※ガソリン等の問題が解決できれば配送可能
(有) H 商会	石巻市	一般物資	大きな被害はない	学校の給食再開時にすぐに納入できる状態。 ※ガソリン等の問題が解決できれば配送可能
I 食品 (株)	大崎市	一般物資	大きな被害はない	学校の給食再開時にすぐに納入できる状態。 ※ガソリン等の問題が解決できれば配送可能だが物流がまだ良くなく、現段階 (4/1 で) 安定した供給は難しい。
(株) L 商店	石巻市	味噌・醤油	電話が通じない。 ※被害状況等の確認ができないが、津波被害が大きい地域と思われる。	今後の見通しが立たない。
(株) J	石巻市	麺類	店舗、工場が水没。機械類、冷蔵庫等も水没。ライフラインが復旧しない。	機械類、冷蔵庫等が可動できるがどうか。現段階で再開のめどが立っていない。3/31 現在で電気復旧。水道も復旧したが水圧が低いために工場の清掃ができない。
(有) K 食品	石巻市	麺類	高台に店があり配管の損傷だけで津波などによる被害はなかった。	4月4日現在ですでに営業を再開している。
R 製菓	石巻市	学校給食用パン	工場、自宅、店舗一階分は浸水。機械は使えない。	5月になれば配送トラックの手配を進め配送可能。
S 米穀	石巻市	学校給食用米	津波被害で再開のめどが立っていない。	納品は R (仙台市) に委託。
Q ミルク	大崎市	牛乳	大きな被害がなかった。	紙パック等も流通してきているのでガソリンの問題が解決すればすぐにでも製造、配送できる。

資料2 給食関係者被害状況一覧

※この日は北海道からいただいたトウモロコシがデザート。



3 看護師の医療的ケア開始までの動き

給食の時にチューブで栄養を摂ったり、学習中に痰を機械で吸ったりすること等を医療的ケアと言う。医療的ケアは家族の方が自宅で行っているが学校では看護師が家族の方に代わって行っている。宮城県が定める学校で行う医療的ケアには、経管栄養、胃ろう管理、吸引、吸入、水分補給（経管による）、導尿、摘便（尿路変更等を含む）、注射（インスリン注射）、気管カニューレ管理、体温調整、呼吸管理（酸素ボンベ等管理含む）など様々なケアがある。平成9年に「要医療行為通学児童生徒学習支援事業」として始まったが「治療が目的ではなく生活援助を目的とした医療的な行為」という考えから医療的ケアと呼ばれるようになった経緯がある。当初は県が契約した訪問看護ステーションから看護師が派遣されていたが、最近は県が看護師を直接雇用するようになってきた。

本校では今年度小学部1名、中学部2名、高等部2名、計5名が医療的ケアの対象児童生徒であった。看護師は直接雇用とすることになり、常勤チーフ1名、交代制スタッフ4名の5名が4月1日から勤務する予定であった。

しかし、今回の東日本大震災で医療的ケアを受けていた高等部の生徒1名がベッドに寝たまま津波の犠牲になってしまった。また、直接雇用となっていた5名の看護師全員が被災し音信が途絶えるという状態にあった。医療的ケア体制の確立は学校再開の必要条件であり、その安否が気遣われた。

ようやく看護師のチーフと連絡がとれたのは3月下旬になってからだった。自宅流出や床上浸水、自家用車も流され、避難所や実家に避難していて、身動きがとれない状態だったようである。「5月12日始業式があり学校が再開する。それまで出勤しなくてよいが4月下旬～5月の連休明けの間に、始業の準備に出勤してほしい。」と伝え、合わせて高等部生徒1名が津波の犠牲になってしまったことなど医療的ケアの児童生徒の安否も伝えた。また、他の看護師にもその旨を連絡するようお願いした。

看護師の被災の状況

看護師A

息子の中学の卒業式だった。午前中卒業式を行い、そのまま隣接する松島簡保の宿にて卒業を祝う会を行っていた。そろそろ終了というところで、大きく長い地震に見舞われた。皆、茫然としている所に、簡保の宿の支配人が来て、大津波警報が発令されたので、二階に避難するように指示があった。家が近所の人や子どもが一人にいるので、家に帰った人もいた。後でその人は、津波にのまれ亡くなったと聞いた。今度は10メートルの津波が来るかもとの情報で4階に上がり、余震が来るたびに自分たちはどうなるのだろうと、だんだん不安に思えて来た。約一時間後に誰かが“水、水だ”と大きな声を出した。海側に面した部屋にいた人だった。あっという間に建物の周りには“海”になっていた。自分たちの車がおもちゃのように流されて行く様子を茫然と見ていた。近所に家のある人達は、家族の安否が心配で泣き叫んでいた。その後、もっと高く第二、第三波が来るかもしれないとのことで、屋上へ皆で移動。冷たい雪が降り始め、水も全く引く様子もなく、私たちは“死”を覚悟した。あまりの寒さで建物の中に皆戻り”かんぼの宿”で一泊した。次の日水が引いたので、皆で瓦礫の間をくぐりながら、野蒜小学校へ歩いて行くことに決めた。昨日卒業式をした中



学校を見ると、津波が二階まで襲って来ていて大変な被害で、一緒に歩いてきた校長先生は、泣いていた。周りは戦争映画でも見ているような感じだった。途中自衛隊の方々と会って、歩くのを手伝ってもらい、とても心強かった。野蒜小学校では避難した人達であふれていたのので、市バスで小野市民センターまで行かされ、一週間過ごし、自宅のある宮戸は橋が流され渡れないということで、ガソリン不足の中、岩手の実家から迎えにきてもらい二週間滞在した。宮戸に橋ができたということで、避難所の宮戸小学校へ、その後、地区の避難所の宮戸西部漁港の倉庫に移り、仕事開始まで過ごした。

看護師B

〈3月11日〉雄勝付近の水浜の友人宅に居た。地震直後、家の中のものが倒れ散乱したので、家の外に友人の子どもたちを抱えて逃げた。津波の危険があったので、皆で車で高台まで行き、その後すぐに津波の第一波がきた。津波は何度も繰り返し海岸沿いの小さな集落はすべて波にのまれてしまった。

〈3月11日・12日〉高台で2日間、友人の車で過ごした。雪が降る寒さの中、水も暖もとれず、子どもたちの少しのおやつを皆で分け合って空腹をしのいだ。2日目の午後に部落の人たちがわずかな米を持ち寄り炊きだしを行い、おにぎりを1個ずつ配ってもらった。前後の道路は陥没して寸断され移動することもできなかった。

〈3月13日〉家族の安否が心配で、3日目の朝、希望者3名で石巻まで歩いて帰ることにした。必死の思いで避難所になっている渡波小学校に到着。掲示板にて、私の祖母と子ども3人の無事を確認。前日に松島の妹宅へ移動したことを知った。同日20時頃仕事で海上にいた夫とも再会ができ、避難所を洞源寺へ移した。

〈3月17日〉松島の妹夫婦が避難所を探し当て、私自身も松島の妹宅に移動し、子どもたちと再開できた。

以後、記憶は定かではないが、電気、水道も復旧せず食料も乏しく物資も来ない状況で何日か過ごした。車も流されたため、何とか車を手配し3月末ごろ支援学校へ自分の安否報告と学校の状況を確認するため来校。学校も避難所となっており、再開のめどが立っていなかった。学校再開まで待機との状態でいいと指示あり、妹宅にて過ごした。

看護師C

3月11日、長女の中学校の卒業式のため、仕事は休みだった。卒業式が終わり次女の幼稚園の迎えに行った後で自宅で被災した。幸いにも、子どもたちは全員自宅にいた。避難しようとした時には津波が来ており、避難できず自宅2階にいた。その後も自宅で生活し、4月末より学校再開に向けての準備作業を始めた。

看護師D

当日仕事（支援学校卒業式）で、2時頃帰宅。自宅で地震が起こり、隣の父と相談し、3人の子どもの迎えにすぐに向かう。私は車で3分ほどの小学校へ。父は15分かかる海岸近くの保育所へ。私は2人の子どもの迎え、学校近くの一人暮らしの従妹の安否確認へ。余震が続き、家の中は危険な為、従妹を車に乗せ、大津波警報の広報が聞こえたため、山へ向ったが、がけ崩れでUターンした。途中、自宅へ戻る父の車とすれ違い後を追った。自宅で父と末っ子と合流。津波が来るので、

小学校近くの従妹の家（すぐ近くに山があるので、逃げやすいと）へ。余震が強かったため、路上で待機中、「早くこっちへ逃げろ～すぐそこまで津波が来ている」と手招きされた車の後ろについていき、近くの山の牧場へ逃げる。夕方津波が引いたかと思ひ従妹の家へ食糧を取りに戻るが道路が浸水しており、戻れず、再度牧場へ。日が暮れるころ、通りかかった議員さんに地区外の集会場へ避難するように声を掛けてもらい、そこで、2晩過ごす。

翌日、自宅に戻ろうとするが浸水しているため、戻れず。地区の避難所に仙台より旦那が戻っているのではと、探しまわった。午後に従妹の家の前で再会できた。また同じ集会場にお邪魔し、2晩目を過ごした。

3日目、従妹の自宅前の水が引き、床下で済んだため、従妹の家へ避難する。自宅には戻れず。震災当日石巻文化センターにいた母が石巻から徒歩で従妹宅へ戻った。そこから2か月従妹の家でお世話になった。ライフライン復旧まで、約1か月毎日水汲みや、食糧の確保、日々の余震、津波警報のたび山へ逃げる、等々不安な毎日だった。自宅被災者の支援はほとんどなく、日々家族、親戚、友人14人で従妹の家で協力し合い生活した。車のガソリンも中々確保できず、移動手段は自転車だった。三月末携帯電話の充電を支所でしてもらい、電波の入るところまで自転車で移動し、職場へ連絡した。所長より、支援学校の電話番号を聞き、支援学校へ連絡した。教頭先生不在とのことでS養護教諭へ状況報告。仕事については、連絡を待つようにとのことだった。3月31日になっても連絡ないため、同僚へ連絡した。学校が避難所になっているため、連絡があるまで自宅待機と確認した。チーフ看護師より、4月25日出勤と連絡受け今に至る。

看護師E

3月11日、職場から帰宅し、義理父宅へ到着直後に被災する。地震直後、義理父は長女の通う小学校へ自家用車で迎えに出かける。義理母は、このまま家で待機することを話し、長男、次男とともに自宅へ車で帰宅する。帰宅後すぐに夫が帰宅。4人で義理父と長女を待ち、避難の準備をしていると、津波がきた。走って避難すると通りがかりの車に乗せてもらうことができ、2階建ての石巻浄化槽センターに避難した。翌日、昼頃青葉中学校に浄化槽センターに避難していた人達のほとんどが避難した。夫が小学校へ長女を迎えに行き、夕方に青葉中学校で合流する。3月いっぱい青葉中学校で、4月中は岩手の実家で生活する。5月連休明けに石巻に戻り、知り合いの家で生活することになる。5月から長男、長女は小学校へ通学を開始する。義理母は、震災5日後に自宅より救出されたが不安が強くパニック状態が続き入院療養中。義理父は、小学校に向かう途中で津波に遭い死亡した。子どもたちは、義理父母に保育してもらっていた為、6月次男幼稚園入園預かり、保育可能になり仕事を開始することとなる。



4月26日に岩手の実家に避難している看護師E以外の4名の看護師が何とか都合をつけて出勤し、新年度の体制を確認する第一回の医療的ケア校内検討委員会を開催することができた。

4名の看護師は5月9日から準備を行い12日の始業式、入学式を迎え医療的ケアを再開した。6月10日から看護師Eも復帰し、看護師5名の通常の勤務体制が整った。

現在4名の児童生徒が医療的ケアを受けながら楽しく学校生活を送っている。

VI 学校の再開と全国からの励まし

1 心身の変調

新年度になり、家庭訪問を2回にわたって実施した。まず、4月12日から15日まで旧学級担任を中心に「始業式、入学式（5月12日の学校再開）の案内」「転出／転入職員のお知らせ」を届けながら一回目の家庭訪問を実施した。震災時に安否確認のために訪問して以来のことで、すでに一か月が経っており、自宅の被害状況や生活の様子・健康状況を把握し、学校が家庭に対して行う支援を具体的に検討する必要があった。

4月26日からは遊具や教材を持って二回目の家庭訪問を実施した。一回目の家庭訪問の結果を受け、地震による生活の変化からくる動揺や不安感に寄り添い、被災状況や精神的なダメージに応じた子どもと家族の心理的なケアを行うことを主な目的とした。「スクールバスの時刻表」を届け、学校が始まることへの期待感も持たせたいと考えた。

今回の地震で小学部1年1名、高等部2年2名、高等部3年1名の計4名が津波の犠牲になった。また、本校児童生徒の約3分の1の家庭が地震や津波で全壊又は半壊し、避難所等自宅を離れて生活している児童生徒も多くあった。（資料1）担任からの報告によると、地震や津波そのものへの恐怖心や、生活の変化によるストレス、友達を失ったことによる不安定感など様々な心身の変調が見られた。

自宅の被害状況が大きく、自宅を離れて生活している児童生徒の状況 平成23年6月23日現在

	在籍	親戚の家等	アパート及び借家	仮設	施設	避難所	転居	計（％）	仮設申し込み中
小学部	50	8	2	1	1	1	0	13（26％）	2
中学部	35	2	2	1	0	2	0	7（20％）	6
高等部	62	3	3	1	0	2	3	12（19％）	4
計	147	13	7	3	1	5	3	32（22％）	12

資料1 児童生徒の居住地の変更状況

震災後、体や気持ちの変化が見られる子どもたち

平成23年6月27日現在

No.	学年	震災後の変化や気を付けて観察したいこと
1	小学部	母親と姉を津波で亡くし、家もなくなり、父親とアパートで暮らしている。
2	小学部	昨年度は何とか大プールに入ったが、今年はビニールプールに足を入れただけで大小プールには入れない。
3	小学部	主たる養育者である祖母をたたくことが一時期見られたが、学校再開後落ち着き、今はたたくことが見られない。
4	中学部	学校の大プールに入ることができない。震災の日、家で飼っていた犬やその他津波に流された状況を見ている。入れない理由を母から質問すると「死ぬ」と答えた。津波を見て水に対する恐怖心が出たと考えられる。
5	中学部	避難所生活が続いている。自分の髪の毛を抜いて頭のとっぺんが薄くなったり、排せつでオムツが必要になってしまった。
6	中学部	震災後より食欲がなかったり食べても吐く状況が続き体重が10kg減った。病院を受診したが心理的なものだと診断を受けた。最近は落ち着いている。
7	中学部	避難所生活が続いている。いらいらすることが多くなり、自傷・他傷行為が時々見られる。震災にかかわる話に対しては敏感になっている。

8	中学部	震災後車中生活→本校での避難所生活→アパートでの生活を送っている。こだわりが以前よりも増し、小学部時代のひもへのこだわりが復活し、それが心のよりどころとなっている。
9	中学部	自宅が被災し母の実家へ避難、その後自宅近くのテントへ移り、テント閉鎖のため再び母の実家へ、父と兄弟は祖母の仮設で生活している。本人の表情が昨年より暗い。このような家庭の状況が影響していると思われる。
10	高等部	地震があると夜も目が覚め眠れなくなる。
11	高等部	地震があると泣き出してしまう。
12	高等部	地震があると怖がっている。思い出して泣きそうになる。
13	高等部	床上浸水し自宅の状態は良くない。津波についての発言を繰り返している。
14	高等部	津波の話に強く反応。「志津川の方がもっとひどかった。」と言う。
15	高等部	こだわり行動が増えている。活動場面で不安な表情を見せることもある。
16	高等部	「津波が怖かった」と話し掛けてくる。
17	高等部	不安定な感じがする。友人が亡くなってつらさを抑えているようだ。
18	高等部	よく「津波こわいね」と声を掛けてくる。
19	高等部	余震や津波のことに敏感になっている。家庭でも困ることがある。(動かなくなる)
20	高等部	兄・友人を亡くして不安定。学校でも家でも頑張り過ぎているためストレス処理がうまくできない。
21	高等部	友人を亡くし、時々つぶやく。テンション高め。
22	高等部	友人を亡くしたことの影響が心配される。
23	高等部	友人を亡くしたことの影響が心配される。一時、気持ちが沈んだ様子だったが今(6月中旬)は元気。
24	高等部	地震や津波に対する恐怖感がある様子。
25	高等部	母親が3/11以降家に戻っていない。(無事で知人の家にいる) やや退行現象が見られる。(幼児用ミルクをマグマグで飲んだり、ひらひらの服を着る等)
26	高等部	避難所生活が長かったため(現在は自宅)不安定になり(他者への攻撃や夜眠れないなどの)巡回医より強めの精神安定剤を処方される。

資料2 震災による児童生徒の心身の変調

これらの変調は一時的には震災によると思われるが、二次的なものとして子どもたちは「学校が始まらない」、「家庭から外に出ることができない」ためのストレスであるとも思われた。そんなとき兵庫県から石巻の支援に来ていた臨床心理士チーム「ひょうご Heart」(代表：阿部昇先生)の皆さんが学校を会場に『子どもの広場』を開いてくださった。歌ったり踊ったり、トランポリンをしたりサッカーをしたり、ボウリングやゲーム、お絵かき、クッキー作り…好きなコーナーに行き活動した。学校の始まりを待ちわびる子どもたちは52日ぶりの学校を元気な声と笑顔で満たした。学校再開はこの10日後の5月12日となる。

震災による子どもたちの心身の変調は学校再開と共にその多くが解消された。



子どもの広場 (5/2)

2 全国からの励まし

学校が再開して全国の皆さんから、子どもたちの笑顔を作るたくさんの励ましをいただきました。



自衛隊音楽隊訪問演奏会

学校再開から1週間目の5月19日（木）に「自衛隊音楽隊訪問演奏会」がありました。すてきな音楽をプレゼントしてくださったのは山形県東根市に駐屯する陸上自衛隊第6音楽隊のみなさん。総勢35名の本格的な吹奏楽団がくり出す楽しくすてきな音楽の数々に、いつの間にかうきうき気分になりました。

演奏していただいたのは

1. ドラゴンクエストの音楽序曲「荒野に行く」
2. アンパンマンのテーマ
3. 夢をかなえて～ドラえもん～
4. 森の音楽隊(楽器紹介)
5. ありがとう～いきものがかり～
6. 勝手にシンドバット
7. とんりのトトロより～さんぽ～
8. 歌えバンバン



そしてアンコールはスマップの「世界に一つだけの花」

みんなで一緒に歌ったり、演奏に合わせて踊ったりして、とても楽しいひとときを過ごすことができました。音楽隊のみなさん、ありがとうございました。



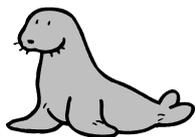
河野康弘さんのワッハッハコンサート

7月15日（金）にジャズピアニストの河野康弘さんをお招きし、ジャズコンサートを行いました。体育館フロア中央にセットされたピアノで最初に演奏されたのは映画「サウンド・オブ・ミュージック」より「私のお気に入り」。指だけでなくげんこつや腕も使う自由奔放な演奏スタイルにみんなびっくり。童謡「チューリップ」や「かえるの歌」「大きな古時計」はジャズのリズムで一緒に歌いました。高等部の生徒の突然のリクエストにこたえてのピアノの名曲「エリーゼのために」や「ショパンのノクターン」もジャズのリズムでちょっぴり大人の気分。

お楽しみは河野さんとのジャズセッションのコーナー「みんな一緒に～ワッハッハ」。会場はワッハッハ、ワッハッハの掛け声と手拍子。ピアノの周りには長い列を作って順番を待ち、河野さんと一緒に自分流ジャズピアノ演奏を楽しみました。お囃子のように引き続けられるジャズのリズムに共鳴し踊ったり跳び跳ねたりする子どもたちもたくさんいて会場は笑顔と熱気に包まれました。



ワッハッハのリズムで
ジャズを満喫



セラピーロボット「パロちゃん」来校

「世界一のセラピー用ロボット」として海外メディアも注目しているアザラシ型ロボット「パロ」ちゃんが石巻支援学校にやってきました。

「パロ」ちゃんはスウェーデン、イタリアなど世界各国の施設で使用されており、そのセラピー効果が注目を浴びています。今回「パロ」ちゃんの“産みの親”である産業技術総合研究所の柴田崇徳主任研究員さんが、本校の子どもたちの心のケアに役立てばと届けてくださいました。

「パロ」ちゃんは、優しく接すると素直な子になり、乱暴に扱うとひねくれた子になってしまうそうです。石巻支援学校の「パロ」ちゃんはきっと心優しい子に育ってくれることでしょう。



パロちゃんこんにちは！

御対面。「パロ」ちゃん見つめ合う中学部3年Mさん。(自立活動の指導)



「ギロックフレンズイン東京」コンサート

10月14日(金)の中学部の音楽の時間に「ギロックフレンズイン東京」という声楽家グループの皆さんによるミニコンサートがありました。美しい歌声で繰り広げられるコーラスや手遊び歌、パネルシアター、エプロンシアターなどに子どもたちはすっかり引き込まれていました。

2011年10月14日(金) 午後1:00
石巻支援学校中学部ミニコンサート

おと
♪とあそぼう

- ♪回転木馬
- ♪月曜日には何食べる？(絵本とうた)
- ♪いっぽんでもニンジン
- ♪一円玉の旅がらす
- ♪カレーライスのうた(パネルシアター)
- ♪芋の煮たの(手遊びうた)
- ♪とんでったまわら帽子(エプロンシアター)
- ♪世界にひとつだけの花
- ♪〜絵本をききましょう〜
- ♪だあしてひっこめて こんにちは(体を動かして)
- ♪おでんの唄
- ♪こぶためきつねこ(4人形)
- ♪ワニの家族 (手遊びうた)
- ♪にんじんさん・だいこんさん・ごぼうさん
(パネルシアター)
- ♪アンパンマン音頭 '89 (太鼓といっしょに)
- ♪だんご3兄弟 (太鼓といっしょに)

ギロック・フレンズ in 東京
うさだ ゆみ・うち の すみえ・ささき ろざり
とねあき のS.C.・みやざき まさみ・や の かずあき



中学部音楽 ウキウキ!! 楽しい歌&お話。





全国から本・絵本・大型絵本

子どもたちのために全国から送られた絵本でミニ図書室ができました。床には一面アルファベット模様のかわいらしいマットが敷かれました。本棚の上の壁には笑顔いっぱい壁紙が西側の壁にはお母さん方手作りの木の葉で埋め尽くされた大きな木が出現。木のまわりには小鳥、リス、トトロ、猫バス等がメルヘンの世界を作っています。木の葉の一枚一枚に子どもたちの顔写真が張られ「みんなの木」になりました。お父さん方もペンキ塗りや、高い所での作業で大活躍でした。

現在も、たくさんの方々から本が寄贈されています。また、保護者の方々の手で憩いの場としてどんどん変身しています。

明るい図書室できたよ

石巻支援学校 保護者が手作り

県石巻支援学校（桜田博校長、児童生徒147人）に、保護者が手作りの図書室が完成し、子どもたちを喜ばせている。蔵書3000冊を目標にしており、絵本などの寄贈を広く呼び掛けている。

全国から絵本

震災で多くの児童生徒の自宅が被災するなどして気持ち落ち込み気味だったことから、児童生徒、保護者が自由に集い、心を癒やす場として図書室を作ることを決めた。

図書室は昇降口正面の1教室を活用し、明るい雰囲気の間をつくった。室内には全国から届いた絵本約1000冊が並び、壁に張った紙製の大木の木の葉の部分には全校児童生徒の顔写真を張って紹介している。新入生が入るたびに葉が増えていくという。

60センチ四方の大きな絵本もあり、読み聞かせも行われている。床にはアルファベ

教室活用 紙の木の葉に児童生徒の顔写真

憩いの場として好評の保護者手作りの図書室

石巻支援学校



ツトのクッションマットが敷いてあり、座り心地がよいく好評だ。

PTA会長の松川浩子さんは「会員が協力的で活動はより活発化している。保護者と学校の絆も強くなっている。これからも震災に負けず前進していきたい」と話している。

絵本などの寄贈は同校（94）0202へ。



100本のバラの花

保護者の紹介で山形県でバラの花の栽培をしている方から、バラの苗、100本をいただきました。苗の植え方、選定の仕方は高等部園芸班の生徒が丁寧にご指導頂きました。早速、夏休みを返上して高等部校舎とプレハブの間の土地を耕し植え付けました。園芸班特性のEM肥料も効いてきれいな赤い花を咲かせています。





「吉川よしひろチェロコンサート♪」

10月4日の夜、PTA主催のチェロコンサートがありました。演奏は鶴岡市出身の国際的なチェリスト吉川よしひろさん。本校に二度にわたって義援金を送ってくださった鶴岡養護学校の前PTA会長さんが吉川さんのお友達ということでこのコンサートが実現しました。「星に願いを」「上を向いて歩こう」「茶摘み」「パツフェルベルのカノン」「カノン」「見上げてごらん夜の星を」など・・・澄み切ったチェロの音色は客席の一人一人の心を癒し、勇気を与えてくださいました。



復興支援 花のカプロジェクト in 石巻

10月29日に石巻支援学校の同窓会と花のカプロジェクト実行委員会が校庭の花壇に球根や花の苗を植えてくださいました。花のカプロジェクト実行委員会の「大震災に負けないで復興を目指している人々の心にゆとりとやすらぎを、そして、元気で幸福になれるように手助けをしたい。」「子どもたちに未来に向かって夢と希望を持ってもらうために花を植えましょう!」という願いと、呼び掛けに石巻支援学校の同窓会が賛同して実現しました。本校の卒業生もたくさん参加し、学習発表会と花植えを楽しみました。春にはチューリップやクロッカス、パンジーがきれいに咲くことでしょう。楽しみです。





みやぎ手をつなぐ冬祭り

12月11日（日），宮城県手をつなぐ育成会の主催による「みやぎ手をつなぐ冬祭り」が石巻支援学校の体育館で開催されました。石巻市に住む障害児・者とその家族、近隣の方々が対象で本校の児童生徒も多数参加しました。午前中は遊具を使った遊びコーナーで思いっきり遊び，午後は知的障害者バンド「サルサガムテープ」のみなさんと一緒に全身で音楽を楽しみました。アロマテラピーやフットバスコーナーなどの癒しのコーナーや県内の福祉施設による模擬店などもあり，お祭り気分を満喫することができました。



ゴスペルクリスマスコンサート

12月12日（月）音楽活動を行っている皆さんが東京から駆け付けクリスマスソングをプレゼントしてくださいました。きよしこの夜，赤鼻のトナカイ，サンタが町にやってきたなどのおなじみのクリスマスソングと一緒に歌ったり，マルマルモリモリと一緒に踊ったりしながら楽しいひとときを過ごしました。



国内外からの励ましのメッセージ





弘前の支援学校からいただいたメッセージ入りのリンゴでいただいたもみの木を飾り、クリスマスツリーを作りました。



V 新たな備え

1 津波への備え（マニュアルの見直し）

今回の大震災では津波による被害が甚大であり、今までの地震による危機管理マニュアルが機能しなかった。地震発生後自宅に確認しに帰る途中で津波に遭い車を流されるケースもあり、マニュアルに津波を想定したケースを組み入れて作り変えた。また、今回の大震災では携帯電話や E メール配信、災害ダイヤルも機能せず、児童生徒・教職員の安否確認に多くの時間が掛かった。そこで、通信機器がまったく機能しないという設定で、教職員が居住地近辺の児童生徒を確認する「居住地確認名簿」を新たに作り、担当教職員が夏休み中に担当児童生徒の居住地を確認した。さらにあらゆる場面を想定した災害で、電話・携帯・Eメール・災害ダイヤルでの連絡が取れない場合に対応した危機管理マニュアルを各家庭へも配布した。

以上のように、今までの危機管理マニュアルから、津波によるケースを取り入れて、危機管理マニュアルを作成し、職員全員に配布した。また、緊急の持ち出し袋にもマニュアルを入れて、即時の対応ができるようにした。見直しのポイントは以下の通りである。

①保護者への緊急時の対応プリント

②非常災害時の家庭への連絡先一覧(第1～第3まで)と緊急時の避難場所の確認

③非常災害時の学校への連絡先一覧(第1～第4まで)

④非常災害時の安否確認チェック表(人的被害・物的被害)

⑤通信機器が不通の場合の安否確認地区割り担当

⑥津波想定スクールバス会社対応マニュアル

⑦津波想定スクールバス時刻と避難場所一覧

⑧災害時の医療的ケア児童生徒の持ち出し物品

※津波により電気が使用できなくなった場合を想定し、3台の発電機を整備し、吸引器が使用できるようにした。また、ガソリンがなくなった場合は、足踏みや手動での吸引ができるものを用意した。

以上のように、マニュアルを変更し6月に避難訓練を実施したが、反省でまだまだ不備なところ等が出てきたので、8月に第2回目の避難訓練を実施した。第1回目の6月の避難訓練よりも改善され、より実践的な訓練となった。

※宿泊避難が必要になった場合の対応

【備蓄品】

《食料》生徒150名+職員100名+地域住民50名=300名

300名×6食(1日2食×3日分)=1800食を準備

※クラッカー、氷砂糖、アルファ米等

《水》2ℓのペットボトルを300本(一人2ℓのペットボトルで3日間)

※5年間保存可の水

《医療的ケア児童生徒用》医療食3日分、薬3日分

※吸引器については ⑧災害時の医療的ケア生徒の持ち出し物品として準備

【危機管理マニュアル】

1) 学校生活時

(1) 基本的対応

地震発生

- 的確な指示（頭部の保護、机の下などの避難）
一時的な安全確保
- 火災などの二次災害の防止：火気の始末
周囲の安全確認
- 負傷者の確認

児童生徒の安全確保

(避難誘導班)
(担任)

校舎内外避難の決定と指示

(本部)
(担任)

- 避難経路の安全確認
- 全校避難指示
- 人員確認

校舎外避難 運動場

(避難誘導班)
(救護・搬出班)
(担任)

- 的確な指示（頭部の保護、あわてない等）
- 教職員の連携（誘導、負傷者搬送など）
- 児童生徒等の名簿携帯

避難後の安全確保

(避難誘導班)
(本部・救護班)
(担任・検索班)

- 人員の確認と安否確認
(担任→学部主事→教務主任→教頭)
- 負傷者の確認と応急処置関係機関への連絡
- 児童生徒等の不安の対処

災害対策本部の設置

- 教職員各自の役割確認と校長の業務指示

校舎外避難場所での対応（避難誘導班）

- 児童生徒の不安に対する対処，安全確保（少人数で児童生徒を見渡せるように児童生徒のそばにいて，勝手な行動をとらないように指示）

被害状況の把握（消火・施設点検班）

- 消火及び施設点検
- 担当者全員：消火
- 施設の確認（小学部→宮里・工藤，第一校舎→岩崎・石井， 高等部→菅原・村田・村上
体育館・校舎外壁→鈴木・黒須）
- 立入禁止措置などの危機回避対応

災害情報の収集（本部）

- マスコミ：地震の規模，余震の可能性と規模，津波などの二次災害の危険性等の情報収集
地域：被害状況の把握，関係機関との連絡

↓
※津波が想定される場合には校舎内に避難場所を変更を検討

- ・小中学部→第1校舎2階視聴覚室
- ・高等部→第3校舎2階作業室

教育委員会への報告（事務次長）

- 被害の状況把握と第1報告
- 被害状況の把握と報告
- 学校内外の指示事項の確認
- 情報収集，状況による臨時休校措置の検討

外部との対応（昆野教頭・事務室長）

- マスコミ，親類等外部への対応（対応窓口の一本化）
- 近隣学校間とのネットワークの確立

校舎外避難後の対応決定

(本部・避難誘導班)

- 児童生徒等の校舎外避難後の対応決定

保護者への連絡

(担任・避難誘導班)

- 対応決定後の保護者への連絡
- 緊急時児童生徒動向表への記入

避難継続：校舎内，運動場

保護者への引き渡し

(担任・避難誘導班)

- ・小学部→小学部プレイルーム
- ・中学部→中学部プレイルーム
- ・高等部→高等部ホール

※津波や道路状況その他で引き渡しが難しい場合には校内宿泊の準備を行う。

2) 登下校時

(1) 基本的対応

3) 在宅時

(1) 基本的対応

①保護者への緊急対応プリント

平成23年6月3日

保護者各位

宮城県立石巻支援学校
校長 櫻田 博

緊急時の対応について

本校では大地震などの緊急事態が発生した場合、下記のように対応してまいりますので、保護者の皆様の理解と協力をお願いいたします。

1. 「大きな地震」が起きた時の対応

- (1) 学校生活中に震度6以上の地震が発生した場合には緊急対応となり、保護者の出迎えによる帰宅となります。

(学区内(石巻市・女川町・東松島市)で震度6以上の地震が発生した場合)

※ただし、津波警報や注意報が発令された場合は、保護者自身の安全を優先してください。

(迎えに危険が伴う場合にはお子さんを学校で待機させます)

- (2) 在宅時に地震が発生した場合

震度6以上の地震が発生したり、6以下でも津波警報や注意報が発令された場合には自動的に臨時休校になります。

- (3) Eメール配信で、学校からの連絡を伝えます。メールが届き次第、できるだけ「無事です。～に避難しています。」などの返信をお願いします。(Eメール配信は停電等でできないこともあります)

震度6以上の時は「災害伝言ダイヤル171」で学校から保護者への連絡を聞くことができます。

- (4) 登下校時に地震が発生した場合

①スクールバスの場合

◎登校時・下校時(携帯電話が通じない場合)

※震度6以上の地震が発生した場合には、各コースともに現在地に関係無く、乗せている児童生徒のみを乗せて学校に向かいます(下校時は学校に戻ります)。ただし、津波注意報が発令されたり、道路が危険な場合などは、あらかじめバスのコース上に設定してある避難場所に向かいます。津波警報や注意報が解除された段階でバスは学校に向かいますので、保護者は学校で児童生徒を引き取ることとなります。(ただし、バスが途中の避難場所から動けない場合には、学校と連絡を取り、居場所を確認後に、避難場所で保護者が引き取ることとなります。)

※震度5以下の地震が発生した場合には、コースの安全に気を付けながら、普段通りに児童生徒を乗せながら(下校時は降ろしながら)学校に(下校時は終点まで)向かいます。ただし、津波警報や注意報が発令された場合には、所定の避難場所に向かいます。津波警報や注意報が解除された段階でバスは通常通りの運行をする予定です。

◎登校時・下校時(携帯電話が通じる場合)

※原則として学校に連絡を入れ、バスの現在地や運行状況を確認の上、迎えに行ってください。

②自力通学の生徒

「バス・JR」利用

◎登校時

・**官交バス営業所や JR 石巻営業所**を通して学校や保護者が情報収集して状況を把握します。状況により保護者または学校で引き取り、学校で引き取った場合は連絡を取り合って保護者に引き渡します。

◎下校時

- ・下校間もない時は、生徒が自主的に学校へ戻って避難することとなります。
- ・生徒の帰宅が確認できない場合は、**保護者と学校が協力して探索**します。
- ・発見されたら、保護者の迎えや学校で送って自宅へ向かうこととなります。

「徒歩や自転車」

◎登校時・下校時

・所在が確認できない場合、**学校と保護者が協力して探索**し、発見されたら保護者が引き取るか学校から自宅まで送り届けます。

2. その他の災害時(火災・台風など)の連絡について

(1) 学校と保護者間

- ①何らかの災害が発生した場合、担当教師から家庭に連絡があります。
- ②緊急の場合は直接学校に連絡して下さい。

3. 災害以外での危機管理対応について

(1) 児童生徒が行方不明になった時

- ①在宅時に行方不明になった場合には学校か担任に報告して下さい。
(学校に対策本部を組織します)
- ②対策本部を中心に捜索します。
- ③時間の経過や状況により保護者所轄警察署への「捜索願」を検討します。
- ④学校で発生した場合は速やかに捜索しながら保護者と連絡をとります。

(2) 学校における病気やケガの場合

- ①学校での医療行為はできないので、悪化させないための応急処置となります。
- ②緊急の場合を除き、医師の診察や病院の決定など保護者の指示で決定します。

2. 不審者対策について

- ①本校では不審者対策として**カメラ付きインターホンシステム導入**しています。来校される際はインターホンを御利用の上、学校から配布される入校証をご持参ください。
- ②学校に**不審者情報**が入った場合はプリントでご家庭にお知らせします。
- ③地域などで不審者情報があった場合はお手数ですが学校へもお知らせ下さい。

緊急時の連絡先一覧

「壘石観光」 事務所	0 2 2 5 - 7 3 - 〇〇〇〇 0 9 0 - 3 9 3 5 - 〇〇〇〇	石巻支援学校	0 2 2 5 - 9 4 - 0 2 0 2
鳴瀬コース	0 9 0 - 6 0 8 7 - 〇〇〇〇	女川コース	0 8 0 - 3 6 5 8 - 〇〇〇〇
桃生コース	0 8 0 - 3 6 5 8 - 〇〇〇〇	雄勝コース	0 8 0 - 3 6 5 8 - 〇〇〇〇
石巻コース	0 8 0 - 3 6 5 8 - 〇〇〇〇	北上コース	0 8 0 - 3 6 5 8 - 〇〇〇〇
牡鹿コース	0 8 0 - 3 6 5 8 - 〇〇〇〇		
宮交バス営業所	0 2 2 5 - 2 2 - 〇〇〇〇	JR石巻営業所	0 2 2 5 - 9 5 - 〇〇〇〇

「災害伝言ダイヤル」の利用方法

- ①「171」に電話してガイダンス(案内)に従います。
- ②伝言を聞く場合は、再生希望なので「2」をプッシュします。
- ③学校の電話番号「0225-94-0202」をプッシュします。
- ④「02-25-94-02-02の伝言をお伝えします」とメッセージが流れます。
- ⑤ガイダンスに従い、プッシュ式電話の場合は「1」のあとに「#」を押します。
ダイヤル式の場合はそのまま待ちます。
- ⑥「新しい伝言からお伝えします。伝言を繰り返すときは「8」のあとに「#」を押して下さい。この伝言は〇月〇日〇時〇分に預かりました。」「お伝えする伝言は以上です。電話をお切り下さい。」とメッセージが流れます。

⑤通信機器が不通の場合の安否確認地区割り担当

地区担当者一覧

担当教員氏名	小学部児童氏名	中学部生徒氏名	高等部生徒氏名
〇〇 〇〇〇	〇〇 〇〇〇 〇〇 〇〇〇 〇〇 〇〇〇	〇〇 〇〇〇 〇〇 〇〇〇	〇〇 〇〇〇

※自宅から直接安否確認に向かえるよう児童生徒の居住地の近くに住む職員を充てる。

⑥津波想定スクールバス会社対応マニュアル

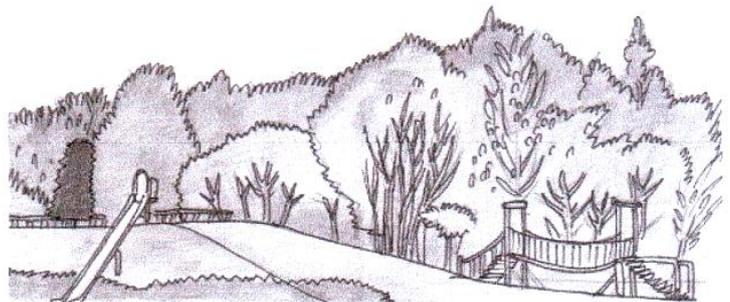
登下校中に地震が発生した場合の対応 (スクールバス運転手。添乗員用)

※学校の基本的な考え方

学区内(石巻市・東松島市・女川町)で震度6以上の地震が発生した場合に緊急対応となり、臨時休校となる。ただし、震度5以下でも校舎に亀裂が入るなど、学校生活を維持することが難しい場合には臨時休校となる。

※緊急時(地震・津波が発生した場合)の対応

地震が発生し津波が想定される場合	地震が発生した場合
<p>(1) 登下校時</p> <p>→直ちに決められた避難場所、あるいは最も近い安全な場所に移動する。</p> <p>①コース内にある最も近くの高台(あらかじめ決められている避難場所)に速やかに移動する。</p> <p>②現在地や児童・生徒の状況をバス会社に連絡する。学校からの指示を受ける。 (無線を使って)</p> <p>※・・・・・・</p> <p>※・・・・・・</p>	<p>(2) 登校時</p> <p>①・・・・・・</p> <p>②・・・・・・</p> <p>③・・・・・・</p>
	<p>(3) 下校時</p> <p>①・・・・・・</p> <p>②・・・・・・</p> <p>③・・・・・・</p> <p>④・・・・・・</p>



⑦津波想定スクールバス時刻と避難場所一覧

														スクールバス 避難場所													
		〇〇コース		〇〇コース		〇〇コース		〇〇コース		〇〇コース		〇〇コース															
		000-0000-0000		000-0000-0000		000-0000-0000		000-0000-0000		000-0000-0000		000-0000-0000		000-0000-0000													
始発	7:39	〇〇センター (東松島市〇〇)		7:42	〇〇神社 (〇〇町)		7:24	〇〇前 (〇〇二丁目)		7:30	〇〇バス停 (〇〇浜字町)		7:43	〇〇浦 (〇〇の畑)		7:28	〇〇園 (〇〇宮下南)										
終着	15:45			15:56			15:50			16:01			15:35			16:10	〇〇バス停 (〇〇天神山)										
1	8:40 14:45	〇〇中学校		7:50 15:45	〇〇小学校		7:30 15:45	〇〇小学校		8:15 15:20	〇〇小学校		7:45 15:30	〇〇ホーム		7:35 15:35	〇〇中学校										
2	8:40 14:45	〇〇小学校		7:40 15:50	〇〇小学校		7:30 15:45	〇〇高等学校		8:15 15:20	〇〇アパート前		7:50 15:25	〇〇店		7:45 15:25	〇〇小学校										
3	8:40 14:45	〇〇高等学校		8:10 15:10	〇〇小学校		7:40 15:35	〇〇中学校		8:25 15:10	〇〇マンション		7:50 15:25	〇〇中学校		7:55 15:15	〇〇小学校										
4	8:50 14:35	〇〇高等学校		8:20 15:10	〇〇中学校		7:45 15:30	〇〇土木事務所		8:30 15:05	〇〇小学校		8:00 15:15	〇〇小学校		8:00 15:10	〇〇中学校										
5			8:23 15:08	〇〇小学校		7:45 15:30	〇〇小学校		8:30 15:05	〇〇中学校		8:00 15:15	〇〇寺		8:30 14:50	〇〇小学校										
6				8:45 14:45	〇〇高等学校		7:45 15:30	〇〇郵便局		8:35 15:00	〇〇小学校		8:10 15:05	〇〇小学校													
7				8:50 14:35	〇〇中学校		7:45 15:30	〇〇小学校		8:45 14:45	〇〇小学校		8:10 15:05	〇〇中学校													
8							7:50 15:25	石巻市役所		8:50 14:40	〇〇店		8:20 14:55	〇〇小学校													
9							7:50 15:25	〇〇小学校		8:55 14:35	〇〇ショッピングセ ンター		8:20 14:55	〇〇高等学校													
10							8:00 15:15	〇〇小学校					8:40 14:45	〇〇小学校													
11							8:05 15:10	〇〇高等学校					8:45 14:40	〇〇高等学校													
12							8:05 15:10	〇〇会社					8:50 14:35	〇〇中学校													
13							8:05 15:10	〇〇小学校																			
14							8:20 15:00	〇〇中学校																			
15																											
学校	8:55 14:30	1時間16分		9:00 14:30	1時間18分		8:55 14:30	1時間31分		9:00 14:30	1時間30分		8:55 14:30	1時間12分		8:55 14:30	1時間27分										
人数	小9, 中5, 高3		小8, 中4, 高4		小7, 中6, 高6		小9, 中3, 高9		小7, 中3, 高4		小1, 中4, 高5		17人(リフト2人)		16人(リフト2人)		19人		21人		14人(リフト2人)		9人(リフト1人)				
	登校16人/下校17人		登校14人/下校15人		登校18人/下校19人		登校21人/下校21人		登校13人/下校14人		登校7人/下校7人																



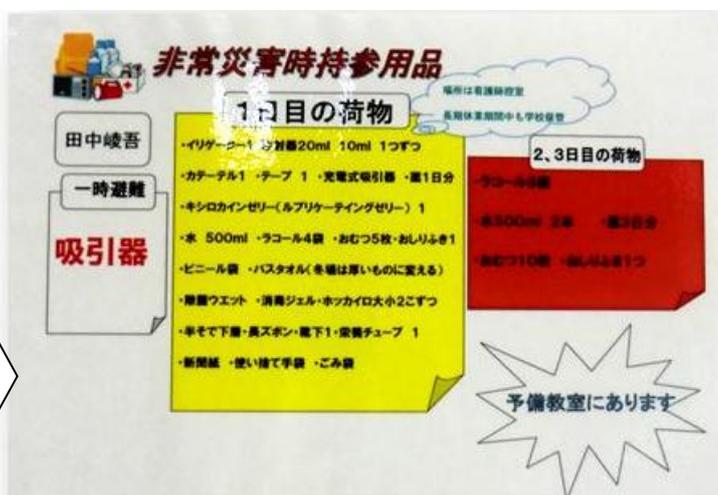
⑧災害時の医療的ケア児童生徒の持ち出し物品

医療的ケア児童生徒関係の災害非常用の物品等について

H23. 9. 26現在

*保管場所は看護師室

No	購入物品	価格	購入先 支援先	賞味・使用期限 メンテナンス
1	ポータブル吸引器 《パワースマイル》KS-700 ・吸引カテーテル1本	31,500	学校薬剤師 こぐま薬局	
2	足踏式吸引器 《ブルークロスフットサクシオン ポンプ》FP-300	18,000		
3	トロメリンEX ステック(2.0g×50)3箱	1,260×3箱 3,780		2013.05
4	レンジでゆたぼん首・肩用 1個 レンジでゆたぼんLL 1個			
5	発電機HONDA 16i			オイル交換1年毎
6	足踏式吸引器QQ ・吸引カテーテル1本 Fr. 12(4.0mm) 40cm(口・鼻腔用)		拓桃医療 Dr. 田中	2014.03
7	手動式吸引器 ・吸引カテーテル1本 Fr. 18(6.0mm) 40cm(口腔・鼻腔用)			使用期限記載なし
8	吸引カテーテル ① Fr. 8(2.67m)20本 40cm ② Fr. 10(3.33mm) 46cm 21本			2014.05 2014.02
9	発電機HONDA 26i	購入予定	県費	オイル交換1年毎
10	発電機HONDA 16i		札幌新陽高 校	オイル交換1年度

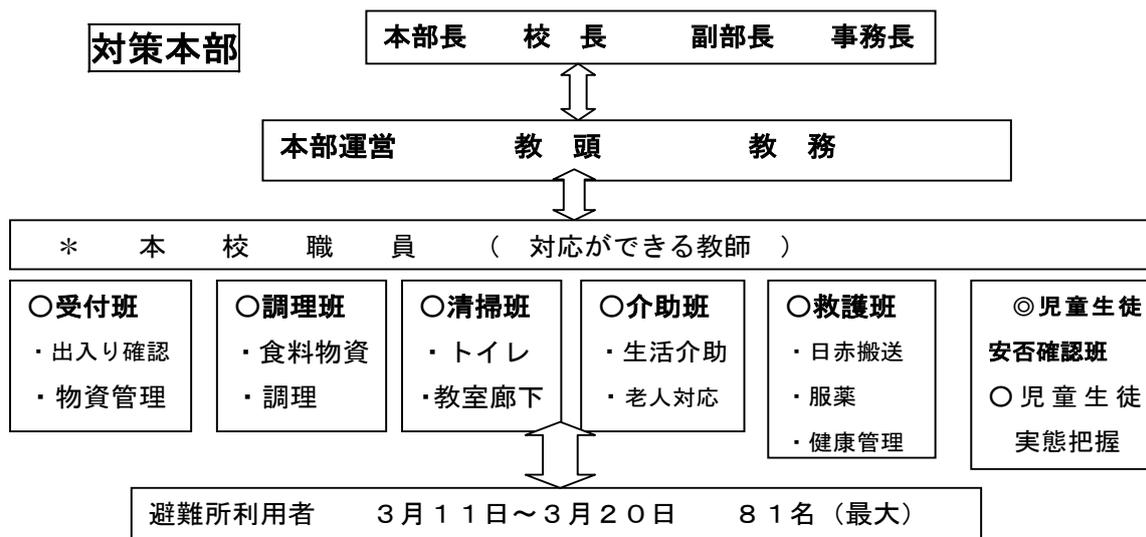


看護師室の戸棚に保管されている非常持ち出し物品

1) 運営組織の変遷

(1) 震災後10日間 (3月 被災地混乱期)

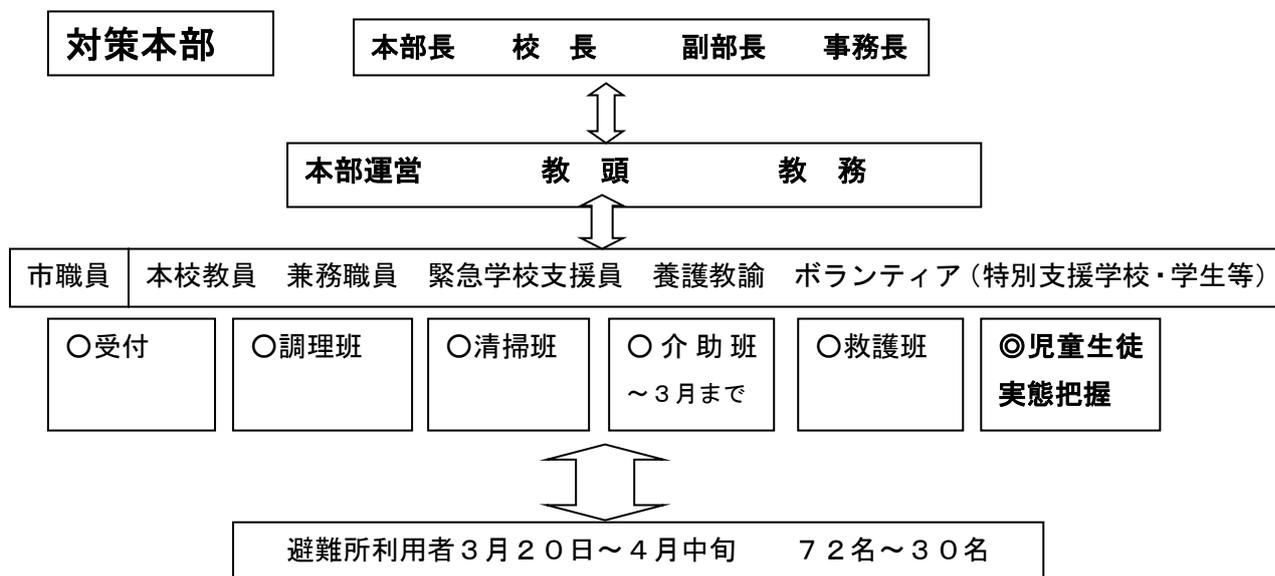
家屋が流される、水が引かないなどの被害で「水道」「ガス」「電気」の生活ライフラインや電話、インターネット等の情報が絶たれた。本校は被害の少ない蛇田地区にあったため比較的復旧が早かったが、それでも一週間を要した。ガスはプロパンガスを使用していたので、水道がつかないと調理が可能になり炊き出しができた。市の職員の本校避難所の対応が一週間後だったため、それまでは本校職員が中心になり係分担を決めて避難所の対応を行った。また、物資が配給されるまでは、近隣の農家の方々や教師が、米や飲み物を提供してくれた。県や市の物資が届いたの



は5日後だった。

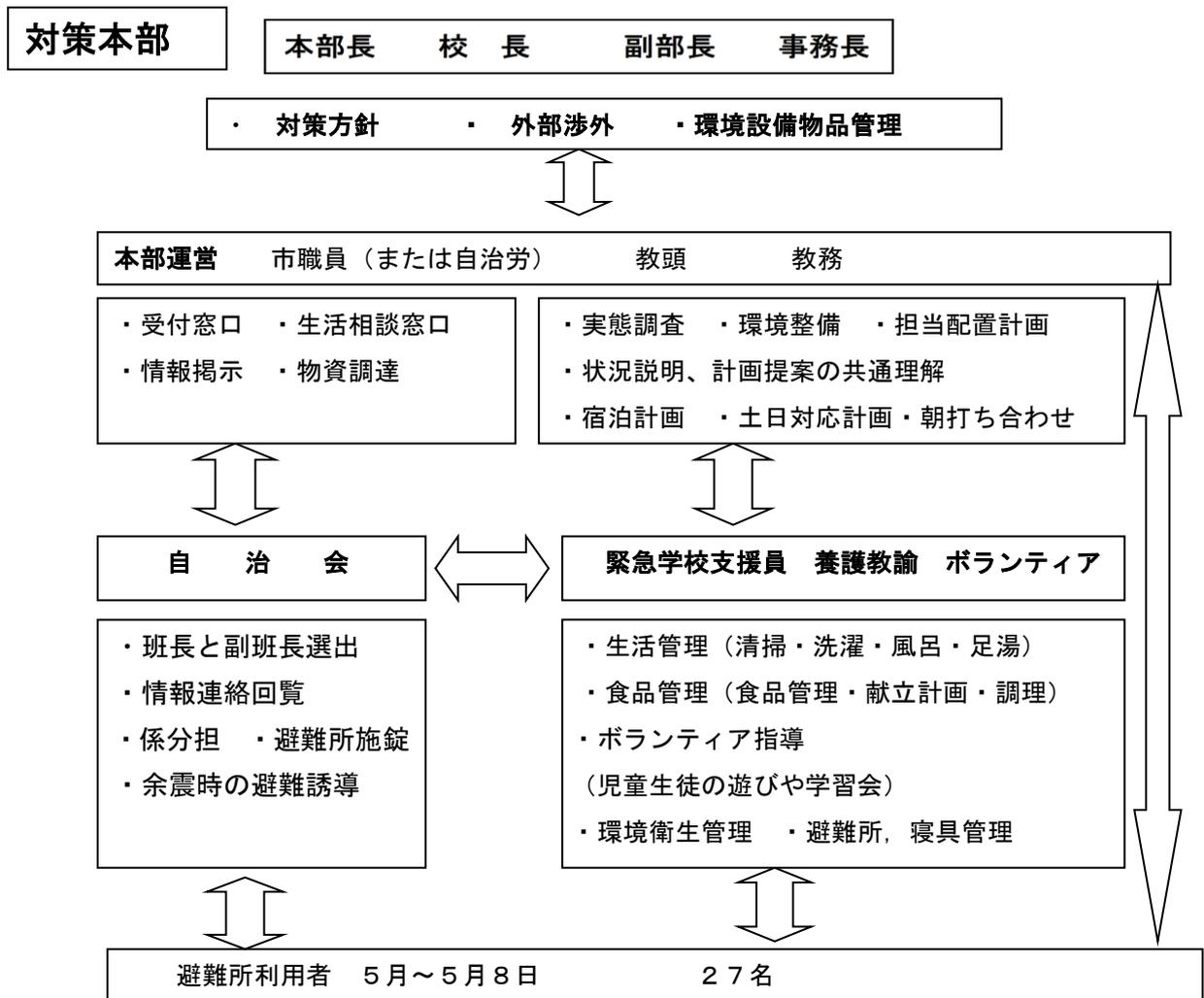
(2) 震災後1~2か月 (3~4月中旬)

市の職員が運営に加わり、受付を中心に対応することになった。また、今年度4月に転勤予定の教師が兼務教員として学校に残り運営の柱となった。さらに、県内外の支援学校からのボランティアの協力があり運営に加わったことで、本校職員は避難所運営から離れ、授業再開に向けての準備に取り組むことができた。



(3) 震災後3か月目（4月下旬～5月）

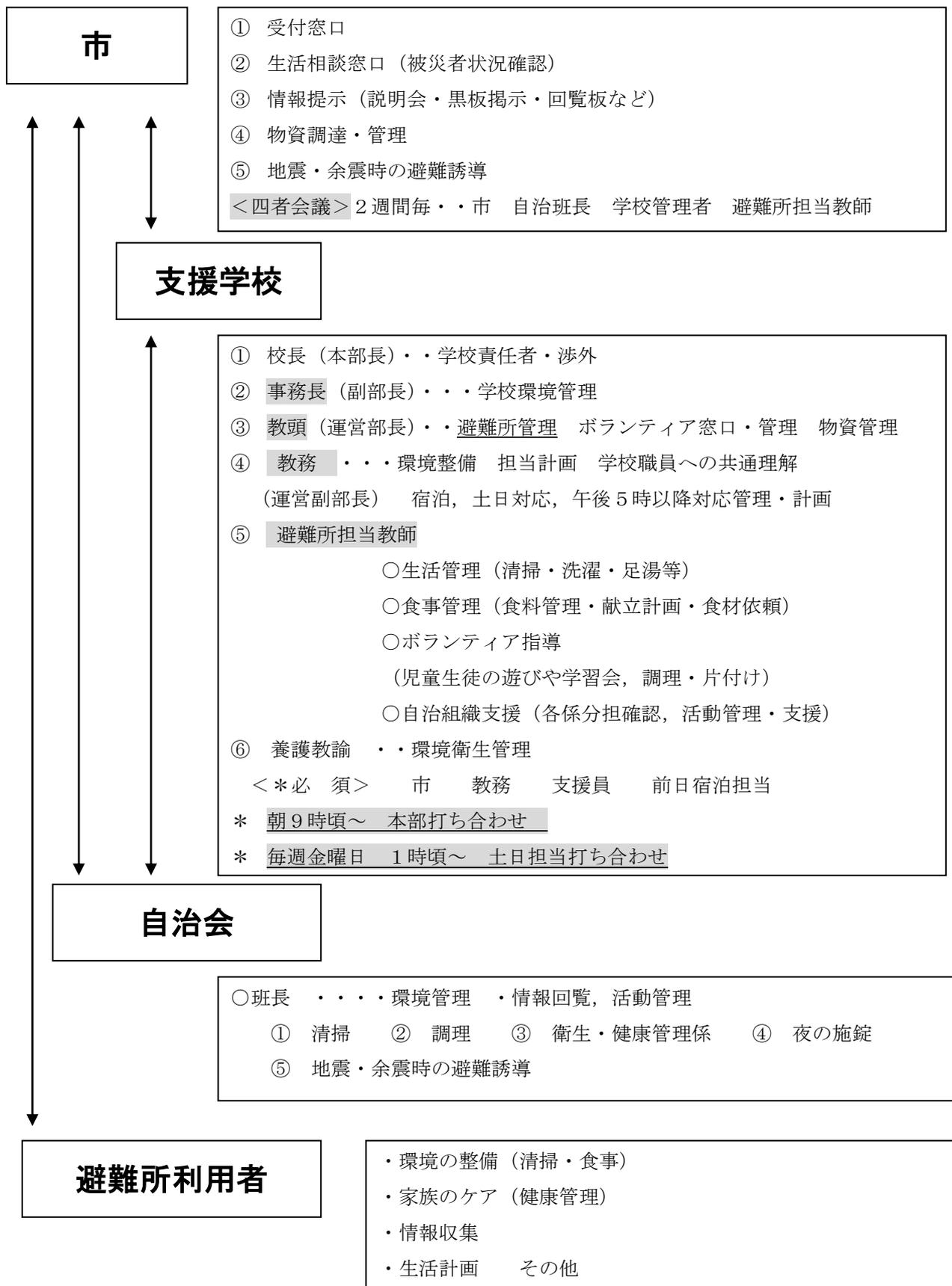
市の職員のほかに全国から自治労の方々が受付を行う等、運営の柱になった。また、避難している方々の中から2名が自治会の代表になり運営に加わった。学校再開（5月12日）を目標にして、緊急学校支援員を中心に学校環境の整備を行った。調理（炊き出し）は、自治会で係を決め輪番制にして支援員と一緒に取り組んだ。利用者は27名になると、増加や減少もなくなり二次避難所に向けて調整を進め、近くの区の集会所を借りることができた。本校の避難所は5月8日に終了した。



- * 人数が減少した時点で、使用教室を特別教室2室（Aコース教室・プレイルーム）に縮小し、環境を整備した。利用する方が使いやすいように、昇降口からの動線がスムーズなことや、本部や保健室と近い場所とした。
- * 避難所を終了するに当たって、今後、危機的な場面で活用しやすいように、水や食料品（賞味期限1年以上のもの）や寝具等を整理した。
- * 組織は時期により変化した。震災直後は学校に来れる少ない教師で運営しなくてはならない。そこをどう乗り切るかが重要だと考える。

1) 想定される避難所組織機能と係分担

(1) 運営組織



(2) 係分担

		業 務 内 容	備 考	
受付 3～4名		<ul style="list-style-type: none"> ・避難者の名簿記録（出入り記録名簿1） ・一日の記録（記録簿2） ・避難者の外出記録（記録3） ・来校者の記録（記録4） ・市の支援物資記録（記録5） ・市以外の支援物資記録（記録6） ・情報提示 ・生活相談（記録7） 	本校教師担当 本教師担当 市職員 本校職員 市職員 本校職員 市職員 市職員	＊受付では記録簿を7冊準備し、市の職員のほかに学校の職員を1名加え3名以上で行うとよい。
清掃班 5～6名		<ul style="list-style-type: none"> ・トイレの使い方ルールの提示と連絡 ・プールの水くみ ・トイレ清掃 ・ゴミ出しルールの提示と連絡 		＊水が出るまで、プールからの水くみは朝の仕事となる。衛生管理は避難所での大切なルールである。
物資班	生活物資管理 2人	<ul style="list-style-type: none"> ・物資の仕分け ・物資の配布 		＊何が必要かを集約し、市や自衛隊に毎日伝えた。
	食品調理運営 3名	<ul style="list-style-type: none"> ・食品庫管理 ・朝・昼・夕ご飯の計画 ・食料物資配布 ・調理（炊き出し） ・調理室管理 ・必要な食品物資依頼（市や自衛隊） ・ボランティア指導 		＊食材が重複しないように自衛隊や市に伝えた。 ＊一日の食事のバランスを考えて、元気ができるように汁物をメインに調理した。
救護班 2～3名		<ul style="list-style-type: none"> ・病院搬送 ・医薬品管理，配布 ・健康管理 ・環境衛生管理 		＊けがや風邪や発作など，日赤に搬送する場面が多くあった。
介助班		<ul style="list-style-type: none"> ・老人介助対応（トイレ・食事） ・要望確認 ・夜間管理（深夜3交代） 		＊震災直後10日間ほど必要であった。
安否確認班 実態把握 20名以上		<ul style="list-style-type: none"> ・地域の被害状況の把握 		＊震災後2週間まで ＊避難所と平行しての業務となった。

＊上記の係は必須である。この震災で得た組織作りが、今後利用できるかは、その震災の内容や状況にもよると考えられる。どんな危機的状況でも、運営がスムーズにいくためには、対策本部が県や市とつながり、人命を大切にしたい、分かりやすくシンプルな組織をつくることだと感じる。

3) 緊急物資の整理収納

(1) 小学部2階倉庫

<table border="1"> <tr> <td>バスタオル</td> <td>Tシャツ</td> <td>トイレト ペーパー</td> <td>くつした</td> </tr> <tr> <td>衣類</td> <td>軍手</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>毛布10</td> <td>毛布10</td> <td>肌着</td> <td>おむつ</td> </tr> <tr> <td>毛布10</td> <td>毛布10</td> <td>毛布10</td> <td>赤十字毛布 10</td> </tr> <tr> <td>毛布10</td> <td>毛布10</td> <td>毛布10</td> <td></td> </tr> </table>	バスタオル	Tシャツ	トイレト ペーパー	くつした	衣類	軍手			毛布10	毛布10	肌着	おむつ	毛布10	毛布10	毛布10	赤十字毛布 10	毛布10	毛布10	毛布10		<p>2012年までの食品</p> <ul style="list-style-type: none"> ・玄米フレーク10個 ・にんじんジュース ・黒豆茶30×2 ・スープ缶12個×10箱 ・クリームコーン24×3箱 ・米ヌードル12×6箱 ・青汁20本×2箱 ・缶詰類 ・野菜ジュース 24本 ・アルフォート 70個 ・クラッカー15個 ・チルミル4缶 ・ガム20個×7 ・コーヒー ・カボチャとトマトのポタージュ120個 	<p>ストープ2 やかん3 ガスボンベ 12 単4電池 ラジカセ1</p>	<p>PTA 調理器具類</p> <ul style="list-style-type: none"> ・餅つき器2 ・ガスコンロ2 ・ピューラー等
バスタオル	Tシャツ	トイレト ペーパー	くつした																				
衣類	軍手																						
毛布10	毛布10	肌着	おむつ																				
毛布10	毛布10	毛布10	赤十字毛布 10																				
毛布10	毛布10	毛布10																					
<table border="1"> <tr> <td>おむつ</td> <td>おむつ</td> <td>はくパンツ</td> <td>本部グッズ 懐中電灯 電池 ビニール寝巻 紙コップ 等</td> </tr> <tr> <td></td> <td>お尻ふき</td> <td>うす型 パンツ</td> <td>尿パット</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>ろうそくグッズ</td> </tr> </table>	おむつ	おむつ	はくパンツ	本部グッズ 懐中電灯 電池 ビニール寝巻 紙コップ 等		お尻ふき	うす型 パンツ	尿パット				ろうそくグッズ	<p>固形 せっけん</p> <p>どんぶり サランラップ 割り箸</p>	<p>2013~ 2015食料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マクロ缶 ・タヒチカレー ・ミルクビスケット ・クラッカー 	<p>ビニール袋 ハブラシ 体温計 ドライヤー ラジオ18 懐中電灯付 きラジオ6</p>	<p>2013~15まで ミネラルウォーター 2L×6本×36箱=216本</p>							
おむつ	おむつ	はくパンツ	本部グッズ 懐中電灯 電池 ビニール寝巻 紙コップ 等																				
	お尻ふき	うす型 パンツ	尿パット																				
			ろうそくグッズ																				

(2) 高等部2階生活訓練室

* 集会室1側

枕 30コ	タオルケット 20	薄手毛布 12	薄手毛布 12	薄手毛布 11	薄手毛布 12	薄手毛布 20
掛け布団 5	掛け布団 6	掛け布団 6	掛け布団 5	掛け布団 5	こたつ布団 5	
マットレス 3	羊毛掛け布団 4 マットレス 2	敷き布団 5		敷き布団 5		

厚手毛布 9	厚手毛 9	厚手毛布 7	・厚手毛布 (クリーニング)	座布団茶 5	* 調理室側
掛け布団 6	掛け布団 5	掛け布団 5	・バスタオル	座布団赤 30	
敷き布団 6	敷き布団 6	敷き布団 6	掛けカバー 敷きカバー 掛けカバー 敷きカバー	柄座布団9 座布団赤 10	



3 地域で生きるための備え

震災の時、今を生きる

平成23年度石巻支援学校父母教師会会長 松川 浩子

3月11日の東日本大震災で犠牲になられた方々に心よりご冥福をお祈り申し上げます。

また甚大な被害を受け、激変した生活の中、ご苦勞されています皆様に心よりお見舞い申し上げます。

多くの皆様から温かいご支援を賜わり、厚くお礼申し上げます。

未曾有の大震災。絶望と悲しみに、ただただ呆然と立ち尽くすだけでした。雪の降る寒い日でした。

私は引きこもりがちの息子(自閉症・てんかん)が前夜、久々にプールに行きたがり、朝から石巻の高台にあるプールにいました。そこで地震に遭いました。直後家にいた娘と母の無事をメールで確認しましたが、夫や会社とは不通でした。カーラジオからは地震の大きさや津波警報が繰り返し流れました。急いで女川へ帰ろうと向かいましたが石巻市内は通行止めで、息子と二人途方に暮れていました。障害のある息子とどこへ行ったらいいいのか…。知らない場所でパニックを起こすかもしれない…。

周りの全てが異様で混乱していました。ふと気がついて石巻支援学校に行きました。玄関外に校長先生の姿を見た時安堵し、涙があふれました。女川は悲惨な状況で大変心配していたと言われ、やっと状況が分かりました。学校は避難所として開放されていました。同じく被災されていた先生もいましたが、先生方は交替で避難者のお世話をしてくださり、本当に心から感謝しています。

障害のある子どもによっては、初めての場所、人に警戒します。慣れるまで時間が掛かります。また突発的行動や奇声を発する子もいるので、周りの方のご理解が必要です。私たちのように慣れ親しんだ学校に避難できたことはラッキーなことです。それでも息子は一日目、車から降りず、家に帰りたがりました。一晩中、寒さと不安で眠れず、さすがに翌日には息子も体育館に入りました。数組の支援学校の児童生徒と家族、近所の方々、通りかかり避難してきた人々、施設の先生方と親の安否が分からない子どもたち、先生方…その全てが悲しみと先の見えない不安の中でした。近所の方は家からいろいろ運んでくださいました。「自分たちが家に戻れば体育館の場所も布団も多くの方



星に願いを

みんなの願いがきつとかないますように。

「ARASI」が来てくれますように

お金持ちになれますように

貯金たまりますように

東京に旅行に行けますように

全国サッカー大会のチケットが当たりますように

やせますように

足が速く治りますように

アトピーが治りますように

足が速くなりますように

パソコンがうまくなりますように

プールでうまく泳げますように

作業のお皿を上手に作れますように

プロ野球選手になれますように

お姉ちゃんとたくさん遊べますように

先輩と仲良くなれますように

みんなが仲良く過ごせますように

仮設があたりますように

行方不明者が一日も早く全員見つかりますように

被災地が必ず復興しますように

7月 高等部七夕短冊より

が使えるから」と言って地震で被害のあった家に戻っていただきました。その後日、たくさんの物資を届けてくださったのです。先生方は昼夜を問わず炊き出しをしたり、暖を取るようと様々な声掛けをしながら気配りをしてくださいました。安否確認に出掛ける先生方もいました。

翌日、新聞が届き、津波による石巻・女川の写真の惨状を見て、地震後連絡の取れない家族たちへの絶望感で泣き崩れました。

しかし三日目、夫と娘が探して迎えに来ました。おかげさまで家族全員無事でした。家も会社も全てが跡形も無く流され、危機一髪で津波から逃げ切り、九死に一生で生き伸びたこと、避難所での様子を聞いて震えが止まりませんでした。さらに社員が6人犠牲になったこと、そのご遺族と失業してしまった社員のことを思うと、身が引き裂かれる思いです。悪い夢であってほしいと何度も思いました。

家族と再会してから仙台に住んでいます。毎日、知人、友人から物資を集め開いている店を探して買い出しをし、石巻・女川へ運びました。社員のこと、行方不明者の安否確認、遺体確認、会社の資料収集に奔走していました。

震災後一か月が経つと火葬場へ行くことが頻繁になりました。毎日めまぐるしく、ただ必死で過ごしていました。その間、息子は娘と母にまかせっきりで、我が子二人に構ってあげることはできませんでした。二人とも家にこもり、一步も外に出ず我慢していました。

たくさんの人々の避難生活、仮設住宅での生活、半壊家屋や親族の家でお世話になっている様子など、言葉で言い切れないほどのご苦勞を聞いたり見たりしました。被災地と他の地域ではすごく温度差があると思います。多くの方が心を痛め、ご支援してくださっております。でもこの自然の猛威は人事ではないのです。

一か月遅れで学校が始まり、日増しに子どもたちが明るく元気に笑顔で頑張っています。私は子どもたち



堂々と入場する小学部児童（運動会10/1）



ふるさとの空に響け元気太鼓（学習発表会10/29 中学部）



いただいた大型絵本の読み聞かせ（学習発表会10/29 高等部）高等部の生徒が、小・中学部の子どもたちのために準備し「お楽しみ広場」は盛況でした。

の一生懸命な姿に励まされ、多くを学びました。危険な所を取り除いて、広々とした校庭で何年かぶりに小・中・高合同大運動会が開かれ、小・中・高学習発表会もできました。大成功でみんなが感動しました。短期間で指導された先生方へ感謝します。

ハンディがあっても、(最後まで頑張ればどんなことでもできるんだ!)と勇気を子どもたちから教えてもらいました。子どもたちは自分の意思でいろいろとチャレンジする姿も見せてくれました。

でも子どもたちもたくさんの恐怖と不安を我慢しています。親は生活に必死で、ついつい子どもたちのことを後回しにしてしまいがちです。子ども達の心のケアが必要だと思いました。

そこで先生方と保護者が協働できること、通常のPTA活動からさらにスクールボランティアとして、できるだけ都合の良い時に学校へ行って子どもたちとかかわり、楽しく共感できることをしたいと提案し、賛同いただきました。その一つにたくさんの絵本が寄贈され、保護者の力で図書室が出来ました。先生が子どもたちに読んであげ、親たちも読んであげ、子どもたち自身が読み聞かせをするようになりました。図書室には子どもたちが楽しくなるように飾り付け作りに親が集まり、集まる親同士が仲良くなり、子育ての悩みを語り合う集いの場にもなりました。

震災前から役員会で話題になっていた古川支援のハートバッチは、以前から(子どもを連れて出掛ける時にあったらいい)と思う親も多くいました。この災害で、さらに必要性を強く思う人も増えました。有志でバッチグーTシャツを作り販売しています。卒業してからではなく、学校にいる時からこそ地域とかかわり、ご理解とご支援をいただきながら共生していくことが大切だと思います。家庭と学校と地域が連携し、子どもを育ていくことを願います。バッチを付けることが目的ではなく、共に生きるために一生懸命な姿を見ていただくこと、その努力こそが理解につながるのだと思います。

これまでも、これからも、私たち親は子育ての



スクーラーボランティアによる図書室作り

ハートバッチで伝えます
障がいがあることを

「ハートバッチ」は
「我が子に障がいがあることを周囲の人に理解してもらい、温かく見守って欲しい」という願いで大崎で生まれました。
いつの日か「障がいがあります」の文字のないバッチになることを石巻でも目指しています。
応援よろしくお願ひします。

バッチグー👍大作戦in石巻展開中!

障がいがあります

ハートバッチは地域に住む障がいがある方にも付けていただけるように実費でお分けしています。
本校父母教師会事務局までお電話ください

宮城県立石巻支援学校父母教師会
連絡先：石巻市蛇田新立野410-1
TEL 0225-94-0202

地域との連携を目指して始まったハートバッチ運動

苦勞，悩みを抱え，くじけそうになる時，戸惑い落ち込んだ時，心が沈んだまま前に進めない時，いっぱい泣いてきました。それでも頑張ろうと励ますしかありません。子どもたちもそれ以上に辛いかも知れない，分かってもらえない，伝わらない気持ちが…。

でもね，一人じゃないよ。仲間がいるよ，子どもにも，親にも。一人じゃ寂しいけれど，一緒に前に進みましょう。それがPTA活動です。楽しいと思えることは自分自身の心次第です。意識して勇気をもって，人と人の絆を結びましょう。思いやることから始めましょう。

『PTA活動として望むこと』

① 意識と勇気

保護者と担任が同じ目的
に向かって語り合う。
PTA活動への参加。

② スクールボランティア

子どもの心のケアを目的。
子どもと親と教員が共感
する。

③ 保護者懇談会／

卒業生の親との懇談会

子育ての悩みを語り合う
縦と横のつながり。
進路についての目当てを
話し合う親同士のつながり。

④ 地域への理解への活動

地区班やバッチグー有志
などで学校行事案内等から
学校，子どもたちの様子を
伝える。
家庭・学校・地域の連携を
図り子どもを育む。

⑤ 学校同士の連携

情報交換
親睦
支えあい

障害あること理解して

古川支援学校PTA「石巻父母教師会」に

「ハートバッチ」贈る

周囲の人たちに障害があることを理解して

古川支援学校の浦藤盛PTA会長(左)から県石巻支援学校の松川浩子父母教師会長に寄贈されたハートバッチ「石巻支援学校で



もらう「ハートバッチ」。市の県石巻支援学校が、大崎市の県古川支援学校PTAから石巻支援学校PTAから石巻震災では、障害を持つ

「ハートバッチは、古川支援学校のPTAが09年に「我が子に障害があることを周囲に理解してもらい、温かく見守ってほしい」として、



どの願いを込めて作製。特殊ヒニール製で縦7×横7センチ程度の大きさ。中央にハートが描かれ「障がいがあります」の文字が記されている。今回、支援学校に150枚を寄贈した。

支援学校による、障害は外見では分からないため、トラブルも巻き込まれる事例もあり、震災後に車の中で避難生活を送っていた家族もいた。その中で、ある生徒は「ハートバッチ」を付けていたことで周囲の理解につながり、目立ったトラブルが、目立ったトラブル

子供の保護者が「周囲に迷惑をかける」と避難所に入らなかつた事例もあり、同学校は「地域の人たちに障害を理解してもらおうためにバッチの周知を図っていきたい」としている。

石巻支援学校は「バッチを付けることに抵抗感を持つ親もあり、強制ではない」として、バッチへの理解を深める活動を行う方針だ。

【石川忠雄】



左：ハートバッチを手にする鶴岡養護，石巻支援，古川支援の各PTA会長



右：バッチグーTシャツを着ての合同研修会(古川支援PTA)

校長 櫻田 博

東日本大震災を経験し、本校ではどんな課題があったのか、そして今後どんな対策が必要であるのかを整理してみたいと考える。

整理するに当たり、文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課が事務局となり、防災関係の有識者による「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議中間とりまとめ 平成23年9月（以下、有識者会議報告という）を参照した。

有識者会議報告の中で、今後の防災教育・防災管理等の考え方について、次のように示されている。

『学校安全は、「生活安全」「交通安全」「災害安全(防災と同義)」の三つの領域で構成され、また、その構造として、安全教育、安全管理そしてその両者を円滑に推進するための組織活動がある。

ここでは、「災害安全」について学校安全の構造に沿い、児童生徒等の防災に関する学習や指導を「防災教育」、学校施設や児童生徒等の安全管理を「防災管理」、校内の体制や家庭・地域等との連携を「組織活動」として、それぞれの内容を記すこととする。

なお、「防災管理」と「組織活動」については、相互の関連性が強いことから合わせて「防災管理等」と示す。』

東日本大震災における本校の課題と対策についても、有識者会議報告の視点にならない、

- ① 防災教育
 - ② 防災管理等
- の2点から整理したいと考える。

課 題

1) 防災教育上の課題

(1) 子どもの命を守る防災教育の徹底

本校の危機管理マニュアルでは、① 学校生活時、② 登下校時 ③ 在宅時に分けて基本的対応を検討していた。地震が起きた時刻は、午後2時46分でマニュアル上は在宅時に当たる。本校では4名の児童生徒（小学部1名、高等部3名）が津波の犠牲になった。在宅時の教師による安否確認の対応方法は、検討されていたが、津波を想定した子どもへの防災訓練や保護者・地域と連携した防災訓練は実施されていなかった。地震による津波を想定し、保護者と連携した防災訓練や防災教育の研修等が不十分であったことが課題である。

また、今回の事例より学校生活以外の場面でも、自分の命は自分で守る「主体的に行動する態度」を障害のある子どもたちに身に付けさせる事が課題として浮き彫りになった。そのための教育課程の在り方や指導内容・方法等の工夫について、究明する必要がある。

(2) 障害のある子どもの理解・啓発

障害のある子どもの防災教育の充実を考えたときに、障害のある子どもの地域への理解・啓発運

動を普段から更に計画的・組織的に行っておく必要があった。その理由として、自閉症など見ただけでは直ぐに障害が理解しにくい「見えない障害」の場合、地域の小・中学校等の避難所で、障害の分かりにくさから避難所生活に支障を来す事例も見られたからである。「開かれた学校」を標榜し、運動会や学校祭、校外におけるバザーや作品展、学校見学会、自主公開研究会等の各種行事の中で、地域を意識した案内や理解・啓発活動を展開してきたものの、更なる創意工夫が必要と思われる。

2) 防災管理等の課題

(1) 安否確認方法の吟味

今回の震災前に、PTAの理解の下、緊急Eメールシステムに加入していたが、サーバー自体が壊滅的な被害を受け、全く機能しなかった。また、ガソリン不足等から出勤できる教員が限られていた。そこで、安否確認は、出勤できる教員が、自宅や避難所等を一軒ずつ廻りながら確認するという方法になった。また行方不明者もいたことにより、児童生徒・職員の最終確認ができたのは、3月22日であった。実に震災から10日以上が経っていた。電話や緊急Eメールが使用できない場合の安否確認の方法を事前に確立しておく必要がある。また、大災害時には、全職員が集合できないことが明らかになった。出勤できる職員数や構成から、組織を再構築する臨機応変な対応が常に求められた。

(2) 子どもの生活・心理的状況の把握とケア

大震災によりライフライン・道路の復旧や生活の立て直し、職員の状況等から学校の再開が5月12日と遅れた。学校再開の条件は、① バス路線の再構築、② 給食の提供 ③ 医療的ケアを実施する看護師の確保と押さえた。学校再開までに、子どもの家庭状況や心理的状況を把握し、状況に応じた準備をする必要があった。

(3) 災害用備蓄品の整備

本校は震災当日から5月8日まで避難所として運営していたが、避難所の指定になっていたわけでもなく食料等の災害用備蓄品が整備されていなかった。市役所で正式な避難所としての申請をした結果、5日後に初めて自衛隊より食料・水等が供給された。それ以前は、職員の自助努力による菓子・食料の提供であった。また、地域住民が学校にお世話になったお礼にと米や野菜を届けてくれた。更に近隣の福祉施設や工務店から、おにぎり等の提供があり、何とか避難所の住民に食料を提供できたのである。食料・水や災害用備蓄品等の整備が課題となった。

(4) 避難所運営マニュアルの整備

本校には、避難所運営マニュアルはなかった。避難所運営に当たっては、現実的課題を一つ一つクリアすることで避難所運営の仕方が見えてきたというのが実情である。

避難所は生活の場である。生活の場として最低限保障しなければならないことは、次の3点である。① 食事 ② トイレ ③ 睡眠。これらを保障するための施設・設備の充実や配慮の工夫が必要であった。

また、避難所運営を本校主導型で一貫して行ったが、避難者自身にも生活改善を行おうとする意

識改革や行動が芽生えたので、**避難者の自主的活動にも配慮する必要**があった。

更に、水や電気などのライフラインが不通の中、避難所では風邪や胃腸炎などの感染症が一時流行した。**避難者の健康管理・環境衛生には特に配慮する必要**があった。

対策と方向性

1) 防災教育上の対策と方向性

(1) 子どもの命を守る防災教育の充実

震災後、本校では、全校規模では地震による災害想定で2回、火事による災害想定で1回、教師による不審者訓練が1回、学部ごとの不審者訓練を1回行った。また、学校以外にも修学旅行先のホテルに到着後、必ずどの学部も避難経路の確認と避難訓練を行ってから休憩・食事・風呂となっている。避難訓練後は、必ず評価活動を行い、教師や子どもの避難方法や確認等の修正を行っている。マニュアルは、原理・原則である。原理・原則はシンプルでなければ機能しない。いかに**シンプルにかつ柔軟に対応できる行動力を教師が率先垂範のモデルとして身に付け、子どもに浸透させる事が非常に大事**である。常に訓練を通し、修正・検討を加えながらマニュアルを改善している。マニュアルは、子どもや教師の実態に即し常に見直し、進化するものであるという認識が必要である。

また、**防災教育を教育課程にどのように位置付けていくのが今後の最重要課題**である。障害の程度や発達段階に応じて、系統的、発展的に防災教育に係る知識や態度が身に付くようなシステムを究明しなければならない。障害のある子どもに「主体的に行動する態度」を育成するための指導内容や方法について、教育課程委員会や安全指導部等における検討を通じ、教育課程に明確に位置付けていく必要がある。その際、教師の防災教育に係る知識・技術等の向上が必須条件となる。教師の防災教育力の向上と保護者・地域と連携した防災訓練や防災教育の充実の在り方を今後検討していく必要がある。

(2) 障害のある子どもの理解・啓発

本校では、自閉症等のいわゆる「見えない障害」のため、集団での避難所生活で理解を得るのが**難しい事例があったことからPTAを中心に障害児の理解・啓発運動として「ハートバッチ」運動が展開されるようになった**。これは、古川支援学校PTAから寄贈されたものである。バッチは社会の障害児理解を促進するねらいがあり、古川支援学校から継承された運動は、今回の震災で支援を頂いた山形県立鶴岡養護学校にも伝承された。震災による親同士の絆が、新たな障害児理解の啓発運動として広がりを見せ始めた。

こうした運動を契機に、**学校支援ボランティアの運動**も自主的に始まり、絵本読み聞かせ、調理等のサークルも編成された。現在では、PTA会長を中心とした呼び掛けで全国から絵本の寄贈を受け、玄関の正面に絵本図書室が完成した。父親グループがペンキを塗り、母親グループが室内装飾を担当しながらできた手作りの絵本図書室である。昼休みや下校前など、子どもたちが自由に絵本を読んだり、保護者が子どもに絵本を読み聞かせたり、談笑したりする光景も見られるようになった。子どもと親の憩いの場・・・それが絵本図書室である。

「開かれた学校」として避難所を開設したが、更に**保護者・地域と一体となった「地域連携型の学校づくり」**への道を歩み始めたところである。

2) 防災管理等の対策と方向性

(1) 危機管理マニュアルの見直し

危機管理の鉄則は**最悪を想定して最善の準備をすること**である。最悪の想定は、大地震・津波・火災の連動型の災害である。本校では、マニュアルを次の通り見直した。

- ① 津波を想定した通学バス走行中の時間ごとの避難場所の設定
- ② 緊急Eメールが使用できない場合の安否確認方法の確立
(職員の居住地区に基づく地区割り担当の設置)
- ③ 緊急時の児童生徒連絡先一覧(第3位まで)と地域の避難場所の掲載

(2) 学校再開までの取組

学校再開までの条件は、上述の通り3点であった。

① バス路線の再構築と安全確認

子どもの多くが避難所や親戚宅等で生活し、生活状況の変化と共に生活根拠地が変わることと併せ、がれきの撤去が進まずバス路線上に危険箇所があった。バス路線の再構築と安全確認が学校再開の必須条件である。今回の場合、4月20日を目途に1回目のダイヤ構築を行い、その後何度も修正し、5月12日の始業式・入学式を迎えた。

② 給食納入業者の確認と再契約

給食納入業者の多くが津波で流され、給食再開のため納入業者の確認と再契約を行った。

③ 医療的ケアを行う看護師の確保

今年度から、医療的ケアを行う看護師5名が直接雇用となった。看護師の安否確認にも時間が掛かり、全看護師の家屋が全壊・半壊状態となり避難所生活をしていた。看護師の確保ということも重要な学校再開の条件となった。

以上の3条件を満たし、行事等の変更で何とか標準授業時数を確保できる日を学校再開日と目標を定め、5月12日を始業式・入学式と決定した。

次に、**学校再開に当たっては、子どもの生活状況や心理的状況を把握することが重要**であると考えた。そこで、**家庭訪問を2期に分けて実施**した。

1期(4月12日～14日)：家庭環境の把握と心理的ケア

2期(4月27日～5月6日)：学校再開に向けた動機付けと心理的ケア

家庭訪問の結果、主に次のような**特徴的な行動**が見られた。

- ・余震に敏感になり、その度に起きたり怖がって泣く
- ・突然泣き出したり、頭をたたく自傷行為や他傷行為が増えた
- ・失禁や夜尿が多くなった
- ・食べたものを吐くことが多くなり急激にやせた

家庭訪問後は、学部主事からの報告を行い、家庭環境や心理的状況の把握と具体的対策を検討し

個別に対応した。

また、子どもたちの心理的ケアとしてボランティアを活用した。

希望する子どもを学校に集めて、作業療法士によるリラクゼーション講座(9名参加)兵庫県の臨床心理士チーム(ひょうごHEART)による「子どもの広場」(絵かき、スポーツ、お菓子づくり等)(48名参加)を開催した。長い避難所生活で子どもも保護者もストレスが溜まっていたが、こうした企画は、子どもが本来持っている活動意欲を喚起し、学校再開に向けた動機付けや期待感を持たせる上で有効であった。

(3) 学校再開後の取組

避難所は5月8日まで運営していたが、翌日2次避難所へ移動した。職員一丸となって5月12日の再開日までに清掃を完了し、学校は一変した。**通常の学習環境に戻ることが重要である**と考えた。学校再開後は子どもたちはみるみる明るさと元気を取り戻した。ストレスから生じる不適応行動が減少し、ほとんどの子どもが本来の姿に近付いていった。学校再開に時間が掛かっただけに、**日常の教育活動が、いかに子どもの心理的安定につながっているのかを再認識する契機にもなった。**

また、ボランティアを活用し音楽的活動を取り入れた行事も意図的に設定した。例えば、自衛隊による演奏会やジャズピアニストによる音楽会の開催である。子どもたちは歌たったりダンスをしたり、どちらも本当に楽しい活動になった。**音楽は、人の気持ちに癒しや活力を与えるセラピー的効果がある**と実感した。

(4) 避難所運営

避難所運営を震災当日から5月8日まで行った経験から、以下のように重要なポイントを整理した。

① 生活の場としての食料・水、トイレ、睡眠の確保

食料・水の確保に苦労した経験から、**災害用備蓄品として児童生徒、職員、地域住民の3日分の食料等を、義援金を活用して整備した。**

水・電気のライフラインが復旧したのは3月18日であった。その間、トイレは室内用プールの水を汲んで使用した。**室内プールの水は、災害用貯蓄水として重要である。**

睡眠も生活上の重要なポイントである。自閉症の子どもがストレスから夜中に突然大声を出すということがあった。それまでは、集団の中でも非常におとなしくしており、ストレスが蓄積し我慢の限界が来た上での行動と思われた。また、医療的ケアが必要な子どもや介護が必要な高齢者もいたことから、**支援のニーズ別に部屋割りを工夫して対応することにした。**

② 組織的な避難所運営

校長を中心とした対策本部の下に避難所運営組織として、**受付、調理、清掃、介助、救護の各班を編成し、班の具体的な仕事内容は一覧にする**などメンバーが交代しても円滑な活動ができるようにした。また、震災後、**避難所運営マニュアルを作成した。**

③ 避難住民の主体的活動の活用と緊急学校支援員等との連携

一貫して本校が主体となって避難所運営を行ってはいしたが、避難住民の中にも主体的な活動により生活改善を図ろうとする意識が芽生えてきた。そこで、**避難住民の自治組織を立ち上げ自治組織の活動を中心として避難所運営ができるように徐々に移行した。**

それに伴い、本校職員の避難所運営には、**県教育委員会が創設した緊急学校支援員を中心**としながら、4月21日まで本校勤務となった転勤予定の兼務発令職員が数名加わった。緊急学校支援員は本校職員OB2名を採用し4月から2か月間の活動となった。二人とも子どもや学校内の施設・設備等も熟知している方々なので安心して避難所運営を任せることができた。

また、**自治組織のリーダー(本校保護者)と石巻市保護課、学校代表が随時話し合い**を持ち、避難所運営の課題解決や学校再開に向けた2次避難所への移転等の問題について協議を重ねた。その結果、5月9日に2次避難所への移転も円滑に行われた。

④ ボランティアの有効活用

3月当初は、ガソリン不足等もあり限られた職員による安否確認や避難所運営を余儀なくされ、職員は疲労困憊状態であった。そこで、ボランティアの有効活用を考え、**教育庁特別支援教育室と連絡を細やかに取りながら、疲労が蓄積した本校職員の負担軽減を図るため人的・物的支援を要請した。**

特別支援教育室では、バスを所有している学校（北部が金成支援学校、南部が船岡支援学校）を中心として近隣の学校の職員を乗せて本校に職員を派遣してくれるシステムを直ちに構築してくれた。**北部（金成・古川支援学校、小牛田高等学園）と南部（船岡・名取支援学校）2チームのボランティアが編成**され、3月18日～30日まで1回10名前後の職員が必要な物資を運びながら、2泊3日で第7団まで切れ目なく本校に来て避難所運営に係る活動を行った。

また、4月からは宮城教育大学の菅井・中井教授の計らいで特別支援教育専攻の**学生ボランティア**を4月末日まで同様の方法で派遣してもらった。ボランティアは本校職員指示の下、食事や清掃等の避難所運営の外に、本校の子どもの心理的ケアとして遊びの活動の実施や兄弟等の勉強の面倒も見た。

更に、**避難所運営の健康管理を徹底させるため養護教諭の派遣を要請**したところ、高校の養護教諭2名を2泊3日で3月22日～28日までの期間、第3団まで派遣してくれた。体調を壊す避難者が増加している時期でもあり、**養護教諭はうがい、手洗いの励行や清掃の徹底等**を呼び掛けるなど環境衛生や健康管理の面で重要な役割を果たした。

（５）関係諸機関・地域との連携

大災害時は、学校独自の力だけでは困難を乗り越えることはできない。本校は、**県教委をはじめとして地域や多くのボランティアの献身的な支援**によって非常時に対処することができた。

「開かれた学校」として、関係諸機関との組織的なネットワーク構築が重要である。

（６）障害児の理解・啓発

大災害時に障害児が地域の小・中学校等に避難して生活できることが肝要である。そのために、普段から障害児が地域行事に参加したり居住地校学習を推進するなど、**地域における障害児の理解・啓発を促進する活動を意図的・計画的に行う必要**がある。

（７）最後の砦・特別支援学校の役割

災害時に障害児が地域の避難所での生活が立ちゆかなくなったときに、救いの手を差し伸べるのが特別支援学校の役割であろうと思う。今回の避難所運営を行ったときに見た介護が必要な老人への本校職員の根気強い献身的なかかわり方に強く心を動かされた。特別な配慮を要する子どもたち

の指導にかかわって体験的に身に付けたものと推察するが、どんな状況下でも、誰と接していても、人と接する上で根源的な姿勢である愛のあるかかわり方の大切さを学んだ思いである。

震災の経験を通し、「特別支援学校の教員は、障害児・者のかかわり方のプロである」と確信することができた。

今後、特別支援学校が障害児・者の福祉避難所として機能するためには、ハード・ソフト両面の充実とそのための法的整備が必要であると考えます。



Ⅶ 資料

○学校の概要

1 沿革の概要

- ・昭和 52 年 4 月 1 日 宮城県立光明養護学校石巻分教室として、石巻市立湊小学校内に設置（小学部 2 学級）
- ・昭和 53 年 4 月 1 日 中学部を増設、分教室を石巻市立山下小学校内に移転（小学部 4 学級、中学部 1 学級）
- ・昭和 54 年 4 月 1 日 宮城県立光明養護学校石巻分校に昇格（小学部 7 学級、中学部 2 学級）
- ・昭和 55 年 4 月 16 日 通学バス運行開始
- ・昭和 57 年 9 月 24 日 石巻市立山下小学校の校舎改築に伴い、校舎を石巻市立湊小学校に移転
- ・昭和 58 年 3 月 16 日 新校舎落成（2,006 m²）、石巻市立湊小学校より移転
- ・昭和 58 年 4 月 1 日 宮城県立石巻養護学校として独立開校、初代校長 藤原次丸 着任（小学部 10 学級、中学部 4 学級）
- ・昭和 58 年 4 月 28 日 開校式
- ・昭和 59 年 2 月 15 日 体育館落成（644 m²）
- ・昭和 60 年 4 月 1 日 2 代校長 中島隆男 着任（小学部 10 学級、中学部 8 学級）
- ・昭和 61 年 3 月 15 日 給食棟落成（243 m²）
- ・昭和 61 年 10 月 19 日 校歌制定披露
- ・昭和 61 年 11 月 20 日 自主公開研究会「他との望ましいかかわり合いを育てる指導法について」
- ・昭和 63 年 4 月 1 日 高等部設置、3 代校長 木村得之 着任（小学部 13 学級、中学部 8 学級、高等部 1 学年 1 学級）
- ・平成元年 3 月 31 日 高等部校舎完成（1,600 m²）
- ・平成元年 4 月 1 日 高等部学級増（小学部 13 学級、中学部 10 学級、高等部 1・2 学年各 1 学級）
- ・平成元年 5 月 15 日 高等部校舎落成披露式
- ・平成 2 年 1 月 12 日 第 1 回石巻養護学校児童生徒作品展（ファミリーショップ・ホシノ）
- ・平成 2 年 4 月 1 日 高等部学級増（小学部 14 学級、中学部 9 学級、高等部 1・2・3 学年各 1 学級）
- ・平成 3 年 7 月 17 日 低学年用プール完成
- ・平成 3 年 12 月 9 日 体育館暖房設備設置
- ・平成 5 年 11 月 17 日 創立 10 周年記念事業（式典、記念植樹、記念誌発行）
- ・平成 6 年 4 月 1 日 4 代校長 梅津義郎 着任（小学部 17 学級、中学部 11 学級、高等部 3 学級）
- ・平成 6 年 8 月 27 日 よい歯の学校連続表彰（小学部 5 年連続、中学部 6 年連続）
- ・平成 6 年 11 月 4 日 宮城県心身障害児社会参加と自立・就学啓発推進会議開催
- ・平成 7 年 6 月 4 日 みやぎ県民大学 学校開放講座「ボランティア教室」開校
- ・平成 7 年 9 月 2 日 よい歯の学校表彰「優秀賞」（小学部 6 年連続、中学部 7 年連続）
- ・平成 8 年 4 月 1 日 5 代校長 酒井保 着任（小学部 18 学級、中学部 11 学級、高等部 3 学級）
- ・平成 9 年 2 月 7 日 自主公開研究会「意思を現す個を育てるための望ましい指導の在り方について」
- ・平成 9 年 4 月 1 日 平成 9・10 年度「早期教育相談等の在り方に関する実践研究」（特殊教育センター主催事業）のモデル地区基幹校として協力
- ・平成 10 年 2 月 13 日 早期教育相談会実施
- ・平成 10 年 4 月 1 日 6 代校長 遠藤勝雄 着任（小学部 14 学級、中学部 11 学級、高等部 5 学級）
- ・平成 10 年 9 月 22 日 特殊学級と養護学校の授業見学会、研修会実施
- ・平成 11 年 3 月 31 日 増築校舎並びに屋内プール落成
- ・平成 11 年 6 月 1 日 増築校舎並びに屋内プール落成記念式典
- ・平成 11 年 8 月 26 日 給食棟（下処理室・検査室）増築
- ・平成 13 年 4 月 1 日 7 代校長 佐々木洋 着任（小学部 11 学級、中学部 9 学級、高等部 11 学級）
- ・平成 13 年 9 月 30 日 小学部校舎棟前校庭暗渠張芝整備
- ・平成 13 年 10 月 29 日 第 1 回全国障害者スポーツ大会「ふれあい広場」に石巻まつり太鼓参加
- ・平成 13 年 11 月 10 日 「情報通信技術（IT）講習」障害者向け講習会開講（受講者 4 名）
- ・平成 14 年 3 月 25 日 校内 LAN 整備
- ・平成 14 年 9 月 18 日 宮城県心身障害児社会参加と自立・就学啓発推進会議開催
- ・平成 15 年 4 月 1 日 8 代校長 門脇啓一 着任（小学部 11 学級、中学部 6 学級、高等部 12 学級）
- ・平成 15 年 9 月 5 日 遊歩道設置
- ・平成 15 年 11 月 7 日 創立 20 周年記念事業（式典、記念植樹、記念誌発行）
- ・平成 16 年 4 月 1 日 「共に学ぶ教育推進事業（居住地交流）モデル校」として宮城教育委員会より指定
- ・平成 17 年 4 月 1 日 9 代校長 阿部慶吾 着任（小学部 11 学級、中学部 6 学級、高等部 12 学級）

- ・平成 17 年 9 月 14 日 高等部校舎棟屋上防水改修
- ・平成 18 年 7 月 1 日 ボランティア養成事業モデル校指定（2 年間）
- ・平成 18 年 8 月 25 日 東門扉（正門）改修及び車寄せ設置
- ・平成 19 年 6 月 18 日 プール上屋根鉄骨部塗装改修
- ・平成 19 年 9 月 10 日 第一校舎（管理・中学部棟）屋上防水改修工事
- ・平成 20 年 4 月 1 日 10 代校長 勝倉成紀 着任（小学部 18 学級，中学部 6 学級，高等部 12 学級）
- ・平成 20 年 9 月 2 日 高等部職員室屋上及び高等部昇降口屋根防水改修
- ・平成 20 年 9 月 19 日 給水管（第一校舎棟・給食棟・体育館）全面改修
- ・平成 20 年 12 月 24 日 防犯システム設置
- ・平成 21 年 4 月 1 日 宮城県立石巻支援学校と改める
- ・平成 21 年 4 月 1 日 文部科学省委託「自閉症に対応した教育課程の在り方に関する調査研究事業研究協力校」として宮城県教育委員会より指定
- ・平成 21 年 8 月 31 日 高等部棟給水管改修
- ・平成 22 年 4 月 1 日 11 代校長 櫻田博 着任（小学部 16 学級，中学部 8 学級，高等部 13 学級）
- ・平成 22 年 9 月 14 日 高等部第二校舎落成
- ・平成 22 年 12 月 17 日 平成 22 年度 文部科学省委託 特別支援教育総合推進事業
「自閉症に対応した教育課程の編成等についての実践研究」授業公開（215 名参加）
- ・平成 23 年 2 月 8 日 高等部公開授業研究会「相手の思いを受け止め自分の思いを伝えることのできる生徒の育成を目指して」（54 名参加）

2 児童生徒数の推移

年度	小学部			中学部			高等部			小計		合計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	
S58	25	17	42	10	6	16				35	23	58
S59	23	15	38	20	8	28				43	23	66
S60	26	14	40	23	8	31				49	22	71
S61	29	14	43	20	7	27				49	21	70
S62	35	13	48	17	7	24				52	20	72
S63	35	11	46	19	13	32	7	4	11	61	28	89
H1	36	12	48	20	15	35	14	7	21	70	34	104
H2	40	13	53	16	16	32	21	8	29	77	37	114
H3	43	14	57	16	7	23	16	14	30	75	35	110
H4	40	18	58	21	5	26	16	14	30	77	37	114
H5	34	19	53	25	5	30	17	16	33	76	40	116
H6	30	17	47	22	8	30	19	13	32	71	38	109
H7	29	16	45	18	8	26	22	11	33	69	35	104
H8	26	16	42	21	10	31	18	11	29	65	37	102
H9	21	14	35	21	9	30	25	10	35	67	33	100
H10	23	10	33	25	11	36	23	16	39	71	37	108
H11	25	10	35	21	13	34	32	15	47	78	38	116
H12	24	9	33	20	11	31	33	14	47	77	34	111
H13	21	9	30	18	10	28	36	13	49	75	32	107
H14	15	11	36	19	8	27	36	21	57	70	40	110
H15	25	12	37	13	8	21	40	21	61	78	41	119
H16	24	12	36	15	7	22	40	23	63	79	42	121
H17	23	12	35	15	8	23	37	18	55	75	38	113
H18	28	17	45	19	7	26	27	19	46	74	43	117
H19	33	22	55	18	7	25	39	19	58	90	49	138
H20	40	25	65	13	8	21	44	21	65	97	54	151
H21	39	19	58	14	15	29	57	23	80	110	57	167
H22	39	19	58	15	14	29	51	20	71	104	54	158
H23	34	16	50	21	15	36	41	21	62	96	52	148



3 学校運営の基本方針

1 校訓

健康 明朗 敬愛



2 学校教育目標

一人一人の障害の状態及び特性等に応じた適切な教育を行い、健康で人間性豊かな児童生徒を育成する。

- (1) じょうぶで、元気な児童生徒
- (2) 明るく、すなおな児童生徒
- (3) 仲良く、助け合う児童生徒
- (4) くじけず、がんばる児童生徒

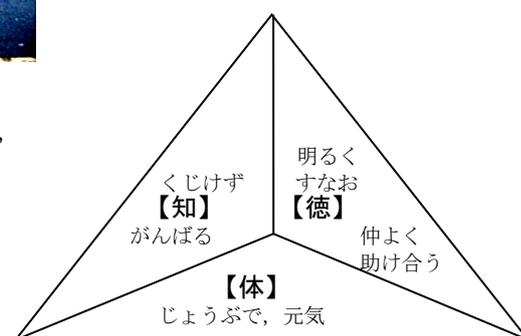


図 学校教育目標の概念図

3 学校経営方針

教育公務員としての崇高な使命と職責を自覚し、職員相互の人間関係を醸成し、校訓「健康 明朗 敬愛」を基調に明るく活気ある職場づくりを推進すると共に、全力を挙げて職務の遂行に努める。

(1) 生き生きとした学校 ー児童生徒一人一人を生きし伸ばす学校ー

児童生徒一人一人の障害の状態や教育的ニーズを的確に把握し、個に応じた計画的・継続的な授業実践

を推進し、その可能性を最大限に引き出す教育の充実に努める。

(2) 力強い学校 ー常に前進する学校ー

教職員一人一人が実践的研究を積極的に推進・公開し、教職員としての専門性や指導力を高め、総合

的

な評価活動を通して常に教育活動の改善に努める。

(3) 美しい学校 ー安全・安心な学校ー

美しく安全・安心な学習環境が健全な児童生徒を育成することにかんがみ、生活・学習環境を絶えず創意・工夫し、施設・設備の整備・改善を行い快適な学習環境を提供する。

(4) 開かれた学校 ー地域の中で成長する学校ー

計画的、継続的な交流及び共同学習（居住地校学習や学校間交流等）を推進すると共に、地域の施設及び人材を活用した特色ある教育活動の推進や関係諸機関と連携した教育相談活動の充実に努める。

(5) 地域に貢献する学校 ー地域の特別支援教育のセンター的機能を果たす学校ー

地域の保育所、幼稚園、小・中学校、高等学校等に対して指導・支援機能、相談・情報提供機能、連絡・調整機能を果たす責務があることにかんがみ、地域の特別支援教育の中心的なセンターとして計画的・積極的活動を展開する。

4 本年度の努力点

(1) 一人一人の教育的ニーズに応じた学習指導の充実

- ①新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育課程の編成
- ②個別の教育支援計画、個別の指導計画の見直しと適切な活用
- ③系統的進路指導の充実 ④特別支援連携協議会の構築 ⑤情報教育の推進

(2) 教職員一人一人の授業力と専門性の向上

- ①主体的な研修・研究推進 ②創意・工夫のある現職教育の推進

(3) 命を守り育てる教育の徹底 ー安全・安心で快適な生活・学習環境づくりー

- ①健康教育の推進 ②危機管理マニュアルの整備と実際の訓練
- ③安全点検と快適な生活・学習環境の提供 ④教師の率先垂範による「美しい学校」づくり

(4) 地域と連携・協力した教育活動の推進

- ①交流及び共同学習の推進 ②地域人材・施設の活用 ③地域の関係諸機関と連携した相談活動の推進
- ④積極的生徒指導の推進 ⑤外部アンケートの実施と説明責任 ⑥計画的な情報提供

(5) 地域の特別支援教育のセンター的機能の充実

4 平成23年度職員名簿

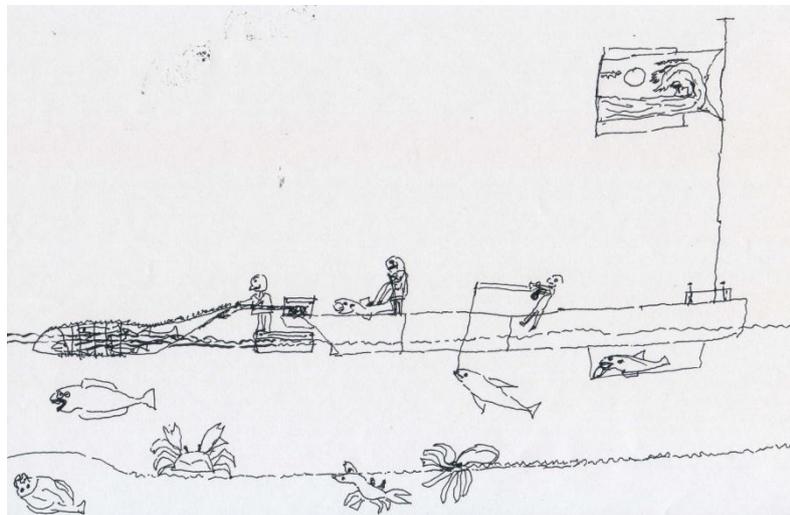
No.	職名	氏名	所属	校務分掌	No.	職名	氏名	所属	校務分掌
1	校長	櫻田 博		校務全般	55	教諭	千葉 由美	高等部2年	研究部
2	教頭	梶野 和夫		校務全般	56	教諭	小田 島 協	高等部3年	研究部
3	教頭	及川 功次郎		校務全般	57	教諭	板橋 弘典	中学部3年	教務部 学校祭委員
4	主幹教諭	横山 武弘	教務部	教務主任 石巻教育研究会担当	58	教諭	房 間 梢	高等部2年	研究部
5	教諭	武山 律夫	中学部1年	進路指導部 プール指導委員	59	教諭	小野 裕介	高等部3年	運動会委員長
6	教諭	鈴木 真知子	小学部6年	進路指導部 学校祭委員	60	教諭	五十嵐 尚平	高等部1年	生活指導部長
7	教諭	佐藤 伸	小学部	小学部副主事(1~3年統括) 教務部	61	教諭	矢田 翼	中学部2年	学校祭委員長
8	教諭	佐藤 久悟	高等部	高等部主事 教務部 入学者選考委員長	62	教諭	櫻井 育子	高等部3年	地域支援部 学校祭副委員長
9	教諭	宍戸 誠	高等部2年	教務部 プール指導委員	63	教諭	鈴木 麻由子	高等部1年	地域支援部 学校祭委員
10	教諭	千葉 雄一	小学部1組	教務部 プール指導副委員長	64	教諭	細川 千春	小学部4組	情報教育部 学校祭委員
11	教諭	辻のぶ子	高等部3年	情報教育部 運動会委員	65	養護教諭	鈴木 純子	保健室	保健主事 医療的ケアコーディネーター
12	教諭	戸田 慎一	中学部1組	生活指導部 運動会委員	66	養護教諭	澁谷 純子	保健室	保健・給食指導部
13	教諭	柴田 喜一郎	小学部	小学部主事 教務部	67	実習講師	村田 博子	小学部4組	安全指導部 学校祭委員
14	教諭	岩崎 邦彦	中学部2年	安全指導部 副部長 運動会委員	68	講師	武川 雅子	小学部6組	保健・給食指導部 学校祭委員
15	教諭	清 敬司	高等部1年	情報教育部長	69	講師	佐藤 まちこ	小学部7組	教務部 運動会委員
16	教諭	越名 淳子	小学部2組	研究部	70	講師	鹿又 義弘	中学部3組	情報教育部 作品展委員
17	教諭	太田 澄江	中学部2組	地域支援部 学校祭委員	71	講師	長谷川 史奈	高等部1組	保健・給食指導部 運動会委員
18	教諭	森 佳美	中学部	中学部主事 教務部	72	講師	佐々木 武人	高等部3年	教務部 作品展委員
19	教諭	亀山 順子	小学部	小学部副主事(4~5年統括) 地域支援部 副部長	73	講師	鈴木 裕子	小学部3組	保健・給食指導部 運動会委員
20	教諭	佐藤 裕志	小学部4組	安全指導部長	74	講師	村上 典子	高等部3年	安全指導部 運動会委員
21	教諭	菅原 康	小学部2年	生活指導部 副部長	75	講師	佐々木 恵	小学部6組	進路指導部 プール指導委員
22	教諭	早坂 多美恵	高等部	高等部副主事 教務部	76	講師	前森 雄一郎	小学部5年	情報教育部 プール指導委員
23	教諭	菅原 みき	中学部訪問	教務部	77	講師	齋藤 里佳子	中学部1年	生活指導部 運動会委員
24	教諭	亀谷 征功	中学部2年	研究部 副部長	78	講師	阿部 ひろみ	中学部1組	情報教育部 プール指導委員
25	教諭	仁木 久恵	高等部2組	生活指導部 プール指導委員	79	講師	西村 和佳子	中学部3年	保健・給食指導部 プール指導委員
26	教諭	菊地 裕美	小学部5組	教務部 作品展副委員長	80	代 習 助 手	尾形 ひとみ	高等部2年	保健・給食指導部 プール指導委員
27	教諭	中村 陽子	地域支援部	地域支援部長 特別支援教育コーディネーター	81	事務室長	高橋 紀彦	事務室統括 スクールバス 財産管理 出納審査	
28	教諭	三浦 啓宏	進路指導部	進路指導主事 進路指導部長	82	主 事 (事務次長)	小野 寺 富雄	歳出事務 委託業務等事務 施設設備の管理維持	
29	教諭	菅原 俊浩	高等部3組	安全指導部	83	主 査	小松 純子	給与歳入事務 調査統計	
30	教諭	但馬 美恵子	中学部1組	長期研修	84	主 事	細川 智恵	旅費 福利厚生	
31	教諭	佐藤 恵	小学部1年	地域支援部 プール指導委員	85	技 師	石森 沙央里	学校給食全般に関すること 保健・給食指導部	
32	教諭	鈴木 奈穂子	高等部1組	研究部	86	技 (<small>事務</small>) 師	鈴木 建一	校舎内外管理・整理・整頓 用達 火気の始末	
33	教諭	植松 美奈子	高等部3年	作品展委員長	87	技 (<small>事務</small>) 師	黒 須 彰一	校舎内外管理・整理・整頓 用達 火気の始末	
34	教諭	片岡 明恵	教務部	副教務主任 研究部 副部長	88	臨 時 職 員	日野 由美	文書授受 旅費 証明書	
35	教諭	今野 由紀子	小学部1年	研究部長	89	就 労 支 援	小 高 弘美	就労支援	
36	教諭	大内 和恵	小学部6年	生活指導部 学校祭委員	90	就 労 支 援	今 泉 隆一	就労支援	
37	教諭	宮 里 淳	小学部6年	安全指導部 運動会副委員長	91	緊 急 学 校 支 援	宮 川 和子	避難所対応	
38	教諭	佐久間 理恵	中学部	中副主事 保健・給食指導部 (給食主任)	92	緊 急 学 校 支 援	渡 辺 桂子	避難所対応	
39	教諭	工藤 隆則	小学部7組	安全指導部 運動会委員	93	調 理 員	宍戸 節子	給食	
40	教諭	小田 島 葉子	小学部1年	進路指導部 作品展委員	94	調 理 員	渡 部 淑子	給食	
41	教諭	梶原 春江	高等部2年	生活指導部 学校祭委員	95	調 理 員	津田 るみ子	給食	
42	教諭	木村 雅江	中学部3年	研究部	96	調 理 員	橋本 くに子	給食	
43	教諭	色川 信子	小学部4年	保健・給食指導部長	97	調 理 員	木 村 忍	給食	
44	教諭	今野 修	小学部4年	研究部	98	看 護 師	鈴木 佳子	医療的ケア	
45	教諭	木村 圭見	中学部3組	研究部	99	看 護 師	鈴木 めぐみ	医療的ケア	
46	教諭	平塚 由美子	中学部3年	教務部 運動会委員	100	看 護 師	須田 知晶	医療的ケア	
47	教諭	佐々木 幸司	小学部3年	情報教育部 副部長	101	看 護 師	小池 智枝	医療的ケア	
48	教諭	佐藤 みつ江	小学部3年	育児休業中	102	看 護 師	遠藤 千佳	医療的ケア	
49	教諭	松浦 義勝	高等部2年	プール指導委員長		管理校医	阿部 淳一郎	内科	
50	教諭	荒井 はるか	小学部3年	研究部		校医	森 秀 行	眼科	
51	教諭	千葉 圭一	小学部5年	研究部		校医	佐藤 三吉	耳鼻科	
52	教諭	秋山 真希	小学部1組	研究部		校医	佐々木 一久	歯科	
53	教諭	鈴木 瑞穂	高等部3年	進路指導部 副部長		校医	宮城 秀晃	精神科	
54	教諭	石井 真希子	中学部2組	安全指導部 学校祭委員		薬剤師	土佐 貴弘	薬剤師	

平成22年度退職転出職員

教頭 滝川 雅啓
教諭 長澤 静枝
教諭 森 雅彦
教諭 小山 由美子
教諭 宮川 和子

平成22年度転出職員

教頭	鈴木 真利子	宮城県特別支援教育センター
主幹教諭	早坂 幸一	宮城県立古川支援学校
教諭	藤原 澄	宮城県立古川支援学校
教諭	勝然 正人	宮城県立利府支援学校
教諭	佐藤 栄子	宮城県立金成支援学校
教諭	阿部 竹志	石巻市立桃生中学校
教諭	石井 千佳子	宮城県立金成支援学校
教諭	高橋 佳代	宮城県立利府支援学校
教諭	桜井 真	宮城県立古川支援学校
教諭	齋藤 和歌子	宮城県立迫支援学校
養護教諭	佐藤 浩子	涌谷町立小里小学校
講師	熱海 聡子	栗原市立若柳小学校
講師	細川 泰範	宮城県立利府支援学校
講師	寶 智明	石巻市立門脇中学校
講師	高橋 智子	石巻市立広瀬小学校



あ と が き

東日本大震災のあの日から8か月、季節は、晩秋から初冬へ移り変わろうとしています。晩秋の日差しのなか校庭で遊ぶ子どもたちの表情は穏やかで、震災のころの表情とは違って見えます。

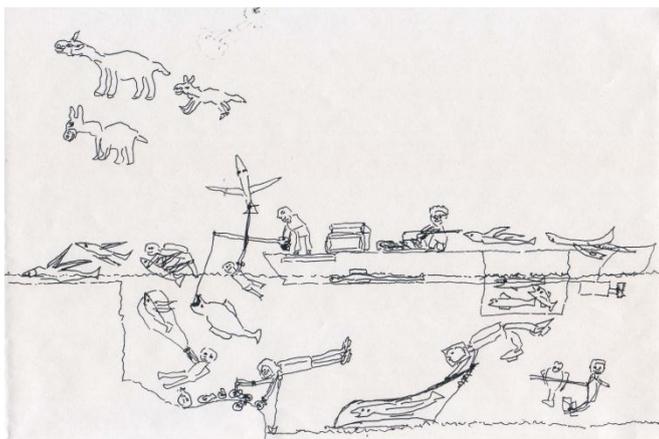
石巻支援学校は、元々、地域の指定避難所、福祉避難所ではありませんでした。しかしながら、震災直後から、「学校は地域のものだから、地域が必要としているときは地域に返したい」という校長先生のその言葉から、避難所として地域の人や在校生・卒業生の家族、日本赤十字社石巻病院や他の避難所から送れてくる様々な介護が必要なお年寄りや病気の方に、学校開放し避難所として展開してきました。

指定避難所でないところからの避難所開設、まさに何もなかったところからのスタートでした。学校に備蓄の備品や食料があるわけではなく、食料の調達に走り回ったり、急場をしのぐため職員がいろいろなアイデアを出しあいながら進めてきました。しかし、学校だけでできることには限りがありました。それを救ってくれたのは、やはり地域の力でした。地域の方がお世話になったということで、学校の前にある農家の方が、たくさんの食べ物を届けてくれたり、近くの工務店からおにぎりの差し入れがあったり、市議員さんが炊きだしをしてくれたり、多くの方々の支援を受けることができました。また、支援の輪は、避難所開設以降大きな広がりを見せ、他の支援学校から協力教員として先生方の派遣や宮城教育大学の学生ボランティアの派遣の支援を受けることができました。さらに、全国の皆さんからのたくさんの支援物資をいただいたり、ボランティアとして活動していただいたり、その支援の輪は途切れることなく今日まで続いています。

これも、常日ごろからの地域と学校の結び付きがあったからだと思います。地域に開かれた学校でありたいと、学校見学会、運動会、学校祭、児童生徒作品展等々の学校行事をとおして、地域との結び付きを開校以来積み上げてきたからこそ、地域の中の支援学校でありえたのだと思います。また、学校の様子を尋ねてきたマスコミからの取材に応じて現状を正確に伝える努力をしてきたことも、全国からの支援の輪を広げる原動力になっていたことは間違いのないことです。全国に広がった支援の輪は、今や本校にとっては貴重な財産となっています。本当に感謝の気持ちに堪えません。

最後に、校長先生の「私たちは、地域とともにある学校として、特別支援教育の教員として、それぞれがやってきたことをやっただけです。それが良かったのか、悪かったのか。それはわかりません。なにより大切なのは、支援学校としての存在意義です。今回のような非常時、それぞれが辛い状態に陥ったときこそ、卒業生、在籍性を含め、何かしらの支援が必要な人たちのよりどころとして支援学校は存在するのです。」という言葉を結びにして、東日本大震災からの学んだことを教訓として、石巻支援学校に関係する多くの方のメッセージが後世につながる資料として活用されていくことができれば幸いです。

教頭 昆野和夫



宮城県立石巻支援学校

〒986-0861

石巻市蛇田字新立野410番の1

TEL 0225-94-0202

FAX 0225-94-0206

Eメール : ishinomaki-hs@pref.miyagi.jp

web ページ : <http://sekiyou.myswan.ne.jp>